神様からもらった遺産は異世界でした

夢語部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様からもらった遺産は異世界でした

【Ｎコード】
Ｎ６６４７Ｔ

【作者名】
夢語部

【あらすじ】
定年まで半年、ゲームオタクだけど平凡で独身のサラリーマンが事故で死亡。不思議なことにゲーム「迷宮都市の冒険者達」で作成したキャラクターに転生した。田舎で畑でも耕しながらのんびりと暮らしたいと願う主人公だが、どんどんと物語に巻き込まれていきます。「目覚めると、見知らぬ部屋に居た」そんなありきたりの異世界転生・主人公最強のファンタジーです。神から遺産として世界を貰った主人公ですが、全能の神になった訳ではなさそうです。果たして、神の遺産とは？※「騎士王物語」のリメイク版です。

第二章7話の後半からストーリが分岐します。

プロローグ

「ゴホッ、ゴホッ、……」
広くて真っ白で清潔な部屋の中央に、ただ一つのベッドが置かれ、ベッドの上の２０代の若者が咳きの発作に襲われていた。
若者は肺病を患った病人のようにやせ細り、青白い顔で弱々しく苦しそうに咳きをしている。
観音菩薩を思わせる若い美女が若者の背をまるで恋人のようなしぐさで優しく擦った。

暫くすると、咳の発作が納まった若者は仰向けに横になった。すぐに若い美女がベッドの掛け布団を整えた。
「ミロク。そろそろ時間のようだ」
若者は注意していても聞き取れないほど小さな掠れた声を出した。
「はい。マスター」
「命令した通りのタイミングで、「迷宮都市の冒険者達」を配布してくれ。このゲームがキーになるだろう」
「はい。マスター」
「再生した俺なら、きっと生き延びることができる」
「しかし、マスター。再生するとは言っても、マスターの人格は完全に消滅します。新しいマスターは魂が同じでも、まったくの別人になるでしょう」
「あの高次元領域では、流石に人格を維持できないよ。人格が消滅するのは防ぎようがない。しかし、新たに生まれた人格はあの世界の次元位相がベースになる。
ソウルパワーが9倍に増幅されるはずだ。それに、基本的な人格は変わらない。きっと、新しいマスターが気に入るさ」
「しかし、私にとっては、あなたとは別人であることに変わりはありません」

「そうだな、……だが、諦めてもらうしかない。お前を残して行くことになるが、後を頼むぞ」

若者は眠ったかのように、静かに目を閉じた。

プロローグ（後書き）

「騎士王物語」のプロローグを流用して、少しだけ手を加えました。

現時点ではストーリの終わりが不確定なので、ストーリが固まったら大幅に変更する可能性があります。

1話

０時２６分。
ＪＲ東海道線の電車が戸塚駅で止まった時、腕時計の針が指していた時間だ。
東京駅から約４０分、ぐっすりと眠り込んでいた俺は、電車が減速する時には目を覚まし、戸塚駅であることを確認して、電車を降りた。
始発駅の東京駅から乗車するので、次の電車に並べば、必ず座ることができる。３０年近くも通い続けた甲斐あって、電車が動き出す頃にはぐっすりと眠り、戸塚駅に着く頃に目を覚ますことができる。
電車から降りると、人の流れに乗って改札口に向かった。深夜のこんな時間なのに、電車からぞろぞろと背広姿のサラリーマンが降りて改札口へ流れていく。
自動改札を通勤定期でパスして、駅の階段を下りる。
駅から出るとすぐに胸ポケットからタバコを1本だけ取り出し、同じく、胸ポケットから愛用のジッポを取り出して火をつける。完全に習慣化しているので半分眠った状態だ。タバコを一息吸って、やっと目がさめてくる。
俺の名前は大門将人（だいもんまさと）。５９歳の何処にでも居る平凡なサラリーマンだ。
最近、疲れが溜まっているのか、変な夢を見る。夢の内容を覚えている訳ではない。目覚めたときにおかしな夢を見たと言う感覚が残っているだけだ。
先程、電車で眠っている間も、その夢を見た。
タバコを吸いながら、どんな夢だったかを考えた。
誰かと話をしていたような気がするが、相手のことも話の内容も

まったく覚えていない。
定年まであと半年、孫が居ても可笑しくない年齢だ。実際に兄と妹の所は孫が居る。なのに、俺は独身男性のサラリーマンだ。
贅沢をしなければ退職金もあるので、老後を生きていく金は十分にあるが、自分でも寂しい人生だと思う。
何時の頃から落ちこぼれたのか、入社した頃はばりばりと仕事をこなし、出世コースに乗っていた。若い頃に剣道と空手で鍛えた体力のおかげで、徹夜続きでも平気だった。他の競争相手を完全に引き離していた。
同期の中で一番に主任に出世したにも拘らず、落ちこぼれてしまった。
落ちこぼれた原因は何だったのか、上司との人間関係なのか、独身なのがいけなかったのか、あるいは、俺の趣味が原因なのか……。
俺はＰＣゲームに熱中し、ゲーム機を買い揃え、オンラインゲームにのめり込んだ。しかし、仕事は人並み以上にこなしたし、コンピュータ関連の会社だったためか、俺以外にもゲームに熱中していた者は大勢いた。
落ちこぼれの原因は一つではないのだろう、俺の人付き合いの悪さと独身であることと、ゲームを趣味にしていることなど。
結局、運が悪かったのだろう。
仮に、昔に戻って人生をやり直すチャンスを貰ったとしたら……。
普通の人は、こんなチャンスを貰えれば喜んで人生をやり直すのだろう。しかし、俺はそんなチャンスが欲しいとは思わない。人生をやり直して果たして今よりも良くなるのか、やり直しても同じことをやっていれば結局は同じ結果になる。違う仕事を選んでも、趣味がゲームで独身で落ちこぼれているに違いない。
……いつの間にか、駅前の交差点についた。
俺は、ふと、なんでこんなことを考えているんだと疑問に思ったが、ちょうど歩行者用信号が青になり、固まって待っていた歩行者達が交差点を渡り始めたところだ。

俺も信号が変ってしまう前に交差点を渡ってしまおうと思い、早足で交差点へ向かい、交差点を斜めに歩いた。ちょうど、交差点の中心にさしかかった時、後ろを何気なく振り返った。

……目の前に巨大なトラックがいた。

俺は無意識の内に、突っ込んでくるトラック対して横に避けようとした。横方向に避けるために、一旦、体を沈め、そして、思いっきりジャンプしようとした。

俺が後ろを振り向いてから、トラックにぶつかるまでの時間は一瞬だったはずだ。しかし、まるでスローモーションで再生されているかのように、自分の体の動きを意識していた。トラックの運転手がハンドルに被さって寝ているのが見えた。

何故か、恐怖はなかった。

なんともつまらない人生だったなと思っていると、トラックのフロントに体がめり込み、恐ろしい衝撃を感じた。

……ふと気づくと、俺は、何もないところにいた。

目を開いているのか閉じているのか分からないぐらい真っ暗なところだ。

ここがどこなのか、何が起きたのか思い出そうとして、すぐにトラックにぶつかった瞬間のことを思い出した。

……俺は死んだのか？　すると、ここは死後の世界か？

死後の世界が本当にあるとは信じられん。

俺は死後の世界があるとは信じていなかった。死んだら自意識は消滅してしまうだろうとなんとなく思っていた。

何故か分からないが、俺は恐怖をまったく感じていなかった。今

の俺は幽霊になっているのだろうかと呑気に考えていた。
自分の体の状態を確かめたくても何も見えない、それに、金縛りにあったように体を動かすことが出来ない。
霊界に関する本で、死ぬと自分の体の近くにいて、自分の葬式を見学したりすることが良く書かれている。
世間の出版社はノストラダムスの１９９９年の予言と同じで、とんでもないデマを平気に本にして売っていると言うことだ。しかし、死ぬと幽霊になって自分の近くに漂い、暫くしたら天国に行くのだと言うことを一体どれだけの人が信じているのだろうか。
ノストラダムスの予言は、２０００年を迎え２１世紀になった時点で大嘘であることが判明したが、死後の世界は大嘘だと言う事実は、永遠に世間に伝わることはないのだろう。
……どれぐらい時間が過ぎたのか？　現実世界では一瞬なのか、それとも、何日も過ぎてしまったのだろうか。
……ふと、正面に針の先ほどの小さな光が見えた。そして、光が近づいているのか、徐々に大きくなってきた。
針の先から、豆粒ぐらいの大きさになるのに、少し時間がかかったように思うが、豆粒の大きさからはあっという間に大きくなり、光の中心に人がいることに気づいた。
それはすぐに、俺の目の前にやってきた。
きれいな着物をまとった美しい女性が眩しいぐらいに輝いていた。
２０歳ぐらいの若々しい顔をしているが年齢は分からない、恐ろしく長い年月を経験していると思わせる何かがある。
その女性が普通の人間でないこと、それどころか神と呼ぶ存在に近い者。まるで、観音菩薩が具現化したような女性だと思った。
その女性は魂の内側を見透かすかのように、じっとこちらを見つめていた。
「探査完了。波形パターンが完全に一致しました」
頭の中で、若々しい女性の声が響き渡った。そして、女性がにっこりと微笑んだ。

俺は悪魔に魅入られたかのように、優しく微笑む女性を見つめ続けていた。
女性は右手を上げると手のひらを上にした。
「あなたは、どなたですか？」
俺は我に返ると、目の前の女性に尋ねたが、女性は俺の声が聞こえなかったかのように無視した。
女性の手のひらの上に、黄金色に眩しく光る玉が浮かんだ。そして、美しい女性は唇をすぼめると、黄金色に輝いている玉を軽く吹いた。
黄金色の輝きが眩しすぎて玉の大きさがよく分からなかったが、光の玉は俺の方に飛んできた。そして、俺の体の中に入り込んだように思えた。
「これで主人の最後の命令を達成することができます」
女性は、笑みを浮かべながら独り言を呟いた。
「なんだって、いったいどうなってるんだ！」
俺は大声で怒鳴ったと思う、しかし、いきなり眠くなって、すぐに眠りに陥るように意識を失った。

1話（後書き）

「騎士王物語」の1話、2話を流用して、少しだけ手を加えました。感想で指摘されていた点を反映したつもりです。内容は殆ど変っていません。

2話

……目覚めると、見知らぬ部屋に居た。
どうやらベッドの中で、仰向けに寝ているようだ。
首まで布団を被っており、布団の温もりがとても心地良い。
このまま気持ちよく寝ていたい、……。

「……あっ！」
俺は、トラックに跳ねられて死んだことを思い出して、慌てて、体を起こした。

……とても狭い部屋だ。
6畳ぐらいの広さだと思うが、縦に長いので4畳半の部屋のように感じる。
窓に分厚いカーテンが掛けられているので部屋の中は薄暗いが、外は太陽が昇っているようだ。
家具は質素なタンスとテーブルに椅子だけ。テーブルの上には濃い青色のウェストバックが置かれている。家具も部屋も時代遅れのデザインで、随分と年季が入っているようだ。

扉の横に鏡を見つけた。
木製の洗面器とタオル、水差しにコップ、床に木製のバケツ。……洗面台のようだが、随分と時代遅れだ。ここが病院だとは、到底思えない。
先程から違和感を感じているのだが、それが何なのか良く分からない。

……ベッドの横に、ブーツが置かれているのを見つけた。
俺は布団を横に剥いで、ブーツに足を入れた。まるで使い込んで

いるかのように足に馴染んだ。
立ち上がって自分の体を見るとシャツとバンツの下着しか身に着けていなかった。そして、違和感の原因が分かった。
……随分と痩せている。それに視線が高い。自分の体じゃないみたいだ。
自分の体を確かめるために、扉の横の洗面台に急いで近づいて鏡を覗いた。そして、息を呑んで固まってしまった。

……そこには、高校1年か2年ぐらいの美少年が写っていた。
手で頬を撫でてみると、鏡の中の美少年も手で頬を撫でた。
鼻筋がすっきりと通っており、髪は癖の無い黒髪で短めに整えられている。大きな目に長い睫毛。目の色は濃くて澄んだ青い色。ジィッと目を見つめると、引き込まれてしまいそうな妖しげな魔性の魅力がある。中性的な顔立ちでボーイッシュな超美少女にも見える。

後ろに下がり、シャツを脱いで上半身を鏡に映してみた。
細身だが、腹筋は見事に割れており、スポーツ選手のように鍛えられた体だ。細身で瞬発力にあふれている感じで、これ以上はないと言うほど理想的な体。テレビで見た若きダビデ像のようだと思った。

身長は１７７ｃｍか１７８ｃｍぐらい、……俺よりも１０ｃｍも背が高い。

体重は７０ｋｇ、いや、６５ｋｇぐらいだろう。……俺よりも２０ｋｇも軽い。

鏡の少年は、銀色の太い鎖に銀色のプレートのネックレスを首に掛けていた。銀色のプレートは、３ｃｍ×５ｃｍの薄い長方形で、両面に文字が刻印されている。まるで、軍隊の認識票だ。

俺は装飾品を身に着ける趣味はないが、鏡の中の美少年には良く似合っている。

……ふと、美少年の姿に見覚えがあることに気づいた。

「うそだろう！」と驚いて声を出した。

ゲーム「迷宮都市の冒険者達」のキャラクターにそっくりだ。

３日も掛けてカスタマイズしたキャラクターの顔に良く似ている。

ゲームの３Ｄグラフィックで表現された顔は、少し荒いポリゴンで構成されていたので、大雑把な顔だったが、実体化したら鏡に映っている美少年の顔になるのだろう。こんなにも人間離れした容姿になるとは思いもしなかった。

「迷宮都市の冒険者達」はインターネットに無料で配布されたオフライン用ＰＣゲームだ。

無料のゲームにしては市販されているどのゲームよりも、クオリティが高くマニアックで自由度が高いと物凄い人気だった。次世代ゲームとの評価も受けていた。

戦闘やクエストで経験値を稼いでレベルを上げてキャラクターのステータスを強化し、様々なスキルを習得し、習得したスキルを使うことでスキルの熟練値を上げてキャラクターを強くするシステムになっていた。

また、クエストを達成したり称号を得ることで、特性やレアなスキルを獲得することができた。

特性とは、例えば、「頑強」、「加速」、「危険察知」などがあり、防衛力が上がったり、連続して２回攻撃が可能になったり、敵の攻撃を察知して回避能力が上がったりする。そして、特性にも熟練度が設定されており、熟練度が上がると上位の特性に進化する特性もあった。

スキルの合計熟練値の最大値が設定されているので、どのような

スキルを習得するかで、特徴のあるキャラクターを育成することができる。例えば、剣を得意とする戦士や魔法を得意とする魔術師などだ。

そして、シナリオ拡張オプションが次々と発表された。

迷宮都市の地下迷宮は３００階層までだったが、５００階層まで拡張され、レベルは２００から３００に、ステータスは１２８から２５６に限界値が拡大された。

同時に、鍛冶師、錬金術師、料理人と言った生産系のスキルが追加され、生産系のキャラクターで遊ぶための追加シナリオが配布された。

同じように騎士用、魔術師用の追加シナリオ、商人として遊ぶことができる商人用の追加シナリオと、次々と、様々な職業用の拡張オプション、追加シナリオが配布された。

そして、２週間程前に、地下迷宮を１０００階層まで拡張する拡張オプションが発表された。

拡張された地下迷宮を攻略するためには、最大レベルの３００では不可能なため、レベルの限界値を９９９に、スキルの熟練値の限界値を１０００から２０００の倍にし、スキルの合計熟練値を無制限にする改造ツールが一緒に配布された。

この改造ツールでキャラクターの初期ステータスやアイテムなどを自由にカスタマイズすることもできた。

しかし、それまで必死にゲームを攻略した努力を無効にしてしまうツールであり、また、バランスブレーカーであると、ネット上で散々に叩かれてしまった。

ツールと１０００階層の拡張オプションを発表したのは、製作者ではない偽者じゃないかと言うデマもネット上に飛び交ったほどだ。

俺は拡張された地下迷宮を攻略するために、改造ツールを使って、大事に育てたキャラクターをカスタマイズした。

キャラクターの名前はリオン・ウォート。剣士と鍛冶師のスキルを極めたキャラクターだ。

最強の武器である日本刀はプレイヤーキャラクターの鍛冶師でないと作成できないため、生産系の追加シナリオが配布された時に、鍛冶師のキャラクターとして新たにリオン・ウォートを作った。
最強の武器や防具を作成するためには、地下迷宮にあるレア素材や高レベルのクエストをクリアする必要があるため、戦士のスキルも必要だった。そして、攻略情報を参考にして、ステータスも限界まで上げてある。
２週間前に配布された改造ツールを使って、合計熟練値、レベル限界値、ステータスの最大値、そして、スキルの熟練値の限界値を最大に設定した。
鍛冶の熟練値の最大が２０００になったので、昨日までコツコツと鍛冶の熟練値を地道に上げていたところだった。

……有り得ない。
俺はトラックに跳ねられたて死んだはずだ。遅くまで残業して帰宅したことをはっきりと覚えている。まるでリオン・ウォートに転生したみたいだ。これでは、まるで小説の主人公じゃないか。こんな馬鹿なことがあるか！……と叫びそうになるところを必死に我慢した。
頭が真っ白になって何も考えられない。自分であるのだが、同時に自分じゃないような。自分のことなのに、まるで、他人事のような。

俺は水差しの水を洗面器に入れ、バシャバシャと顔を洗った。そして、思い切って、顔を洗面器に突っ込んだ。……水が冷たくて、気持ちが良い。

「……ふぅ」
洗面器から顔を上げて、頭を左右に振って、水を飛ばしてから溜息をついた。だいぶ落ち着いたし、頭もすっきりした。

置いたあったタオルで顔を拭いて、ベッドに戻って腰を掛けた。
体が軽い、それに、水が一杯に入った水差しがやけに軽かった。
リオンのステータスなら気をつけないと簡単に家具を壊してしまうかもしれない。それに、五感が物凄く鋭くなっている。第六感のような不思議な感覚もあるのだろう。まるで世界が変ったかのように視力が変った。臭覚も聴覚も異常なほど鋭くなっているため、水の匂いが鼻に突いたし、部屋の中も布団や家具や埃の匂いなど微妙に混じって臭く感じる。窓の外の音や部屋の外のかすかな音が聞こえる。

「おはようございます」
突然、耳元で、若い女性の声が聞こえた。俺は吃驚して、声の主を捜すためにきょろきょろと部屋を見回した。
「探しても無駄です。私は貴方のインターブレインです」
再び、耳元で女性の声が聞こえた。インターブレインとは、何だ？
「インターブレインとは、貴方に分かりやすく説明するならば、貴方の頭の中に挿入されたナノマシンのスーパーコンピュータだと考えてください。視覚、聴覚などの五感は貴方の脳細胞と直結されていますので、あたかも目の前にディスプレイがあるかのように画面を表示することができます」
つまり、頭の中に入っているスパコンってこと？
「はい。その通りです。勿論、正確には全く違う物ですが、そのように理解して頂ければ分かり易いでしょう」
こんな設定をＳＦ小説とかで読んだことがあるなぁ、つまり、君はＡＩなの？
「はい。そのように理解して頂ければ良いでしょう。貴方が想像しているＡＩよりも、遥かに知能が高いＡＩです」

まるで、誰かと話しているみたいだ。
「人格も個性もありませんので安心してください。私は単なるプログラムでしか過ぎませんし、感情もありません。
コミュニケーションを円滑にするために、あたかも人格があるかのように振舞っているだけです。　頭の中に誰かが住み込んでいる訳ではありません。
貴方が良く知っているパソコンと同じです。単なる道具でしかありません。気になるようでしたら会話モードをもっと機械的な感じに変更することができますが、どうしますか？」
いや、このままで良いよ。
「了解しました。貴方の感情シミュレーションの結果、現状維持で問題ないと判断しました」
感情シミュレーション？……まぁ、何となく意味が分かるから説明はいらない。
「ありがとうございます。それではコミュニケーションを円滑にするために、私を呼び出すための名前を付けてください」
いきなり名前を付けろと言われても、なかなか思いつかないのだが……、声のイメージから、１４、５歳ぐらいの金髪の長髪で碧眼、白いワンピースを着た可愛らしい少女の姿を思い描き、直感で名前を決めた。
よし、「アリス」で決めた。
「実際に声に出して、名前を言ってください」
「アリス」
と俺は、声に出して言った。そして、今まで、声を出していなかったことに気付いて吃驚した。
「私の名前はアリスで、よろしいですか？」
「あぁ、君の名前はアリスだ」
「了解しました。私の名前はアリスです。よろしくお願いします」
「あぁ、こちらこそ、よろしく」
「私と話す時、実際に声を出さなくても、大丈夫です」

分かった。
「貴方宛のメッセージがあります。読みますか？」
メッセージ？　誰から？
「メッセージを読めば分かります」
そうか、それじゃ、メッセージを見せてくれ。

目の前にウィンドウが開き、メッセージが表示された。目の前の何も無い空間に画面だけが浮かんでいる。……不思議な感じだ。頭を右に向けても、そして、左に向けても、画面は視界の中央に浮かんでいる。
俺は、メッセージに注意を向けた。

大門将人殿。

前略。

無理やりこの世界に引っ張ってきて悪かったな。だけど、あっちで死んでから引っ張ってきたから文句はないだろう。
すでに気付いているだろうけど、ここは、「迷宮都市の冒険者達」の世界だ。いや、逆だな。この世界をモデルにして作ったゲームが「迷宮都市の冒険者達」だ。
自分で言うのもなんだが、なかなか良くできたゲームだろ。特にお前さんの好みにぴったりだったはずだ。
ここは、ちょっと特殊でな。まぁ、色々と面倒なことがあるのだが説明はせんよ。細かく説明したら、大百科事典ぐらいの分量になっちまう。
俺がここを見つけたのは2万年前だ。地球よりも遥かに進んだ文明が滅びた後だった。

とても生物が住める情況じゃぁなかったがな、俺が改造してなんと住めるようにした。
管理システムを作って、あっちこっちの世界から住民を引っ張り込んで、なんとか様になるようにがんばったんだぜ。
エネルギーのバランスを保つために、地下迷宮やフィールド上のダンジョンや、ここでは魔獣と呼ばれてるＲＰＧのモンスターのような物を発生させるシステムやらと、俺でも大変だった。
ＲＰＧに似てるかもしれんが、それは俺の趣味だ。あっちこっちに色々と楽しめる物も用意してあるから良いだろう。
お前さんなら気に入るはずなんだけどなぁ。この辺の次元領域では変った世界と言えるかな。そっちの言い方なら、オタクの世界って言われそうだ。

お前に謝る必要がある。
お前が独身で平のサラリーマンなのは、俺が細工したからだ。
ちょっと訳ありでよ。説明はしないが、悪かったと思ってる。
すまん。

お詫びのしるしに、お前さんのお気に入りのリオン・ウォートの体を用意しておいた。ゲームと同じで、ハイスペックな体だぜ。
アイテム画面やウェストバックに気に入りそうな物をかたっぱしから入れておいた。ライブラリにも十分な情報を突っ込んであるから、何不自由なく生活できるだろう。
ついでに、スキルや特性も足しておいたから、死ぬこともないだろう。
リオンは魔法の力が殆ど無かったけど、そのままではちょっと困るので、魔法のスキルと能力を足しておいたぜ。
それと、俺の遺産としてこの世界をくれてやる。色々と問題のある世界だが、そこは、大目に見てくれ。これでも最大限にがんばったんだぜ。

どうやって受けとるのか　って疑問に思うだろうけど、それは神の試練とでも考えれば良いだろう。受け取れるように細工しておいたから、この世界を楽しんでいれば何れは受け取るはずだ。
これだけじゃ、分からんってか。
なら、ヒントをやる。
この世界の名前を捜してみろ。名前が分かれば、自ずと分かるだろう。
まぁ、世界の名前が分かるのは遺産を受け取った後だったりするかもな。

これを読み終えたら、お前のインターブレインに「基礎知識をロードしろ」と命令しろ。ここは日本語が通じないからな、言葉が通じないと困ると思うぞ。それと、基本的な知識も入れておいた、特に魔法に関する知識はサービスしておいたから、ここで生活するのが楽になるぜ。

最後の忠告だ。リオンの力と能力は隠した方がいいぞ。リオンはスーパーマンみたいなもんだからな、バレたら普通の生活はできなくなる。
ここには、化け物みたいな冒険者もいるから、そんなに神経質になる必要もないがな、程々に隠せや。
それと、どうせすぐに地下迷宮に行くだろうけど、強くてニューゲームで開始した状態になってるから1階層から始めろよ。それと、夢中になりすぎるな。程々にしろ。
Ｂｙダンテ（ここでは神と呼ばれてた）

俺は、メッセージを何回も読み返して、内容を確認した。

単なる悪ふざけのメッセージだと思いたいが、この情況では信じるしかないだろう。しかし、メッセージの内容をそのまま鵜呑みに信じるのもどうかと思いたい。
それに、遺産がこの世界とは、一体、どういう意味なのかさっぱり分からない。ヒントが世界の名称を見つけろだとか、何かの悪戯としか思えない。
そもそも、世界をくれるって、どんな意味があるの？
神様みたいな力をくれると言われた方がまだ具体的じゃないか。
お城に行って、「俺は神様からこの世界を貰ったのだ。だからこの城は俺の物だ」と言ったとしたら……。
まるで馬鹿じゃないか、いや、その前に変人扱いされて牢屋に入れられて頭を冷やせと言われるだけだろう。
しかし、俺が独身で出世できなかったのが、こいつの所為だったとは、これこそ予想外だ。怒る気力も湧いてこない。

……はあっ！

俺は盛大に溜息をついて、肩をがっくりと落とした。
メッセージの内容は忘れることにする。神と言っているけど、狂人が書いた戯言だ……。本当に神だとしたら、……知らん。神がどんな奴かも分からん。俺が思っている神とは絶対に違う。神がこんなふざけたメッセージを書くはずが無い。考えるのを止めよう。時間の無駄だ。
……。
しかし、トラックに跳ねられて死んだことは間違いないらしい。俺の体は、とっくに火葬されているだろう。
両親は、両方とも死亡しているし、兄と妹は、俺と違って何人も孫がいる。俺が死んでも、問題は無いだろう。まぁ、兄には、葬式とか、手間を掛けさせてしまうことになるが、そこは、勘弁して貰うしかない。

定年後は、趣味のゲームをとことん楽しもうと考えていたが、今さら、人生をやり直すことになるとは思わなかった。
これからどうするのか、悔しいけど、メッセージに書いてあった通りに、地下迷宮に篭ることになるだろう。何せ、６０にもなったおじんなのに、生粋のゲームオタクだもんな。

兎に角、メッセージの指示通りに、まずは、基礎知識をロードするべきだろう。
「アリス」
「はい。マスター」
「基礎知識をロードしてくれ」
「了解しました。基本知識をマスターの主記憶にインストールします。基礎知識のインストールは、すぐに終了しますが、眩暈が起きる可能性がありますので、横になることをお勧めします」
俺は、ブーツを脱いで、ベッドに仰向けになった。
「結構です。それでは、基礎知識のインストールを開始しても良いですか？」
「いいぞ、始めてくれ」
俺が返事をすると、膨大な量の知識が、俺の中に流れてきた。物凄い勢いで流れ込んでくる知識が俺の記憶になっていくのが分かった。曖昧だった俺の記憶が、徐々に鮮明になっていくのを感じた。そして、同時に、頭がはっきりしてきた。天才にでもなったかのように、頭が物凄く良くなったと思った。
「基礎知識のインストールが終了しました」

俺は起き上がって、再び、ベッドに座った。
不思議なことに、昨日の夜、リオンが2泊分の金を払って部屋を借り、宿の食堂で晩飯を食べてから部屋で服を脱いで寝た記憶がある。

……ふと、時間が気になると、アリスが０８：０３　と情報をくれた。
リオンの情報やアイテム画面などが気になるが、空腹であることに気付いた。それに、起きてから随分と時間が経っているように思う。
アイテムやライブラリに登録されている情報を確認するには、時間が掛かるはずだ。まずは、朝食を食べた方が良さそうだ。朝夕の食事代も宿代に含まれているので、朝食を抜いたら勿体無い。

再び、ブーツを履いて、慎重に体を動かすように気をつけて、タンスから近未来の戦闘服のような服を出して身に着けた。
昨晩、寝る前にタンスに入れた記憶がある。
硬そうな素材で出来た肩当や胸当が付いているので、革鎧のように見える。黒地に青いラインが入っていて、ＳＦ映画に出てきそうなハイカラなデザインだが、……まるでコスプレだ。
戦闘服の腰には、刃渡りが３０ｃｍぐらいのソードブレイカーのような大きな戦闘用ナイフが差してあった。
ＳＦ映画に出演する２枚目俳優のように格好良いのだが、しかし、実際にこんな格好で出歩くなんて正気を疑う。
コスプレは見るのが楽しいのであって、６０のおじんがやることじゃない。リオンの体は若いけど、それでもやっぱり嫌だ。
こんな服を着て外に出たくないのだが、他に着る物がないのだから仕方が無い。諦めてテーブルの上に置かれたウェストバックを身につけた。
テーブルの上に部屋の番号か書かれた木製のプレートが付いた鍵も置かれていたので、部屋を出て、扉の鍵を掛けてから、階下の食堂に向かった。

2話（後書き）

「騎士王物語」の3話、4話を流用しています。手を加えていますが、ストーリの大幅変更にはなっていないと思います。感想で指摘された点を反映したつもりです。少しは読みやすくなっているかも。

主人公の描写を増やしています。感想で指摘された内容を考えると「騎士王物語」の方は主人公の性格などが旨く描写しきれてなかったなと思いましたので。

私の脳内の主人公は変っていない（はず）のですが、違った印象を受けてしまうかもです。

ストーリを変更しているので、伏線が変っています。

3話

1階に降りて食堂に入ると、殆どの席に客が座って朝食を食べていた。随分と混んでいる。
客の視線を気にして見ていたら、ちらりと見られただけですぐに視線が戻った。思っていたほど目立つ格好ではないらしい。ふうーっと、安心した。

「おはようございます。朝食はお食べになりますか？」
見覚えのある少女が元気な声で聞いてきた。昨日、部屋に案内してくれた14、5歳ぐらいの少女だ。
「おはよう。声も同じで可愛いね。朝から可愛らしい声を聞けて嬉しいよ。勿論、朝食も頼むよ」

何故か、少女は俯いて、「こちらのテーブルにどうぞ。」と小さい声になった。
からかったつもりは無いのだが、どうやら、からかわれたと思ったようだ。
テンションが上がって、酔っ払った状態になっているのかもしれない。まぁ、酔っ払ったことが無いので、同じかどうか分からんが、大体、酒を飲むと頭が物凄く痛くなって気分が悪くなるから酔っ払った経験がない。俺の酒量はビールで小さなコップ1杯だ。
少女がすぐにテーブルへ向かったので、慌てて少女の後ろを追いかけた。中3ぐらいの女の子だったので、つい、兄の孫娘と同じように扱ったのだが失敗した。

少女に案内されたテーブルの椅子に座り謝ろう思ったが、少女は何も言わずに奥へ行ってしまった。ほんの少しだが、顔が赤くなっていたようだ。

昔からそうだが、女心と言う物がさっぱり分からない。そんなに怒るようなことは言ってないはずだが、兄の孫娘の反応と随分と違う気がするが、この世界の常識が違っているのだろうか。

……食堂に居る他の客から注目されているような気がする。やはり、俺の服装は目立っているのかもしれない。

テーブルに視線を落とし、周りを見ないようにして待っていると、少女が朝食が載ったトレイを運んできた。

「ありがとう」

少女にお礼を言ったのだが、無視されてしまった。

顔が赤かったところを見ると、まだ怒っているのだろうか？　しかし、何故怒っているのか、さっぱり分からない。

朝食はスープ、トースト、目玉焼きのベーコンエッグ、ポテトサラダ。豪勢な朝食だ。しかも量が多い。

トーストにジャムを塗って噛付いた、スープを飲んで、フォークでベーコンエッグ、ポテトサラダを食べた。薄味だが素材が良いらしく、とても美味しい。

朝食を食べながら、周りにチラチラと視線を向けて観察した。

亜人に分類される人間ではない種族も居る。ファンタジー世界でお馴染みの小人族、ドワーフ族、獣人族、鬼族。……人間と亜人の割合は半々ぐらいだろうか？

当たり前だが、俺は人間じゃない種族を初めて見た。まるでファンタジー映画に入り込んでしまったかのような感じだ。

俳優が変装しているような作り物の感じが全しない。物凄く自然に見える。本物だから当たり前ではあるが、どうにも現実味が無い。

半数以上が革や金属製の鎧を着て剣や斧で武装しているし、ゲームでお馴染みのフルプレートを着込んだ者までいる。まるで映画を生で見ているようだ。

じっくりと眺めたいのだが、ワニの頭をした獣人や角が生えてい

る鬼族は、ゲーム画面で見るよりも遥かに迫力がある。
見られている事に気付いて難癖をつけられたらたまらないので、決して目を合わせないように注意した。
朝食に視線を戻し、何も考えずに朝食を食べた。
食べ終えると、少女がハーブティが入ったカップを運んできて、代わりに、食べ終えた食器を片付けた。
「ありがとう」とお礼を言うと、「どういたしまして」と返事が返ってきた。
顔色も元に戻っているようなので、怒ってはいないらしい。少し嬉しくなって、にっこりと笑顔で少女を見たら、また、俯いて行ってしまった。……訳が分からん。
特に、若い女の子の気持ちは分からない。世代の違いをいやでも感じさせられるが、気にしないことにしよう。

ハーブティを飲んでみた。ストレート紅茶のような味で飲めなくはないがコーヒーを飲みたいと思った。
コーヒーと同じような沈静効果があるらしく、気持ちが落ち着いてきた。
ハーブティを飲みながら今の情況を考えた。

確認していないが、リオンは物凄い金持ちのはずだ。田舎に引退して、畑を耕しながら平穏に暮らしたい。あるいは、海の近くに住んで魚を釣ったり、ヨットに乗ったり、山に入って山菜を取ったりするのも楽しそうだ。
以前の俺なら大金が手に入れば、昼は優雅な生活をして夜はネットサーフィンとゲーム三昧だったはずだ。
しかし、宿屋の様子では、こちらの世界の文明レベルは中世ヨーロッパぐらいのようだ。田舎に引っ越したら暇でしょうがないだろう。夜の娯楽が何も無さそうだ。

普通。小説の主人公は死にそうな目に会うことになっている。最終的には幸せになれるとしても、小説の主人公が最も不幸な人だと俺は思う。

俺は主人公になりたくない。気楽な脇役を希望したいのだが、……目立たないように気をつけて、出来る限り危険を避けるように行動しよう。

平凡な人間なら誰だってそうするはずだ。馬鹿な主人公は女性を襲っている悪人を見れば、自分から喧嘩を売るのだろうが、俺はゲームオタクではあるが平凡なサラリーマンなのだ。

地下迷宮のことは……勿論、非常に興味がある。これでも俺はゲーマーだ。６０にもなってゲームかと突っ込まんでくれ、ちゃんと自覚はあるつもりだ。

メッセージの内容は気になるが、具体的なことは何も書かれていないので、メッセージの内容に意味が無いのではないだろうか？

単なるフェイクかもしれない。

何が目的のフェイクなんだ？　と考えれば、色々と疑問が尽きなくなる。ひょっとしたら混乱させるのが目的のフェイクかもしれない。考えても分からないのだから、気にしない方がいいだろう。

冷静になって、ゲーマーであることを忘れて、サラリーマンの立場で考えると、最初にやらねばならぬことは何か？

……それは、現状把握だ。

毎週の会議で同僚や上司から言われていることだが、ビジネスの観点から捉えれば、現在のリソースを把握し、利点と弱点を見極め、将来を見据えた目標計画を立案し、投資のリスクと効果を考えるのだ。

と大上段に構えたけど、結局、システム画面、アイテム画面、ライブラリ画面が気になっているだけ。ビジネスのことは関係ないし、

大げさに理由を並べる必要もないし、同僚や上司に言い訳する必要はないのだから、正直に言えば、ゲーマーとして、とても気になっているだけだ。
何で、会議での言い訳なんて考えたんだろ？　悲しいけど、身についてしまった平サラリーマンのさがかもしれん。

俺はハーブティを飲み干し、カップをテーブルに置いて立ち上がった。
店の主人に「部屋で休むから、邪魔しないようにしてくれ」と頼んでから、部屋に戻った。

ウェストバックを腰から外してテーブルに置き、椅子に座った。
自分の状況を確認するためにメニュー画面を展開した。コマンド一覧の上の方に、ゲームと同じコマンドが並んでいる。ステータスコマンド、スキルコマンド、アイテムコマンド、マップコマンド、……。
メニュー画面にアイコンを並べたり、メニュー画面の中にさらにメニュー画面を作ったりと自分の好みで自由に画面をカスタマイズできるが、後で良いだろう。
ステータス画面、スキル画面、アイテム画面と次々にコマンド画面を展開して、ライブラリ画面を1番手前に移動した。
トップディレクトリの一覧画面をツリー構造を表示するモードに切り替えた。
体系的にまとめられており、科学、技術、魔法に娯楽小説まで、あらゆる分野の情報が揃っているようだ。
この世界に関する文献が一つのツリーにまとめて入っていた。一覧の中から試しに冒険者ギルドのガイドブックを選んで表示した。
最初のページを見たとたん、ガイドブックの内容をそれこそ一字

一句まで思い出した。そして、数学、物理、化学、医学など、地球よりも遥かに進んだ知識、魔法に関する高度な知識などを覚えていることを思い出した。
慌てて、ツリーを辿り、娯楽小説の分野の見知らぬ題名の本を開いたら、その本に関する記憶は無かった。娯楽小説まで覚えていたら、本を読む楽しみが無くなるところだった。ちゃんと考えて知識がロードされているらしい。あるいは、ある程度の知識までしか主記憶にロードされていないのかもしれない。
ライブリには記憶していない本が大量にあるかもしれないが、確認するには相当な時間が掛かるだろう。

……ふと思いついたことがある。
『アリス』
俺は声を出さずにありスを呼んだ。
「はい。マスター」
耳元でアリスの返事が聞こえた。
『神聖協会のシステムにはアクセスできるか？』
「はい。マスター、アクセス可能です。神聖協会のシステムに接続しますか？」
『セキュリティ上の問題はあるか？』
「いいえ。特に問題はありません」
『それじゃ、接続してくれ』
「了解しました」

神聖協会とは、この世界を管理しているシステムの名前だ。ゲームには出てこなかった。
神聖協会は個人を認識するための認識票を発行し、個人の口座を開設したり、銀行のようなサービスを提供しているし、ネットワークシステムのようなサービスもある。
俺が首に下げているネックレスが神聖協会が発行した認識票だ。

この世界では、個人を識別するために利用されている。
各ギルドや魔術学院などは、神聖協会のネットワークサービスを利用して情報を登録し、登録した情報を活用したり、資格の認定試験なども神聖協会が実施している。
他にも、貨幣を流通させ、農産物などの基本となる特定の産物を一定価格で売買して物価を安定させたり、マジックアイテムや高度な技術製品を販売したりしている。
流通している通貨は、銅貨、銀貨、金貨、白金貨（プラチナコイン）の４種類。銅貨の単位がコル、銀貨がシルク、金貨がクランで、１００コルで１シルク、１００シルクで１クラン。銅貨と銀貨は、１枚、５枚、１０枚、５０枚の４種類。金貨は、１枚、１０枚の２種類で、白金貨は１種類しかなく白金貨１枚は１００クランになる。
単純に比較はできないが、１クランは日本円で１０万円に相当する。

ライブラリには、膨大な量の文献が登録されているので、タイトルだけを見たとしても、何日も掛かってしまうだろう。
ライブラリ画面を消してステータス画面を手前に移動し、表示モードを切り替えると、リオンの３Ｄ立体像が表示された。
３Ｄ立体像からリンクされているリオン・ウォートの登録情報を開いた。神聖協会のネットワークにリンクしているので神聖協会に登録されている情報を表示することができる。
生年月日、種別、性別などの個人情報が表示された。リオン・ウォートは人間種族の男性で、年齢は１５歳。口座の残高が１億クラン、冒険者ギルド、魔術師ギルド、商人ギルドには登録済み、各種の資格も取得済みになっている。
口座の残高は、リオンの所持金が反映されたらしい。日本円に換算すれば、……１０兆円だ。庶民の俺では、どれぐらいの金持ちなのか想像もできない。
各ギルドに登録されている情報を確認すると、冒険者ギルドのラ

ンクは最低ランクのＦ、魔術師の資格は最上位の特級魔術師。商会名は「黒猫商会」で、商会口座の残高は１千万クランになっていた。
ギルドの登録年月日、担当者名、魔術師試験も初級、中級、上級の各試験結果に、魔力測定結果など、詳細な情報が登録されていた。

リオンの３Ｄ立体像からリンクされている装備画面を開くと、身につけているアイテムが表示された。
装備画面で、全ての服を取り去れば、３Ｄ立体像は裸になり、現実の俺も裸になってしまう。戦闘中に装備画面で武器を変更すれば、瞬時に武器を変更することがきる。ゲームなら普通かもしれないが、本当に実現されると考えると、……反則技だ。
特性とスキルの情報を確認すると、まるで、改造ツールで最大に設定したかのようになっていた。鍛冶師のリオンには魔法のスキルや特性が無かったのだが、ゲームの攻略情報で見た覚えのあるスキルや特性、そして、攻略情報には存在していなかったスキルや特性が並んでいた。
俺は思わず呻いた。大事に育てたキャラクターをいじるとは許せん。
暫くの間、怒りで頭が真っ白になった。

やっとの思いで気持ちを落ち着かせた。
１時間ぐらいは怒っていたと思うが、ふうーと溜息をついてから、アイテム画面を手前に移動し、アイコン化されていたウェストバックの画面を開いて、中身を確認した。
銅貨、銀貨の全種類が１０枚ずつ入ったがま口の財布と１クラン金貨１００枚、１０クラン金貨１００枚が入った布袋の財布。銀行カード、冒険者カード、魔術師カード、特級魔術師認定カード、商人カード、交易許可カード、商会主証明カード、商会口座カード、…魔術師ギルドから支給される魔術師用のローブとマントに魔術師の杖、魔獣バッグ、端末装置になっている神聖協会の腕輪、着替用

の下着に靴下、丈夫そうな普段着と靴、雨具、革鎧一式、ロングソード、グレートソード、日本刀、弓と矢筒に矢、拳銃とカートリッジ、投擲用ナイフ、何種類かの魔弾銃、魔法の水筒、食器、キャンピング用具、魔法のリュック、何種類ものサイズと形状の袋、宝石類が入っている幾つかの袋、召喚獣のマジックアイテム、調味料、食料、……呆れてしまうほど何でも揃っていた。

アイテム画面を手前にして、ライブラリと同様に、表示モードをツリー構造に切り替えて、ツリーを展開した。

ゲーム関連のアイテムが１つのトップツリーで纏められていた。そして、ゲームでは出てこない日用品や銃などの近代兵器、地球よりも遥かに進んだ技術製品や武器に高度なマジックアイテムなどがライブラリと同様に分類されたツリーに大量に登録されていた。

鍛冶師や錬金術師などの生産系のスキルが反映されているらしく、素材からアイテムを製造したり、カスタマイズする機能もある。

これほど大量にあると、使いたいときにすぐに見つられるとは思えない。ウェストバックに必要と思われるアイテムが揃っているようだが、ウェストバックの中であっても、某青い猫ロボットみたいに、取り出すアイテムを選ぶのが難しいかもしれない。

ショートカットのように、緊急性のあるアイテムは別枠に纏める必要がある。アイテム画面のツリー構造は幾らでもカスタマイズできるので、時間を掛けて整理する必要があるだろう。

俺は幾つかの整理用のアイテム画面を作り、ウェストバックのアイテムとアイテム画面に登録されているアイテムを夢中になって整理した。

……ふと、時刻を確認するためにマップ画面を見たら、マップ画面の時刻に１２：４８と表示されていた。

時間を忘れて夢中になるなんて、我ながら苦笑してしまった。

なんだかんだと言いながらも、俺は夢中になって、時間を忘れてしまうほど楽しんでしまった。

なんだか、上手にのせられてしまったような気がする。勝手にキャラクターを弄られたことやメッセージの内容を思うと癪に障るが、しかし、ゲーマーなら誰だって俺のことを羨ましがるに違いない。
ゲームマニアなら、誰でもゲームの世界に転生して最強キャラクターで無双することを夢見たことがあるはずだ。
これからどうするかを考える必要はないだろう。冒険者ギルドに行き、実際に地下迷宮に篭って冒険する以外に何がある。違うことをやり出すゲーマーが居たら、そいつはゲーマーじゃない。

ここは、ベルゼルグ王国の「迷宮都市」。都市の名前は「リカンド」だ。
ゲームのスタート地点で、この都市には地下迷宮の入口であるゲートがある。

4時間近くも身動ぎせずに椅子に座っていたのだが、体は平気だった。肩が凝ったり、体が固まったりしていない。しかし、じっとしたままでは不健康だ。空腹をあまり感じないが簡単に昼飯も食べた方が良いだろう。新しい体に慣れる必要もある。
昼飯は公園か広場で屋台の食べ物を探せば良いだろう。その後は、冒険者ギルドに行って見たいと思う。

今日の日付は、4月1日。季節は日本と同じ春だ。外は未だ少し寒いが、コートを着るほどではないはずだ。
朝の様子から今の鎧は目立ようなので、ウェストバックに入っていた丈夫そうな服と靴に着替えて、ウェストバックを身に着けて、部屋に忘れ物が無いか確認してから1階に降りて、カウンターに居た宿の主人に鍵を渡して宿の外に出た。

宿屋の前の道は2車線ぐらいで石畳で舗装されていた。通りに並

んでいる建物はレンガで造られているようで、中世ヨーロッパ風の風景だ。
多くは無いが人通りがあるし、バスクと呼ばれるでっかいサイのような動物に引かれた大型の荷馬車がゆっくりと移動して行くのが見えた。
アーサー王やジャンヌダルクのような中世の騎士時代の映画か、ファンタジー映画の世界に入り込んだような感じだ。

マップを拡大して、迷宮都市の全域を見えるように表示した。
計画的に区画整備された都市らしく、道路が網の目のような幾何学的な図形を描いている。都市の中央に地下迷宮へのゲートがあり、ゲートの回りが巨大な広場になっている。
広場の周りに神聖協会、各ギルド、教会などの主要な建物が集まっている感じだ。
俺は中央の広場に行くことにした。広場なら食べ物を売る屋台があるはずだ。

なんだか外国に観光旅行に来たみたいで楽しくなってきた。
マップ画面を確認しながら、建物や通行人を眺めながら歩いた。外国の田舎の街を予想していたのだが、思いの外通行人が多くて賑やかだ。
宿屋を出て３０分ぐらいで広場に着いた。広場はかなり広くて綺麗に掃除されていた。午後１時半なので、昼休みのピークを過ぎていると思うのだが、多くの人で混んでいた。
中央に向って進んでいくと、奥から屋台の呼び声と旨そうな匂いがした。そして、肉を焼いた旨そうな匂いを嗅ぎ分けた。朝食をたっぷりと食べたのであまり腹は減っていないのだが、俺は旨そうな匂いを辿って歩き出した。
匂いを嗅ぎ分けて辿れるとは、まるで警察犬だなと苦笑した。
広場の南側に大きな噴水が建てられており、噴水の周りに多数の

屋台が出ていた。人通りも多し、ベンチに座って昼食を食べてる人も居る。
嬉しいことに、平和で繁栄しているように見える。どこかと戦争でもしてたら、こうは行かないだろう。
匂いを辿ると6、7人の客が並んでいる屋台に辿り着いた。他の屋台と比べると、並んでいる客が少し多いようだ。これは当たりかなと考えながら列の後ろに並んだ。

すぐに、俺の番が来た。
「少年、何が欲しいんだ？」
屋台の裏側で肉を焼いている兄ちゃんが聞いてきた。肉の旨い匂いがたまらない。
以前から人生の楽しみは食べることと寝ることだと主張していたが、旨いものが食べられるなら世界が違っても気にするもんかと強く思った。
屋台の兄ちゃんは人間種族の男性で２５歳ぐらいの若者だ、雰囲気がテキ屋の兄ちゃんのそのまんま。外人さんだけど、この一瞬だけは、異世界であることを忘れた。
俺の実年齢は兄ちゃんの2倍以上はあるのだが、リオン・ウォートの年齢は１５歳なので、少年と呼ばれても仕方が無い。
台の上には、何種類かの焼きあがった串焼きが並べてある。
「これと、これを1本ずつ」
「あいよ。2本で、４０コルだ」
俺が適当に注文すると威勢の良い声で2本の串焼きを渡してきた。
俺はウェストバックからがま口の財布を取り出し、１０コル銅貨４枚を渡して2本の串焼きと交換した。
４０コルは日本円にすれば、大体４００円ぐらいに相当する。日本の焼き鳥とは違って1本の串焼きがかなり大きい。1本２００円ならかなり安いと思う。日本なら1本で５００円ぐらいだろう。

俺は屋台から離れて肉の串焼きにかぶりついた。何の肉なのか分からないし、塩と胡椒の簡単な味付けだが、匂い通りでかなり旨い。日本よりもこちらの世界の方が食べ物に恵まれているのかもしれない。

俺は串焼きを食べながら、他の屋台を覗いて回った。

見たことがあるような食べ物があれば、見たことが無い食べ物もあった。この世界が特殊ではなく、海外旅行へ行けば同じように見たことが無い食べ物ぐらい売っているだろう。単に食文化が違うだけだ。

食べ終えた串をごみ箱に捨て、ウェストバックから水筒を出して水を飲んだ。屋台で飲み物も売っていたが、金を出してまで買う必要は無いだろう。

水筒は５００ｍｌのペットボトルのような形をした魔法の水筒で、清涼な名水など数十種類もの飲み物が無限に出てくる優れものだ。

3話（後書き）

区切りが悪いかもしれませんが、ここまでを3話としました。
「騎士王物語」の5話、6話、7話を流用しています。大筋の変化はないはずですが、2話と同様に少し手を入れています

4話

広場を後にして、迷宮都市の冒険者ギルドに向かった。冒険者ギルドは広場から南西へ3分ぐらいの距離にあった。

冒険者ギルドの建物は3階建ての大きな建物だった。

入り口のロビーは2階までの吹き抜け構造になっており、ロビーの左側、3分の1のエリアに受付窓口が並んでおり、残りがカフェテリアのようになっていた。

受付窓口の隣に2階に上がる階段があった。階段横の案内板に「クエスト達成の受付は2階。魔石とドロップ品の換金は支店へどうぞ」と書かれていた。

冒険者ギルドの支店はゲートのある広場の西側に建っているので、地下迷宮の冒険者にとっては支店の方が便利なはずだ。

カフェテリアには、食べ物や飲み物を売っているカウンタとカウンタの前に100個ぐらいのテーブルが置かれ、3分の1ぐらいのテーブルは飲み物や食べ物を置いた冒険者が座って、神聖協会の腕輪を操作してたり、おしゃべりをしたりしていた。

何人もの冒険者がカフェテリアの方の壁の前に立って壁を眺めているところを見ると、そこに依頼が張り出されているのだろう。テーブルも壁際から十分に離れた場所に並べられている。

冒険者ギルドに対しては、酒場のようなイメージを持っていたのだが、随分と雰囲気が違う。真面目で明るい雰囲気で、酔っ払いが闊歩している様子は全く無い。

2割ぐらいが俺と同じ普段着で、約7割が武装しており、魔術師の服装の者が1割の割合だ。良く見ると、冒険者の殆どの者が魔獣バックを下げており、テーブルに座った冒険者の何人かは、神聖協会の腕輪からディスプレイを出して、画面を操作している。

俺のウェストバックにも、魔獣バックと神聖協会の腕輪が入っている。

魔獣バックは、４次元ポケットのようになっているのだが、所持している冒険者の筋力に応じた容量しか入らないようになっている。
魔獣を倒すと、倒した魔獣は跡形もなく消えてしまうが、このバックを持っていると魔獣が残したドロップアイテムが、自動にバックの中に入るようになっている。
バックを各ギルド、または、神聖協会に持ち込めば、中身をお金に換金することが出来るし、中身を取り出すことが出来るが、直接バックの中身を取り出すことは出来ないし、バックに物を入れることも出来ない。
考えてみると、一般人にとっては全く使えないバックで邪魔な飾りにしかならないが、魔獣を狩って生活する冒険者には必需品だ。
神聖協会の腕輪は、携帯電話や高性能パソコンに相当する情報端末のことだ。腕時計のようなデザインになっており、高性能な腕輪はパソコンと同じようなディスプレイとキーボートを出すことができる。
冒険者の場合、パーティを組む場合と地下迷宮の各階層を繋いでいるポータルと呼ばれる転送装置（テレポートゲート）を起動するために必要になる。
ポータルを起動し、パーティを組むだけの腕輪が１クラン、メール送受信、通話、ネットワークに接続して検索する機能を足すには１０クラン、パソコンと同様にアプリケーションが使えるようになり、ネットワークから情報をダウンロードしたりアップロードできる機能がさらに１０クラン。そして、さらに１０クランを追加すれば、ＣＰＵとメモリの強化とＣＰＵとメモリの性能に応じたアプリケーションの追加ができる。
この機能強化は３回まで可能だ。つまり、最高機能の腕輪は５１クランになる。尚、魔獣バックも１クランで売られている。
腕輪を操作すると、ディスプレイが使用者の目の前に表示され、ディスプレイを操作することで、パーティを組んだり、高性能な腕輪ならキーボードも出してネットワークを検索したりする。
パーティメンバーはどんなに離れていても近くにいるかのように

話ができるし、バックの内容はパーティ間で共有される。

カフェテリアの壁に近づいて、掲示板を眺めてみた。

魔獣が出現する場所を示した近郊の地図が張られており、魔獣が出現する場所と出現する魔獣の種類とランク。買取ドロップ品の名前と買い取り価格。そして、盗賊が頻繁に現れる場所と賞金首の名前と賞金額の一覧が張り出されていた。

壁は依頼を貼る掲示板とパーティメンバーの募集案内を貼る掲示板の２つに大きく分けてあった。また、依頼の掲示板はランクごとに仕切られていて、ランクに応じた依頼の紙がぎっしりと張り出されていた。

ギルドのランクは、ＳＳ、Ｓ、Ａ、Ｂ、…Ｆで、Ｆが最低ランク。Ａランク以上になると、ギルドからの指名の依頼を受ける義務が発生する。

魔獣がドロップする魔石にポイントが定めれれており、魔石を売るか、依頼を達成すれば、ポイントが貰える。

ランクアップに必要なポイントが溜まるとギルドに申請し、ギルドがランクアップの判断をする。

冒険者ギルドに売った魔石や達成した依頼の履歴がデータとして登録されているので、ギルドがランクアップに相応しい実力があると判断すれば、すぐにランクアップできるのだが、ギルドが実力を判断できない場合は、ギルドから討伐する魔獣を指定されるか、ランクに応じた依頼を受けるように指示され、指定ランクの魔獣を倒すか、指示された依頼を達成すれば、ランクアップとなる。

Ａランク以上になると審査のための面接が必要になり、Ｓランク以上は、なんらかの功績が必要になる。

機能を追加した腕輪なら、神聖協会のネットワークに接続して調べることが出来るので、壁の前に立って見上げる必要はない。

カフェテリアでポテトチップと果汁のジュースを購入し、空いて

いるテーブルに座った。
ウェストバックから神聖協会の腕輪を出して、腕時計のように左腕に嵌めてから、ディスプレイとキーボードを出してネットワークに接続し、王都の冒険者ギルドのページを検索した。
壁の掲示板に貼り出してある情報よりも、より多くの情報がページに記載されていた。
ディスプレイで情報を読んでいる間も、異常に鋭くなった俺の聴覚が冒険者達の会話を拾い上げた。
特性の「複数同時思考」の効果と思うが、まるで、何人も自分が同時に存在しているかのように、情報を読んでいる自分、あるグループの会話を聞いている自分、そして、他のグループの会話を聞いている自分がいる。
「聞き耳」のスキルの効果かもしれないが、盗み聞きをするつもりは無いのに、自然と聞こえてしまう。
「聞き耳」は盗賊用のスキルではなく、どちらかと言うと探索用のスキルで、不意打ちを受けないように、音に対して警戒するために使用するスキルなのだが、盗み聞きとしても十分に使えるようだ。
情報収集の手段として、酒場のマスターに噂話を聞くのがＲＰＧゲームの鉄則なんだろうが、ここで冒険者達の話を盗み聞きしても、有効な情報を集められそうだ。
俺は１時間ぐらい冒険者達の話を盗み聞きしてから、宿屋に戻った。

食堂に入ると、今朝の少女ではなく、２０代男性の店員がカウンター席を案内してくれた。
晩飯はサラダ、シチュー、パン、そして、ビールの大ジョッキ。
食事を済ませて他の客の会話を聞きながら、まだ半分ぐらい残っているビールを飲んでいると、隣の客に話しかけられた。
「坊主は、商人の見習いか？」

狼頭の獣人であるウォルフ族の男性。人間と違うので、年齢が分かり辛いが、人間の壮年、つまり、３０代か４０代ぐらい。ウォルフ族の寿命は、人間の倍ぐらいなので、６０から８０歳ぐらいかもしれない。
隣に座っていることを知っていたが、怖かったので、見ないように気をつけていた。
俺は、話しかけられたウォルフ族の顔を見た。
よく見ると、賢そうな目をしており、思っていた程、怖い感じがしない。
「商人じゃないよ。冒険者さ」
俺は格好つけて答えた。ビールで少し酔っていたのかもしれない。俺は冒険者になるために迷宮都市にやってきた１５歳の少年になりきっていた。
テーブルトークＲＰＧをプレイしている感じと言えば分かって貰えるだろうか、子供のごっご遊びのことだ。女の子がお母さん役、男の子がお父さん役で、ままごとのおもちゃを使って遊ぶあれを大人がゲームとして演じる訳だ。真面目にやらないとかなりつらい。恥ずかしいと思ったら負けだ。
午後に冒険者ギルドに行った影響を受けているのだろう、実際に現実の冒険者達の中に居たのだ。６０のおじさんであっても、はっちゃけるのは仕方が無いだろう。
「冒険者だと、……そうは見えないがなぁ、大丈夫なのか？」
「おじさん。人を見かけで判断すると後悔するよ。それより、おじさんこそ商人に見えないよ。おじさんも冒険者かい？」
座っているので身長は分からないが、立派な体格をしていた。鎧ではなく俺と同じ普段着を着ているので冒険者じゃない可能性が高い。
この宿のような安い宿に泊まる客の大部分は、冒険者か旅商人のどちらかだ。つまり、冒険者でなければ、旅商人の確率が高い。
「はっはっは、愉快な坊主だ。まぁ、坊主の言ったことも間違いで

もないがな、俺は元冒険者だ。今は荷馬車の御者をやってる」
「ふーん。すると、運送屋だね」
「運送屋とは、珍しい言い方だな、まぁ、荷物を運ぶのが仕事だから、間違っちゃいないか。……すると、坊主は冒険者になるために、ここに来たのか？」
「そうだよ。昨日着いた所だ。明日から地下迷宮に行く予定だよ」
「そうか、田舎から出てきたところと言った感じだな」
「まぁね。良く分かったね」
「そりゃあな、冒険者になるために迷宮都市に来る餓鬼は多いからな。俺もそうだった。でもよ。冒険者として成功するのは、素質のある一握りの冒険者だけだ。大抵の奴は、無理して死んじまう。俺は、死ぬ前に、見切りをつけた、お蔭で生き延びてるよ」
「そうなんだ、田舎者だから知らなかったけど、地下迷宮って、どんな感じなの？」
「そうだな、夢を壊したくはないが、世の中の現実ってやつを教えてやるよ。若者を導くのは、大人の義務だしな。……俺もそうだったが、英雄になる夢を抱いて、地下迷宮に挑む若者は、本当に多い。しかし、大金を儲けるようになれるのは、１００階層以上へ行ける上級者だけだ。最初は、宿代を払うだけで精一杯と言うのが普通だな。地道に地下迷宮を探索して、自分の実力に見合った魔獣を倒すんだ。坊主は、魔獣を倒せば、強くなれることを知ってるよな？」
　ゲームにレベルアップは常識だ。現実には、こんな感じに認識されているらしい。
「うん。聞いたことはあるよ。だけど、詳しくは知らない」
「そうか、まぁ、俺だって詳しくは知らんが、魔獣を倒すと、魔獣の強さの一部が体に取り込まれて、強くなると冒険者の間では言われている。しかし、強くなれる限界があってな、ある程度強くなると、幾ら魔獣を倒しても、強くならなくなる。個人によって、取り込めれる量の限界があるそうだ」
　最大レベルは個人によって違うらしい。

「へぇー。それは、知らなかったなぁ」
「地下迷宮は、階層が増えると魔獣が強くなる。まぁ、最初の３０階層ぐらいまでなら、誰でも簡単に行けるようになるが、運が悪いと３０階層ぐらいで限界を迎える奴がいる。自分がどれぐらい強いのか見極めるのは難しい。
上のランクの魔獣を倒せば、その分、金が儲かる。誰でも上のランクの魔獣を出来るだけ倒したいと考えるし、３０階層ぐらいじゃ、大した儲けにならんからな。
少しでも、金を儲けて威力の高い武器を買おうと、無理することになる。大抵の奴は無理した結果、死んじまうのさ」
「そうか、それで、おじさんは何階層まで行ったの？」
「俺は８２階層だ。８２階層で大怪我をして、それで、冒険者を引退した。今思えば、怪我して良かったと思うよ」
「どうして？」
「今なら良く分かるが、俺の限界は、せいぜいが７０階層だった。パーティを組んで無理してたんだ。あのままなら、その内死んでたさ」
「パーティって？」
「パーティとは、最大６人まで、仲間と一緒に地下迷宮に入ることさ。
地下迷宮は不思議なところでな、同じ階層でも入った冒険者毎に違う階層になってるのさ。だから、怪我をしても他の冒険者に助けてもらうことができない。自分以外は誰もいないからな。しかし、事前にパーティを組んでおけば、パーティの仲間は同じ階層に入れる。１人で戦うよりも仲間で戦った方が安全だ。例え、ランクが上の魔獣でもパーティなら倒すことができる。
まぁ、稼ぎもパーティで分けることになるから、儲けは減ることになるがな」
「なるほど、それなら、強い冒険者と一緒に行けば楽だね」
「まぁな、でも、そんなに甘くないぞ、当たり前のことだが、弱い

と判断されたら、次からパーティに入れてくれなくなる。それに、金が絡むと大変だぜ、パーティ同士で殺し合いになることもある。
　気心の知れた友人でないと、危ないぜ。数人で組んで仲間に入れた冒険者を殺して、装備品を奪う犯罪者もいるらしいからな、やたらとパーティを組まない方がいいぜ」
「そうか、それは、怖いね」
「命を預けられるほど信頼できる友人を作ればいいのさ。それに、仲間が居た方が楽しいからな」
「なるほど、その通りだね」
　俺は残ったビールを飲み干して、カウンターに置いた。
　獣人の男の手のビールには、まだ、3分の1ぐらいのビールが残っていた。
　ビールとつまみを奢れば、もっと話を聞くことができるだろうし、時間的にも1時間ぐらいは余裕がありそうだ。……正直に言うと、狼の頭はそれなりに迫力があって、怖いのだ。
　種族差別のつもりはないし、人間種族の男性だったとしても。日本人のような容姿は、ここでは珍しく、殆どの人間は外人にしか見えなくて、それに、やっぱり外人は苦手だ。
　以前は体質的にあまり酒を飲めなかったので、酒を飲みに行くのはめったに無かった。所詮、俺は酒を飲めないゲームオタクで、人付き合いが苦手なのだ。
　以前の体なら、1リットルもある大ジョッキのビールはとっくに許容量を超えていたが、リオンはアルコールに強いらしくて、大ジョッキを飲んでも平気だった。
「それじゃ、俺は部屋に戻って休むよ。色々と話してくれてありがとう」
　俺はお礼を言ってから、立ち上がった。
「なぁに、大したことじゃないさ。こっちこそ、話を聞いてくれて、ありがとな」
「それじゃ。お仕事、がんばってください」

「おぉ、そっちも、がんばれよ」
獣人が見送ってくれた。やっぱり良い人だった。もう少し、話を聞けばよかったと後悔した。

部屋に戻って、特性とスキルを詳細に調べ、地下迷宮に入る準備を整えた。リオンのレベルは1なので、地下迷宮に行ってレベルを上げる必要があるのだ。
アリスの画面を見るのに、明かりは必要ないので、部屋のランプを消したのだが、リオンには暗視能力があるので、明かりがなくても、昼間のように見ることができた。注意しないと部屋が暗いのか明るいのか、分からなくなるぐらいだ。
眠くは無かったが、12時頃に服を脱いで、ベッドに入った。
「アリス、朝の7時に起こしてくれ」
「了解しました。しかし、マスターには、7時間の睡眠は必要ありませんが、すぐに寝ますか？」
「どういうこと？」
「マスターに必要な睡眠時間は1日に2時間程度です。2時間もあれば、マスターの体調を整えることができます。7時間の睡眠時間では、5時間が無駄になります」
……あぁ、そうだった。すっかり忘れていた。
アリスに任せれば、完璧に体調を整えることができる。すぐに寝ることができるし、完璧な状態で指定した時間に起きられる。嬉しいことにトレーニングも不要だ。苦しい筋力トレーニングをやらなくてもアリスが筋力のバランスを完璧に整えるので、筋力トレーニングをやるのと同等以上の状態に整えてくれる。
「そうだな、忘れてた。……それじゃ、もうちょっと起きてる」
服を着るのも面倒なので、ベッドに入ったまま、ステータス画面を表示して特性とスキルを見直したが、長年の習慣を急に変えるのは難しい、時間の無駄かもしれないが、結局、2時頃にアリスに眠らせて貰った。

4話（後書き）

1話の長さをどれぐらいにするのかで、ちょっと苦労しています。「騎士王物語」の8話、9話を流用しています。殆ど変っていません。

5話

翌朝、８時頃に宿屋を出て、都市の中央にあるポータルに向かった。

地下迷宮に入るには、ポータルに入ってキーワードと行ったことのある階層の数を唱えれば指定した階層の入口用のポータルに転送される。

一般的には、迷宮都市の冒険者ギルドに地下迷宮に入るための申請を行なって、神聖協会の腕輪を購入するか、腕輪を持っているのなら、ポータルが起動するように設定する必要があるのだが、リオンは冒険者ギルドに登録済みで、腕輪も設定済みだ。

冒険者ギルドが発行している分厚い地下迷宮攻略ガイドブックも頭に入っている。神聖協会がネットワークのシステムを提供しているのだが、この世界には印刷技術がないため、神聖協会が発行していない本はかなり高価になる。

冒険者ギルドが発行している地下迷宮ガイドブックは５００ページぐらいで１冊が２０シルクもする。

複製防止の魔法が掛かっていない本なら、初級魔法で複製できるのだが、魔術師を雇うのは金がかかる。人手で写本すると手間が掛かるわ間違いもあるわで、この世界では魔法で写本するのが常識になっているようだ。

ポータルに行く途中の広場に屋台が並んでいた。あまりにも旨そうな匂いだったので、昼飯用に蒸した特大サイズの中華饅を３つほど購入した。２個もあれば十分なのだが、具が３種類もあって、２種類を選ぶのが面倒だったので、全種類を購入することにした。警察犬並みの臭覚が仇になって、匂いの誘惑に負けてしまった。

ポータルは直径３０ｍの巨大な魔方陣だった。魔法陣の中に入り「転送、ファースト」とキーワードを唱えた。
一瞬、視界が暗くなり、すぐに、見えるようになった。
ポータルの魔方陣から出て、腰に下げてたロングソードを右手で抜いてから、マップ画面を確認した。
最強の装備もあるのだが、今は初心者用の革鎧とロングソードに小型の盾を装備している。最初から最強の武器を使うかどうか考えた結果、ゲームと同じように最初は初心者用の装備を使い、徐々に強い装備品に変えていくことにした。
実際に武器を使ったことは無いのだから、一通りの武器を試しておいた方が無難だ。
その代わりと言っては何だが、強力な護符は最初から装備している。

地下迷宮の中と地上の時間は一致しているので、地上と同じように昼間は明るく夜は暗くなる。そして、夜の方が魔獣が多くなる。
ガイドブックには、地下迷宮には朝に入って日が暮れる前の夕方には戻るようにし、翌日は体力を回復するために１日は休むようにと書かれている。
リオンには暗視能力があるので暗くなっても平気だ。レベル上げには魔獣が多くなるので、逆に夜の方が効率が良いのかもしれない。
マップ画面には、２階層へ行くためのポータルと安全が確保されたエリア、そして、モンスターを示す赤い点が表示された。
赤い点は、俺から約２００ｍの範囲の魔獣を示している。意識を集中して索敵のスキルを発動すれば、もっと広い範囲の魔獣を索敵できるのだが、迷宮の中なら２００ｍの範囲で十分だろう。
俺が見た範囲がマップに反映され、マップ画面の情報が増えるようになっている。
地下迷宮の仕様は「迷宮都市の冒険者達」と殆ど同じようだ。ひょっとしたら、ゲームの攻略情報がそのまま使えるかもしれない。

「アリス」
「はい。マスター」
「『迷宮都市の冒険者達』の攻略情報があるよな、マップに反映できるか？」
「可能です。マップは実際に踏破したかどうか分かるように色を薄くしますか？」
「そうだな、そうしてくれ」
「了解しました。実際の情報で上書きするようにします」
マップ画面に見覚えのあるマップが表示された。
インターブレインのアリスは感情と言った個性は無いが、非常に優れたＡＩ機能により、簡単な命令でも、こちらの意図を汲んで有益なアドバイスをくれる。
個性があるかのように会話が成り立つのだが、例えば、俺が綺麗な女性を見て邪な想像をしていたとしても、アリスが怒ることは有り得ない。単なる機械でしかないのだ。
マップ画面に固定の宝箱とランダムの宝箱や固定場所にスポーンする魔獣の情報、イベント情報などが表示された。
地下迷宮の各階層に決まったサイズや形はない。１階層は正方形の迷路になっていて、ゲームでは、マップの全てを探索しても１時間から２時間ぐらいでクリアできたと思う。
マップ画面を操作して確認すると、１辺が５ｋｍぐらいもあった。単純な構造だが迷路になっているので、踏破する距離は５０ｋｍ以上はありそうだ。どれぐらいの時間が掛かるのか、見当もつかないが、歩いて探索していたら、２、３日ぐらいは掛かりそうだ。可能な限り、走って探索した方が良いだろう。
入口用ポータルは行き止まりになっており、奥に向かった通路の先に赤い点が表示されている。
これから魔獣と戦闘するのだと思うと、急に怖くなった。恐ろしい魔獣と戦うシーンが頭に浮かんできて歩け出せなくなった。
１階層の魔獣なら大したことはないだろう。それに、リオン・ウ

ォートのステータスなら強くてニューゲームの状態なので、圧勝するに決まっている。……と、ヘタレな俺は何回も自分に言い聞かせて覚悟を決めた。
バンブージャンプで飛び降りる時のように、覚悟を決めて赤い点に向かって走った。
前方に、１ｍぐらいの角が生えたでっかいウサギが立ち上がって、俺の方を見ているのが見えた。
ゲーム画面では大きなウサギに角が生えていただけだったが、実際の一角ウサギは可愛らしさの欠片もない悪人顔のウサギだった。
俺は右手に持ったロングソードを後ろに引き、ウサギに向かって突っ込んだ。
一瞬でウサギに近づき、あっと思った時には体が勝手にロングソードを横に振って首を刎ねていた。
あっと思った時、反射的にロングソードを横なぎに払って、首を刎ねようと頭の中でイメージしたので、体が勝手にと言うのは語弊があるかもしれない。
俺がイメージした通りに体が動いていたのだが、余りにも速かったため、体が勝手に動いたように思った。
それに、一瞬で距離を縮めた時の速度、ロングソードを横に振った剣速は、人外の速さだった。
「本当に弾よりも早いかもしれん」
俺は思わず声にだして呟いた。
大きな角が付いたウサギの頭が転がり、首から血が噴出してコトンと横に倒れた。首の断面は見事な切り口で、リアルに内部が見えるため気持ちが悪くなったが、段々と薄くなって飛び散った血まで綺麗に消えた。
気持ちは悪くなったが、生き物を殺したと言う罪悪感を実感する前に死体が消えた。
アリスのアイテム画面の魔獣バックのアイコンをクリックして、魔獣バックの画面を表示し、獲得したドロップ品を確認した。

一角ウサギからのドロップ品は、魔石、角、皮、肉だった。名称の頭に「一角ウサギの」と付いている。
魔獣を倒せば魔石を必ずドロップするが、角、皮、肉などのドロップ品は5分の1の確率だ。俺は盗賊神の護符を装備しているので、ドロップアイテムを必ずゲットできる。
他にも、女神の護符、不死鳥の尾、そして、成長促進の護符を装備している。成長促進の護符に加えて、特性の効果により獲得経験値は8倍だ。

マップ画面を確認すると、通路の30mぐらい先に赤い点が3つ表示されている。
俺は赤い点を目指して走った。
今度は3匹の吸血蝙蝠が飛んでいた。
さっきと同様にダッシュして、一瞬で距離を詰めて斜めの袈裟切り、切り上げ、そして、正面からの切り下ろしで仕留めた。
今度はイメージ通りに体が動いたが、さっきと比べると動きが遅かった。
先ほどは、以前の体のつもりだったので意識していなかったのだが、今度はイメージ通りに体を動かそうとして力を抜いてしまった。
吸血蝙蝠は3匹とも体が二つになってばらばらと落ちた。
生き物を殺したと言う生々しさを感じた。
ゲームの3Dグラフィックもリアルで生々しいのだが、それでも単なるCGだ。生き物を殺したと言う実感は全く感じなかったが、現実に生々しい死体を見てしまうと気分が悪くなった。

冒険者は牛や豚などの屠殺業者と同じなんだろう。お金を稼ぐために魔獣を屠殺するのが仕事だと割り切らないとだめなんだ。割り切れないのなら、冒険者をやめるしかない。
……魔獣を殺すのが冒険者の仕事なんだと割り切ることにして考えないようにした。

俺は何も考えずに、ひたすら次の赤い点を目指し、宝箱を開け、仕掛けをクリアして魔獣を倒しながら、通路を走り続けた。
マップの3分の2が完成した頃には、随分とリオンの体に慣れてきていた。特性の「高速思考」、「加速」に慣れてたためか、魔獣と戦闘になると加速されて周りの時間が遅くなるように感じたし、リオンの動きに思考が追いつくようになった。
12時頃に安全エリアとなっている小部屋に着いたので、壁を背にして座り込み、ウェストバックに入れた蒸したての中華饅を食べた。
2個ぐらいは食べられると思って買ったのだが、実際には1個で十分に腹が膨れてしまった。思っていたよりも、ボリュームがあるらしい。実際、大きな中華饅はそれなりの重さあった。
……魔獣を殺したので、食欲が失せたのだとは意識して思わないようにした。

食べ物をウェストバックかアイテム画面に入れた場合、熱い食べ物はいつまでも熱いままで、決して腐ることはないし、味が落ちることも無い。新鮮な物は新鮮なまま。冷えたビールなら冷えたままだ。
残った中華饅はウェストバックに放り込んでおけば良いだろう。無理に食べる必要はないのだ。魔法の水筒を取り出して名水を飲みながら、少し休憩してから地下迷宮の攻略を続けた。

1階層で出現する魔獣は、一角ウサギ、吸血蝙蝠、1mぐらいの芋虫のようなクラウラー、1mぐらいもある化け蛙、そして、1階層のフロアボスが3匹のケイブ狼だった。
プロアボスを倒し、ポータルを起動して2階層に上がった時、時刻は午後の2時になっていた。
時間が早いかと思ったが、思った以上の精神的なダメージを受け

ているのか、２階層の探索を開始する踏ん切りがつかなかった。

生々しい魔獣の死体を見すぎた。

罪悪感は無いが船酔いと同じ感じで気分が悪い。魔獣の死体に酔ってしまったらしい。

魔獣のドロップ品を換金して宿屋を探す必要もあるからと自分に言い訳をして、地上に戻ることにした。

地上のポータルの近くに、換金専用の冒険者ギルドの支店が建っていた。換金所に入ると１階のホールに３０ぐらいの窓口が並んでいた。２階にも同じようなホールがあるので、窓口は６０ぐらいになるだろう。

時間が早いためだと思うが、随分と空いている。

７００匹ぐらいの魔獣を倒したと思うが、ドロップした魔石とアイテムを一度に換金すると、大騒ぎになるかもしれないので、魔獣ドロップ品用にアイテム画面を作り、魔獣バックに１００匹分の魔石と２０個分のドロップ品を適当に選んで残して、残りを全て魔獣ドロップ用アイテム画面に入れた。

１階層で１０個ぐらいの宝箱を見つけたが、数枚の銀貨か、魔法薬、そして、安物の武器だった。隠し宝箱も大した物は入っていなかった。

空いている窓口に近づいて、魔獣パックを腰から外し、冒険者カードと一緒に窓口に渡した。

係員は魔獣バックと冒険者カードを横に置かれた装置に入れてディスプレイを見た。

「随分と溜めたんですね、えっと、残念だけど、ドロップ品は必要数に達した物がないわね。どれも、あと少しってとこよ。魔石の換金だけでにする？」

「魔石だけですか？」

と俺は疑問におもって聞いた。

「あぁ、あなたは換金するのは初めてね。ドロップ品は指定された個数が溜まっていれば、クエストを受けていなくても、クエストの受注と達成処理を同時に出来るのよ。だから、必要数が溜まってから換金するのが普通なのよ。物によっては高値で取引されるから、魔獣バックから取り出して、バイヤーに売る冒険者も多いわ。何が幾らで取引されているかは、バイヤーに聞いてね。ギルドは関与してないわ。でも、結構良い値段で買い取ってもらえる物があるらしいわよ」

「なるほど、それじゃ、魔石だけでお願いします」

「分かったわ」

と係員は返事をすると端末を操作した。

「全部で３６シルクになります。お金は銀行の口座に振り込まれます。現金が必要な場合は銀行で下ろしてください。ギルドポイントは３ポイントになります」

係員はディスプレイを見ながら説明すると、装置から魔獣パックと冒険者カードを取り出して返してくれた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

俺がお礼を言うと、係員がにっこりと微笑んで返事をくれた。俺は窓口から離れて、冒険者ギルドの支店を後にした。

魔獣の死体に酔ってしまって、頭がぼうとなってしまった俺は、ポータルの広場に置いてあるベンチに座り込んだ。

魔獣の死体が目の前にちらついていた。

頭を空っぽにして何も考えないようにして、馬鹿になりきって、ぼうと空を見上げ続けた。

……何年前だっけ？

以前にも公園でぼけっと空を見上げて、辛いことを忘れようとしたことがあった。確か、主任になって３、４年ぐらいだったか、仕

事がうまくいかなくて、上司に毎日、毎日、毎日、同じ説教を延々と繰り返されたっけ。まぁ、結局は単なる虐めだったのだが、……
……いや、忘れよう。もう昔のことだ。
物語の主人公なら、美人のヒロインが現れて慰めてくれたりするのだろうか？　確かに、こんな状態でやさしいくされたら、誰だって惚れてしまう。……成る程、だから物語になるのか。……俺は、平凡なサラリーマンだ。そんなヒロインが現れるはずがない。
何も考えないで、ひたすらぼけっとした方が良い。長年の経験で獲得した俺の知恵だ。
……考えることをやめて、ひたすら頭を空っぽにして、空を見上げ続けた。
３０分ぐらい空を見上げ続けてから、俺はベンチから立ち上がり、宿を探すために歩き出した。

時間は十分にあるので、迷宮都市の探索も兼ねて、通りを見学しながら歩いていると、柱や窓の桟に扉が赤い色の中華風の店を見つけた。
殆どの建物はレンガ造りの洋風なのでひどく目立っていた。
見た時、中華の料理店かと思ったが、宿屋も運営しているらしく、宿泊費用の一覧が書かれた看板が出ていた。
都市の中央から離れているためなのか、料金は低めに設定されているし、外見から判断すると、まだ新しい建物のようだ。
内装も中華風かもしれないと少し期待しながら、思い切って中に入いると、内装は普通の宿と同じで正面に受付、左が食堂となっていた。
受付カウンターの奥にチャムチャム族と呼ばれている猫の頭をした女性の獣人が立っていた。
動物の猫よりも人間の顔に近いのだが、それでも、猫の顔なので年齢は分からないのだが、若いように思えるし、微笑んでいるようにも見える。

地球の猫と比較したら失礼になるのだろうが、猫の種類で言えば、シャム猫に似ている。
「いらっしゃい、若い人、食堂は準備中だよ。それとも、部屋を探してるの？」
若い女性の声で話しかけてきた。
「……えっと、……派手な建物だったから、何だろうと思って入ったんだけど、……中は普通なんだね」
「まぁね。見ての通り、ちょっと街の外れにあるからね。目立つように主人が外装を派手にしたのさ、なんでも故郷の建物があんな感じなんだそうだよ。内装も故郷風にしようとしてたから、私が反対したのさ。あんなに派手な内装じゃぁ、落ち着かないもんね。
それより、どうするの？　泊まっていくの？　うちは料理が自慢の店でね。他の店じゃ味わえない料理を出すって、有名なんだよ、部屋でのんびりしてれば、すぐに食事ができるよ。試してみなよ。絶対に後悔はしないよ。どうする？」
「夕食のメニューは何なの？」
「今日の定食のメインは肉団子だよ。味付けが特殊で美味しいわよ。あとは、サラダと特製スープに米よ。米が嫌ならパンにすることもできるけど、うちが炊いた米は美味しいよ。是非、試して欲しいな」
炊いた米とは驚いた。しかし、外国の米は不味いと良く聞くから、期待しない方が無難かもしれないが、試してみるのは良いかもしれない、不味かったらパンにするか、次からは他の宿に泊まれば良い。
「……えっと、個室は空いてる？」
「勿論、空いてるわよ。個室だと1泊7シルクの前払いだけど、いいかい？」
「はい。お願いします」
「はい。まいど。支払いはカード？　それとも現金かい？」
「現金で、払います」
俺はウェストバックからがま口を出して5シルク銀貨と1シルク銀貨2枚を渡した。

「はい。7シルクちょうどね、それじゃ、夕食は炊いた米でいいんだね」
「えぇ、是非、お願いします。」
「分かったわ。それじゃ、部屋に案内するから付いて来て」
彼女は棚から鍵を取り出して受付カウンターから出てきた。俺は彼女の案内に従って2階に向かった。

7時頃に1階の食堂に入ると、シャム猫風のチャムチャム族の男性が近づいてきた。
「お客さん。こんばんわ」
「こんばんわ」
「お客さんの部屋番号は何番ですかにゃ？」
「２０４だよ」
「お1人なら、カウンター席でいいかにゃ？」
「あぁ、かまわないよ」
「それじゃ、お客さんの席はこっちだにゃ」
店員に案内されて、カウンター席に座った。
「お客さんはパンにするかにゃ？　それともご飯にするかにゃ？」
「ご飯で頼むよ」
「分かったにゃ、すぐに持ってくるにゃ」
店員は厨房の方へ行くと、言葉通り、すぐに晩飯を運んできた。
中華風の肉団子、サラダ、どんぶりのご飯、トン汁のような味噌汁、ビールの大ジョッキ。スプーンとフォークに箸が付いてきた。
こっちに来て2日しか経っていないのに、物凄く久しぶりに日本料理を見たような気がした。まるで海外旅行先で日本料理店に入ったみたいに、懐かしい気持ちと同時に、ほっと安心した気がした。
そっと、周りの様子を伺うと、箸を使っている客が2人しかいない、しかも、かなり苦労して使っている様子だ。俺は箸を右手で取り上げて観察した。レストランなどで出される普通の箸だ。
「若い人。箸は初めてですかにゃ？」

カウンターの奥側から声が聞こえた。
声の主を見ると料理人の格好した三毛猫風のチャムチャム族の男性だった。
「いや、初めてじゃないよ。だけど、ここじゃ、珍しいから驚いてた」
「へぇ、箸を知ってるとは珍しいにゃ。……それなら、使い方は分かるかにゃ？」
「あぁ、分かるよ」
俺は右手に箸を持って、肉団子を挟んで彼に見せた。
「へぇー！、驚いたにゃ、お客さん、上手だにゃ」
「まぁね。使い慣れてるから」
「なるほどにゃ、それじゃ、料理が冷めない内に食べて欲しいにゃ」
と言うと奥へ引っ込んだ。
肉団子は一口では食べられないほど大きいため、箸で半分に割ってから口に入れ、どんぶり飯の米を口に運んだ。
予想に反して日本で食べてたご飯よりも美味しい。高級な日本料亭で出てくるご飯に引けを取らない。肉団子も見た目通りの中華風の味で、たれがこってりとしていてとても旨い。
味噌汁を覗いて見ると、見たことが無い具が入っていた。外人の奥さんが作った味噌汁みたいだと思ったが、味は悪くなかった。
久しぶりの日本風の食事を夢中になって食べた。あっと言うまに食事を平らげてしまい、満足した溜息をついてビールを飲んだ。
横から、小エビの唐揚げが入った小皿が横から差し出された。見ると、受付カウンターにいたチャムチャム族の女性が隣に座っていた。
「これ、特別サービスよ。これも、箸で食べてみて」
「ありがとう」
不思議に思いながら、お礼を言って、小エビを箸で挟んで口に運んだ。揚げたてのアツアツで、とても旨い。そして、ビールを呷った。

「これは、旨いね、ビールに良く合うよ」
俺は横で見ていた彼女にお礼を言った。
「あんた、うちの主人と同じように箸の使い方が上手だね。何処で覚えたの？」
「何処って言われてもなぁ、小さい頃からずっと使ってたからだよ」
「ひょっとして、主人と同じ出身かい？」
「ご主人の出身が何処か知らないけど、違うと思うよ。……えっと、王都から5日ほど歩いたところにある山奥で暮らしてた。」
俺はその場で、適当に考えて答えた。「捨て子で、ある老人に拾われて山奥で隠れて暮らしていた」と、とっさに自分の生い立つを考えた。
「山奥ねぇ、……主人の出身は、ベンガル王国の辺境の村だよ、ユリトピア村と言って、チャムチャム族の小さな村から来たのさ。地下迷宮の珍しい食材が欲しくて、ここまで来たそうだよ、何でも、究極の料理を作るのが夢だってさ。呆れちゃうよね」
「究極の料理ですか。……どんな料理か想像も出来ないけど、物凄く旨そうですね」
「どんな料理か、主人も分からないじゃないかしら、夢みたいなことを言ってるし、それより、今日の料理はどうだった？」
「はい。とても美味しかったです」
「それは嬉しいね、これからもうちを贔屓してね。そうだ、あんたの名前は？」
「リオン・ウォートです」
「リオンちゃんね。私はラーニャ、主人の名前はオルモンド。よろしくね」
「こちらこそ、よろしく」
「さて、主人に睨まれないうちに退散しないとね。ゆっくりしていっておくれ」
ラーニャは立ち上がると、空になった食器を運んで行った。
俺は他の客の会話を聞きながら、小エビのから揚げを口に運び、

ビールを飲んだ。部屋に引き上げる頃には、すっかりいつもの調子を取り戻していた。

5話（後書き）

「騎士王物語」の１０話、１１話を流用しています。殆ど変っていません。

6話

精神的疲労を取るために無駄に6時間の睡眠を取ったお蔭で、爽快な気分で目覚めることができた。
宿屋の中庭に出て簡単なストレッチで朝の美味しい空気を満喫した。

朝食を済ませて部屋に戻ると、すぐに地下迷宮を攻略する準備を整えた。
少し早いかと思ったが、宿屋を出て都市の中央にあるゲートに向かった。宿屋を出たのは7時20分だった。
早すぎると思っていたのだが、ポータルに向かう途中、何組もの冒険者と合流してポータルに向かった。広場では弁当を売る屋台が商売を始めていた。
俺は屋台で弁当を購入してポータルに向かう冒険者の流れに乗って歩いた。まるで、通勤するサラリーマンのようだ。
魔法陣の中に入ると、2階層のキーワードを唱えた。
2階層に出てくる魔獣は1階層と殆ど同じ。迷路のパターンは違うのだが、宝箱やイベントも似た感じだ。俺はすぐに赤い点を目指して走った。
最初に遭遇した魔獣は化け蛙2匹に吸血蝙蝠が3匹。1階層と比べると、若干、数が多くなったような気がするが俺は瞬く間に5匹を倒した。

昨日と比べると随分とましになったようだ。十分に休養を取って無理をしなかったのが良かったのだろう。魔獣の死体を見ても何も感じなくなった。
ゲームの情報を元にアリスが提案した最短の攻略ルートに従って迷宮内を突っ走った。攻略ルートがマップに表示されるので、俺は

マップの指示通りに走り、魔獣を見つけたら瞬殺するだけ。
隠し宝箱やスイッチなどの仕掛けはマップに表示されているし、俺が見逃してもアリスが教えてくれる。
アリスとのコミュニケーションに慣れてくると、アリスは言葉でなく、直接、情報を伝えてくるようになった。

１１時頃には２階層を突破し、１２時頃に屋台で買った昼飯を食べて休憩。午後３時間半ごろに３階層をクリアして４階層の入り口に到着した。

地上に戻るには丁度良い時間だ。

地上に戻って宿屋を探すには、午後４時ごろには引き上げる必要がある。しかし、それでは効率が悪すぎると一昨日の夜にプランを立てていた。
俺は睡眠時間が２時間しか必要としないし、若い頃は深夜の１２時過ぎまで仕事をしていた。それに、宿屋で泊まると娯楽が何もないので暇でしょうがない。
地下迷宮の安全エリアで快適に寝泊りできないかとマジックアイテムを確認したら、魔法の小屋を見つけた。
魔法の小屋は見た目は３ｃｍぐらいのサイコロのようなキューブだが、魔力を込めると１辺が２ｍの立方体の箱になる。そして、この箱の中に家が丸ごと入っている。
俺はカスタマイズ機能を使って、庭付きの３ＬＤＫのマンションをデザインした。
昨日は地下迷宮で寝泊りする状況ではなかったが、今日は昨日のことが嘘のように調子が良いので、このまま地下迷宮の攻略を続けることにした。

順調に４階層をクリアして５階層に突入後、午後８時頃に安全エ

リアで晩飯を食べて、休憩を取ってから攻略を続行。深夜1時頃に5階層をクリア。6階層に入ってすぐの安全エリアで魔法の小屋を使用した。
魔法の小屋に入ると入口は6畳ぐらいはある玄関になっており、そこで靴を脱いで中に入るとすぐに30畳ぐらいのリビングになっている。
自由にカスタマイズできたので、間取りはかなり広く取ってあるし、家具や内装も現代日本風にデザインした。冷蔵庫などの電化製品も揃えてある。
ダイニングキッチンに入って夜食を食べてから風呂に入った。
冷蔵庫からビールを出してぐいっと飲んだ。元の世界に戻ったような気がした。
何もかもが新品で、まるで引っ越したばかりのような雰囲気だが、住み慣れた現代日本風のデザインなので、宿屋で泊まるよりも遥かに落ち着く。
俺はビールを飲み干してベッドで眠った。

2時間の睡眠で気持ちよく目覚めることができた。
朝食を食べて昨日に引き続き地下迷宮の攻略を続行した。

そして、3日後の昼頃に10階層をクリアして地上に戻った。

ポータルの広場の屋台で食べ物を買って、昼飯を食べてから冒険者ギルドの支店で、魔石とドロップ品を換金した。
特に何処かに行く当てもないので冒険者ギルドを覗いて見ることにした。
ギルドのロビーが広いので、多くの冒険者がたむろしてもさほど混雑した様子はない。
ずらりと並んだテーブルには、4人から6人のパーティが座っており、みんな会話を楽しんでいるようだ。

ふと、学生の頃の友達の顔を鮮明に思い出した。いつも４人一緒で馬鹿なことをやっては大笑いした。前よりも記憶力が段違いに良くなったためだろう。初めて出会った時のこと、一緒に大学に行って学生食堂で安いカレーを食べたこと、一緒に都会に出て遊びに行ったことなど、一瞬で鮮明に思い出してしまった。

就職先がバラバラだったので、卒業後は殆ど会わなくなったのだが、あれから３０年以上も経っている。大学時代の日々の記憶を詳細に思い出し始めたので、俺はアリスに命じて思い出すことを止めた。

昔の記憶に意識が取り込まれてしまいそうだった。

冒険者達が楽しそうに雑談している様子から学生の頃の記憶が呼び出されてしまったのだろう。気持ちを切り替えて、パーティ募集の依頼を調べた。

パーティに入ってみたいとは思うが、しかし、パーティに入る訳には行かないだろう。

パーティに入ってしまったら、リオンの力を隠し通すことは不可能だろう。絶対にボロが出るに違いない。

神官や魔術師のメンバーを募集する依頼が多い。神官も魔法を使えるのだが魔術師とは方向性が違っており、神官は怪我や病気を治療する技を持っている。

治癒魔法を使える者は極めて稀だ。

怪我を治す方法は薬草などの薬で治す方法、回復用の魔法薬を飲んで治す方法、、そして、治癒魔法の３つの方法がある。

魔法薬は高価で治癒魔法を使える者はめったにいないので、薬で治すのが普通なんだと思う。

暫く時間を潰してから冒険者ギルドを後にして、以前に泊まった宿屋に向かった。

赤白の派手な外装の宿屋の扉を開けて中に入ると、オーソドックスな内装のカウンターが客を待ち構えている。このギャップがなんとも言えない不思議な感じがする。
「こんにちは、お客さん。お泊りですか？」
カウンターの奥側にシャム猫のような頭をした小柄な少年が座っていた。ラーニャに良く似ている。
「こんにちは、君はラーニャさんの息子さん？」
「そうだにゃ、トントンと言うにゃ、3日前に食堂で会ったことあるにゃ」
「うん。3日前に泊まったよ。名前はリオン・ウォートだよ。よろしく」
「こちらこそ、ご贔屓にしてほしいにゃ」
「ところで、個室は空いてるか？」
「空いてるにゃ、1泊7シルクだにゃ」
俺は財布から7シルクを出して、カウンターに置いた。
トントンはお金を取ると、鍵を取り出して立ち上がり、俺を部屋に案内した。

カウンター席に座って、夕食を堪能した。
今日のメインは煮魚だった。甘辛く煮込まれた魚はとても美味で、丁寧に食べつくしてしまった。
魚が好物なので食べられる身は可能な限り食べてしまう。お蔭で皿には見事な魚骨の標本が残った。
満足したゲップを出しながらビールを飲んでいると、ラーニャが食べ終えた食器を片付けるために近づいて来て俺の隣に立った気配がした。
「さすがの私も驚いたわ」
俺は隣に立っているラーニャを見上げたが、普段の顔付きのラー

ニャが居た。
いや、良く見たら、少し目を大きく見開いているようだ。たぶん、驚いた顔をしているのだろう。
「魚が好物の人が骨ごと食べて、何も残っていない皿なら時々見るけど。ここまで来ると芸術品だわ」
なんだか凄いことを言われたような気がする。
「ラーニャさん。今日の煮魚はとっても美味しかったです。これ、何と言う魚ですか？」
焼き魚を売っている屋台なら広場で見かけたが、煮魚の料理は見たことが無い。
「あら、ありがとう。嬉しいわ。この料理は主人の得意料理なのよ。この魚はアンポンヌと言う名前よ。近くの湖で取れる魚でね。塩焼きするとあまり美味しくないのだけど、主人が料理すると別の魚のように美味しくなると評判なのよ。これがアンポンヌだと信じない人もいるぐらいよ」
ラーニャがうふふと嬉しそうに説明してくれた。マップ画面の地図によると迷宮都市から１０ｋｍぐらいのところに大きな湖がある。
「アンポンヌって言うんだ。今度、その湖に釣りに行こうかな」
「あら、それは良いわね。釣った魚を持ってきたら買い取るわよ」
「本当ですか、それなら、息抜きに行ってこようかな」
「この時期なら、それほど混んでいないし、小型のボートも借りられるからお勧めよ。釣った魚を持って来てくれたら、こっちも助かるわ。是非、お願いしたいわね」
「やっぱり、夏になると混むんですか？」
「えぇ、混むらしいわ。私達は行かないけど、泳ぎに行く人が多いそうね。この近くの唯一の観光地だから、仕方がないわ」
ふむ。釣りはあまり得意じゃないけど、暑い夏になったら行って見るか。
「それじゃ、食器を片付けるわね。この皿はオルモンドに見せなきゃ」

ラーニャは皿を丁寧に持ち上げて厨房に運んで行った。どんぶりやお椀は残したままだ。厨房の奥の方から、ラーニャが騒いでいる声が聞こえてきた。

俺は残ったビールを飲み干して部屋に引き上げた。

そして、翌日から地下迷宮の攻略を続行した。

6話（後書き）

「騎士王物語」の１２話を流用しています。第一章の終わりになります。１話の長さの調整がうまく出来なくて、短くなってしまいました。すみません。次話の後半から「騎士王物語」のストーリと分岐します

7話

血を撒き散らして屍となった２０体ほどのゴブリンの騎士は、やがて、徐々に姿を消し、血糊さえも綺麗に消えていった。
ゴブリンの騎士が守っていた高さ３ｍぐらいの両開きの扉が、目の前に建ちはだかっている。この扉の先がゴブリン城の玉座、つまり、２５０階層のボス部屋だ。
マップ画面を確認すると、ボス部屋の中に、フロアボス１体と護衛６体分の７つの赤い点が表示されている。
２５０階層のフロアボスはゴブリンキング、護衛の６体は上位種のゴブリンナイトだが、リオンにとっては大した敵ではない。

今は７月の下旬、地下迷宮の攻略を開始して約４ヶ月になる。１週間のうち６日間は地下迷宮で眠り、１日か２日は地上の宿屋に泊まって休むようにして、ひたすら地下迷宮を攻略した。
この世界の１年は１２ヶ月で、１ヶ月が５週間の３５日、１年は４２０日になる。季節は日本と同じなので、今は夏の真っ最中だ。
リオン・ウォートであることに慣れたし、この世界の生活にも慣れた。とは言っても、地下迷宮を探索する冒険者の生活しか知らないし、迷宮都市から離れたことも無い。
リオンの誕生日は６月なので１６歳になったのだが、中身がどうであろうと、１６歳の少年らしく見えるように、ちゃんとロールプレイをしている。
今では、随分と慣れた。

生産系のスキルを上げるために、神聖協会が提供している全種類の工房施設付きの店を購入したいのだが、残念ながら売れ切れ状態のため、手に入らなかった。
アリスに売りに出たら即時に購入するように命じてあるが、手に

入るのは何年も先になるだろう。
工房が無くてもアリスの機能でアイテムの生産やカスタマイズが可能ではあるが、生産したアイテムを売るためには店が必要だ。
１０００階層を攻略するには１０年以上は軽く掛かるに違いない。今の攻略ペースでは、体は大丈夫でも心が持たない。
店を購入して拠点を確保したら生産系に手を出して攻略ペースを落とそうと考えている。
レベルは３４７になったが、最初から最強の状態なので、レベルが上がっても強くなった実感が無い。パーティを組んだことが無いので、自分がどれぐらいの強さなのか分からないのだが相当な強さなんだと思う。
下手に目立って面倒事に巻き込まれたくないので、初心者冒険者の振りをして隠すように努めているのだが、流石に１人で地下迷宮に篭るのは寂しいと感じ始めている。
冒険者ギルドのカフェテリアで聞く噂話しでは、上位の冒険者達の実力は相当な物らしいので、無理して実力を隠す必要はないのではと思い始めている。
６日前にギルドランクをＣに上げたので、他の街に行ける依頼でも受けてみようかなと考えている。

背中から「黒桜」を抜いてボス部屋の扉を押し開けた。
「黒桜」は刀身が四尺三寸、鞘に入れた状態だと全長が１７０ｃｍ近くもある日本刀だ。腰に下げると引きずることになるので背中に担ぐしかない。
超レアな素材で作られた特製品で特別な魔法の力はないが切れ味が凄まじく、魔闘気の通りも良い。
鉄の鎧であっても簡単に切り裂くことができるし、ドラゴンや鬼人など、普通の剣では歯が立たない魔獣でも切り裂く事ができる。

軽量化の付与魔法を掛けてあるが、鉄よりも重い素材を使用している上、肉厚の刀なので相当な重量の業物に仕上がっている。
しかし、リオンの筋力なら片手で振り回すことも可能だ。

俺は「黒桜」を両手で正面に構えて、護衛のゴブリンに向かって加速しながらダッシュした。
護衛のゴブリンは扉が開いたことに気付いたようだが、扉を見たままで俺の方を見ていない。
敏捷さのステータスが高いので、一般人の4、5倍の素早さで動ける上に特性の効果でさらに4倍に加速した状態だ。俺の動きが見えていないのだろう。
6体の護衛の首を順に一刀で刎ねた。まるで動かない人形の首を順番に切り落とすような感じだ。剣術の技など必要ないんじゃないかと思う。
ボスのゴブリンキングは俺に気付いているようで、玉座から立ち上がって両手剣を構え、俺を目で追っていた。しかし、それでもスローモーションで動いているかのように鈍い。
ゴブリンキングは2mぐらいの戦士で、フルプレートで完全武装しているのだが、フルフェイスの兜で凶悪な顔が見えないためか、怖い感じが全くしない。

俺はゴブリンキングとの距離を一瞬で詰めて、頭上に掲げた「黒桜」をゴブリンキングの兜に振り下ろした。
ゴブリンキングは両手剣を上げて「黒桜」を防ごうとしたが、俺は両手剣を弾き、腕も切りながら完全に切り下ろして、返り血を避けるためにゴブリンキングを蹴飛ばして後ろに飛んだ。
ゴブリンキングは左右に分かれてゆっくりと崩れ落ちた。
俺はゴブリンキングの死体を見ないように後ろを向いて、血糊を吹き飛ばすかのように「黒桜」を左右に振ってから背中の鞘に戻した。

魔獣を殺すことには随分と慣れたが、内臓を撒き散らしたゴブリンの死体を敢て見たいとは思わない。
死体が消えた頃を見計らって後ろを向いた。
玉座のあった場所に、直径１０ｍぐらいの魔方陣が出現していた。２５１階層に行くポータルなのだが、ここで、ポータルに入ってしまうと超レアなアイテムを取り逃してしまう。
玉座の近くに隠し宝蔵庫があるのだが、４箇所の仕掛けをクリアしてからフロアボスを倒すと、宝蔵庫が開放される仕掛けになっている。
俺は隠し宝蔵庫を漁ってから２５１階層に行くポータルを起動してから地上に戻った。

２５１階層のポータルから地上に戻ると街の喧騒の音が耳に入ってきた。ちょうど昼時なので、広場は昼食を食べる人たちで混んでいた。

俺は邪魔にならないように、すぐに魔方陣の外へ出て、良く利用している屋台に向かった。

「らっしゃい。どれにする？」
俺が並んだ行列の先の屋台はホットドックを売っている店だ。２０代の若いテキ屋風の兄ちゃんが汗を流しながら太いソーセージを焼いている。
とても繁盛している屋台で、いつも長い行列が出来ている。昼時になると下手したら３０分から４０分ぐらいの長い行列になる時があるが、日本人の俺にとって行列に並ぶことは苦にならない。
「これとこれとこれ、１本ずつ」
ホットドックの種類は６種類あって１本はそれなりに大きい。
サラリーマンだった俺なら１本で十分な量なのだが、地下迷宮の

攻略で相当なカロリーを消費するので2本ぐらいがちょうど良い。
俺は食いしん坊なので、美味しい食べ物を沢山食べられてだけで幸せだ。この世界に来て良かったとさえ思っている。
俺の順番が来たので適当に3種類を選んだ。、
「ほらよ。3本なら1シルクだ」
1本で40コルだが、3本なら1シルクとかなり割安になるので、俺は必ず3本で買うことにしている。俺は1シルク銀貨を渡して3本のホットドックを受け取った。
「まいど！」
テキ屋の兄ちゃんの威勢の良い声を背中に聞きながら屋台から離れた。

昼飯をホットドックで済ませた俺は冒険者ギルドの支店に向かった。ギルドランクのポイントを稼ぐために地上に戻ったら必ず換金をすることにしている。

「リオン・ウォートさん」
窓口で換金を済ませて出口に向かう途中、女性の声で名前を呼ばれたことに気がついた。
名前を呼ばれるほどの知り合いは居ないので、不思議に思いながら声が聞こえた方向に振り向いた。

黄金色に輝いた女性が居た。……眩しいと感じたが、黄金色の輝きが一瞬で消えた。目の錯覚だったかと自分を疑ったがすぐに我を忘れた。

そこには、黒いドレスを着た美しい日本女性が俺に微笑みかけていた。
黒色の大きなつばが広がっている丸い帽子。麦わら帽子のような

強い日差しを防ぐために女性が被っている円筒型の帽子だ。
背中まで伸びているらしいストレートの黒髪。黒くて大きな瞳が特徴的な日本人のような顔立ちの美女。身長は１７０ｃｍぐらいで黒いドレス。たしかゴスロリと呼ばれるドレスだったと思う。

……唖然とした俺は、バチバチと数回の瞬きをして女性を見直した。
身長よりも少し長い魔術師の杖を持っており、黒髪から尖った大きな耳が出ていた。良く見れば、妖精を思わせる顔立ちだ。
エルフ族、いや、魔力の高さや雰囲気からハイエルフ族だと思う。
見た瞬間、俺の理想の女性が立っていると思った。
良く見直せば、確かに雰囲気が日本人を思わせるのだが、誰が見てもエルフ族の女性にしか見えないだろう。

「あなたはリオン・ウォートさんですよね？」
「……あっ！　はい。そうです」
数秒だったのか、数分だったのか、まったく分からないが、女性が微笑みながら再び俺に声を掛けたので、正気に戻った俺は慌てて返事をした。

「良かった。返事が無いから、てっきり人違いだったかと思いましたわ」
女性がほっとした顔で答えた。
正気に戻ってから気がついたが、女性の年齢が良く分からない。１７歳ぐらいの少女にも見えるし、数百歳ぐらいにも思える。ハイエルフ族だとしたら、数千歳であっても不思議では無いかもしれない。
「えっと、あなたは誰ですか？」
「私は、マリア・エーデルワイズ・ロシェルと言います。魔術師学院の顧問です」

マリアは左足を後ろに引いて、優雅にお辞儀をした。
「リオン・ウォートです。よろしくお願いします」
俺も名乗ってから腰を９０度に曲げてお辞儀を返した。顧客に対するお辞儀は新人教育で教え込まれた基本中の基本だ。サラリーマンの長年の習性のお蔭か。お辞儀をしたら、自然と打ち合わせに対する心構えが生まれて落ち着きを取り戻した。
「それで、魔術師学院の顧問さんが、私に何の用でしょうか？」
「あら、若いのに随分と礼儀正しいのね。それと、私のことはマリアと呼んでください」
「はい。分かりました。それで、マリアさん。御用は何でしょうか？」
「実は、あなたにお願いしたいことがあるのです。話だけでも聞いて頂けないかしら」
「お願いですか？」
「えぇ、ここでは詳しい話しは出来ませんわ。場所を変えて説明します。もし、用事があるのでしたら、都合の良い日時を指定してください。あなたの都合に合わせますわ」
マリアは俺が話しを聞くと言う前提で話しを進めた。俺は話しを聞くとは返事をしていないのだが、見かけによらず交渉が上手だ。
以前の俺なら美人の女性が話しかけてくれれば、新興宗教関係か何かのセールスを疑って、話だけでもと言われても断るのが普通なのだが。
何故か話を聞く気になっていた。
「いえ。特に用事は無いです」
「あら、それなら、場所を変えましょう。静かに話せる場所を知ってますから、案内しますわ」
マリアが、パッと花が咲いたかのように嬉しそうに微笑んだ。この時は、マリアの魔性に完全に魅入られていたことに気づいていなかった。
俺はマリアに連れられて冒険者ギルドの支店を後にした。

高級そうな喫茶店に案内され、店員の案内で商談をするための談話室に入った。
６畳ぐらいの小さな会議室の部屋でマリアと向かい合わせに座った時、俺は言いなりになって着いて来た事を後悔し始めていた。
店員がお茶を入れたカップと受け皿をテーブルに並べ、お茶菓子とティポットをテーブルに用意してから出て行くと、マリアが話しを切り出した。
「無駄話で時間を潰しては申し訳ないから、用件を説明するわね。簡単に説明すると、ある遺跡の封印を解くのに協力して欲しいの。とても厄介な封印で、特級魔術師が２名は必要なのよ。
魔術師ギルドの登録情報を検索して、特級魔術師資格を持っている人の名簿を確認したら、あなたの名前を見つけたのよ。それで、探索の魔法を使って、やっとあなたを見つけたと言う訳よ」
そう言えば、リオンは特級魔術師の資格を持っていた。魔術師学院の顧問が一介の冒険者に何の用だろうと疑問に思っていたが、特級魔術師を捜していたと言うのなら納得できる理由だ。
「特級魔術師の資格ですか？」
「えぇ。この王国で特級魔術師はあなたを入れて５人しか居ないわ。王国の宮廷魔術師と魔法騎士団の団長。現役を引退した白髭の賢者。そして、私。
私も特級魔術師の資格を持ってるのよ。
宮廷魔術師と団長さんが私の頼みを聞いて貰えるはずが無いし、白髭の賢者も無理だと分かっていたから、あなたに期待したのよ。
だけど、特級魔術師の有資格者を確認して驚いたわ。まるで、この世界に降って沸いたかのように特級魔術師が５人に増えていたのよ。たぶん、私以外には誰も気づいていないと思うわ」
マリアが嬉しそうに笑って、カップのお茶を飲んだ。
「あっ。冷めない内にお茶をどうぞ。ここのお茶菓子も美味しいわ

よ」
マリアが焼き菓子が入った皿を差し出して勧めたので、俺はひと口サイズの焼き菓子を取って口に入れた。
「説明を続けるわね。お茶を飲みながら聞いて頂戴。
解除したい封印は遺跡の奥にあるわ。あなたが引き受けてくれたら、考古学部門の部長さんと助手と一緒に行くことになるわね。それから護衛の冒険者のグループも一緒になるわ。
遺跡のことや封印のことは今はあまり話せないけど、引き受けて貰えたら詳しく説明するわ。
準備するのに1週間、遺跡までの片道が1週間ぐらいで調査期間が1ヶ月ぐらいだから、最大で2ヶ月ぐらいになるかな。
調査するためには学院の関係者である必要があるから、私の助手になって貰うわ。
調査が終われば、助手を辞めても良いけど、毎月、給料が出るからお得よ。それに、独身寮も用意するわよ。
報酬は１００クラン。特級魔術師を2ヶ月間も雇うとなると報酬は少ないかもしれないけど、これ以上は出せないの。その代わり、報酬は前払いにするわ。
どうかな、考えて貰えないかな？　引き受けて貰えたらとても嬉しいわ」
マリアが期待を込めた目で、じっと見上げてきた。思わず、はいと言ってしまいそうになったが、なんとか堪えた。
１００クランなら1千万円に相当する。
プロ野球選手の世界トッププレイヤーだったら安いのかもしれないが、平サラリーマンの俺にとっては破格な報酬だ。
「分かりました。引き受けます」

……気づいたら、マリアに返事をしていた。
なんだかおかしい。いつもの俺では無い。
冷静に裏を考えようとするのだが、何かが邪魔して考えられない。
断る理由が考えられない。

「ありがとう。嬉しいわ。……でも、そんなに簡単に決めても良かったの？　って、聞きたいところだけど、断られても困るから、聞かないことにするわ」

マリアは「うふふ」と嬉しそうに笑うと、カップを持ち上げてお茶を飲んだ。
マリアの笑顔が見られて喜んでいる自分に気づいた。
精神分裂症かもしれない。完全にマリアにイカレてしまった自分と、それを冷静に見ている自分がいる。

「早々で申し訳ないけど、明日、魔術師学院に行けないかしら、助手に登録したいし、旅の準備を整える必要があるから、学院都市で1週間ぐらい滞在して貰うことになけど、良いかしら？」
「えぇ、特に予定は無いので、大丈夫です」
「良かった。助かるわ」
俺はカップを取ってお茶を飲んだ。マリアの言いなりになりたがっている自分に抵抗するのを諦めると随分と気持ちが楽になった。

「ところで、あなたは何処で魔法を習ったの？」
「何処って？」
「つまり、誰に魔法を教えて貰ったの？」
「誰と言われても……。」
まさか、基礎知識をロードしましたと言う訳にはいかないだろう。
俺はとっさに人里離れた森の中で世捨て人の老人に拾われて育てられたことにした。

「秘密なの？」
「いえ、秘密って程でもないけど、えっと……。師匠です。師匠に教えて貰いました」
世捨て人の老人は師匠で、魔法と剣術の両方の達人と言うことにした。
「師匠って誰なの？」
「えっと……。俺は森に捨てられた捨て子だったんだけど、森に住んでいた師匠に拾われて育てられたんですよ。小さい頃から師匠に魔法や戦闘技術を叩き込まれたけど、半年前に師匠が死んだので、森から出て、この迷宮都市に来て、冒険者になったんです」
「へぇ、そうなんだ。それで、師匠の名前は何と言うの？」
「さぁ、知らないです。名前を教えて貰っていないので分かりません。子供の時から師匠と呼んでいました」
「そう。誰かしら。きっと有名な人だと思うわ。特級魔術師を育てられる人なんて、めったに居ないはずだもの」
マリアはお茶をひと口飲んで考え込んだ。誤魔化すことが出来てほっとした俺も落ち着きを取り戻すためにお茶を飲んだ。

「あっ、ごめんなさい。考え込んでしまったわ。
それでは明日の朝、学院都市に行く乗合馬車の発着所で待ち合わせましょう。
確か乗合馬車は9時半に出発するから9時頃に来て頂戴。乗合馬車の発着所は分かる？」
「いえ、何処ですか？」
「発着所は、冒険者ギルドから西に向かう道をまっすぐに行って、商店街に入る道を右に曲がるのよ。そこから……」
マリアは乗合馬車の発着所の場所を説明した後、用事があるからと立ち上がったので、俺も一緒に喫茶店を出た。必ず馬車の発着所に来るようにと念を押されてからマリアと別れた。

8話

マリアと別れてから、いつも利用している宿屋に向かって商店街を歩いた。
地下迷宮に入って安全地帯で魔法の小屋で休むことも考えたが、誰も居ない部屋に戻りたくなかった。
マリアのことを考えながら歩いた。目の前にマリアの笑顔がちらついている。何気に神聖協会のネットワークでマリアの情報を検索した。

マリア・エーデルワイズ、ハイエルフ族、女性、３６７歳、エルフ族の聖地オフェーリア出身、魔術師学院の名誉顧問、特級魔術師の資格、……。
マリア自身は論文を出していないようだが、魔術師学院のデータベースに協力者にマリアの名前が入った論文がいくつも見つかった。遺跡や古代文明に関する論文が多い。

どの情報もマリアが提案した内容を裏付けており、今のところは騙された兆候は全く無いが、マリアを信じたいと思う気持ちが大きく膨れ上がっていることに気づいた。
「アリス」
「はい。マスター」
「魅了の魔法を掛けられたり、あるいは、俺の意識が操作されたような痕跡はないか？」
「査定します。……魅了の魔法の形跡も、意識を操作された痕跡もありません」
「俺がマリアに魅了の魔法に掛けられる可能性はどれぐらいあるんだ？」
「殆どありません。マリアさんはマスターの抵抗力を上回る強制力

を持っていません。私が外部からの影響を遮断しますので、マスターが他人に意識を操作される可能性はありません」
「俺の意識を操作したり、魅了の魔法を掛けたりされる可能性はあるのか？」
「０ではありませんが、極めて低いでしょう。マスタの抵抗力を上回るほどの強制力を持つ者は殆ど存在していないと思われます」
アリスが断言するのならマリアが俺に魅了の魔法を掛けた訳ではないのだろう。しかし、今の俺は普段の自分ではないと思う。アリスに不審な点があれば警告するように命令しておいた。

赤白の派手な両開きの開戸を開けて中に入ると、カウンターの奥にシャム猫の顔をしたトントンが座っていた。
「トントン、こんにちは」
「こんにちは、リオンさん」
「個室は空いている？」
「空いているにゃ」
「一晩で頼むよ」
俺は、財布から7シルクを取り出して、カウンターに置いた。
トントンは銀貨をしまってから、カウンターの下から鍵を取り出して立ち上がった。
「案内はいいよ。鍵を渡してくれ」
「まいど、ありがとうにゃ、部屋の番号は２０３だにゃ」
トントンが鍵を差し出したので、俺は鍵を受け取って、２階に上がった。

「ふぅー！」
カウンター席で夕食を食べ終えて、ビールを飲んで溜息をついた。
マリアの依頼を安易に引き受けても良かったのだろうかと、いつもまでも、グチグチと考え込んでいた。

「あら、リオンちゃん。恋をした顔をしてるわよ。何なら相談に乗ろうか？」
再び、ビールをあおって盛大な溜息をついた所でラーニャに話しかけられた。
隣を振り向くとラーニャが嬉しそうな顔で見ていた。
最初はどんな表情をしているのか良く分からなかったが、今なら、鼻にしわを寄せて目じりが下がっているので、人間に例えれば、にやついた顔つきをしていることが分かる。
「ラーニャさん。こんばんは。仕事は良いの？」
「えぇ、大丈夫よ。リオンちゃんの話を聞かなきゃ、仕事にならないもの」
「僕の話ですか？　何も無いですよ」
「あらあら、隠そうとしても駄目よ。今のリオンちゃんは人間族の男性が恋をした状態にしか見えないわよ。リオンちゃんの相手はどんな女性なのか、とっても興味があるわ。
どんな人なのか、詳しく話しなさい。勿論、誰にも言わないわよ。
まぁ、夫と家族は別だけどね。
話をするだけでも、随分と楽になるそうじゃない。私なら種族が違うから恥ずかしくないでしょう」
今までの長い人生で、初めての経験がないので分からないのだが、俺はマリアに恋をしたのだろうか？
つまり、一目惚れと言うやつなのかもしれないが、しかし、これが一目惚れだとするなら、考えを改めなくてはいけない。
一目惚れがこんなに強烈なものだとは予想外だ。
しかし、６０にもなって一目惚れとは、我ながら情け無いと言うか、恥ずかしいと言うか、なんとも複雑な気分だ。
たぶん、理想的な美女が気になっているだけで、時間が経てば気にならなくなるはずだ。
「別に恋をした訳では無いよ。ちょっと気になる女性に会っただけだよ」

「うふふ……。ちょっと気なる女性と言うところが、恋をした証拠ね。
それで、どんな女性なの？」
ラーニャが完全に話しを聞く体勢になった。ある程度は話さないと解放して貰えないだろう。

「恋じゃないよ。これでも冒険者だからね。護衛に仕事を依頼されただけさ。
相手はハイエルフ族の女性だよ。
黒髪に魅力的な黒目をした女性さ。見た目は若いけど僕よりも遥かに年上だよ」
「あら、ハイエルフの女性とは、流石はリオンちゃんね。
エルフ族でさえも人間族がものにするのは難しいらしいし、ハイエルフの女性となると絶望的かもしれないわね。
でも、リオンちゃんならきっと大丈夫よ。リオンちゃんはエルフ族のような人間離れした顔をしているもの。
そうねぇ、……とにかく、諦めたらだめよ。押して、押して、押しまくって、例え、嫌がられても、食らいついて離さない根性が必要よ。
足で蹴られても、諦めないで抱きつくのよ。男は誰だって女性に抱きつかれたら喜ぶのよ。本心では喜んでいるはずだわ。
少なくとも、私は根性で、オルモンドをものにしたわ」
最初からラーニャに期待していなかったが、いつの間にやらラーニャの惚気話になっている。女性なら大丈夫でも、男性が無理やり抱きついたら犯罪だ。
「オルモンドさんが足で蹴ったんですか？　とてもそんな風には見えませんよ」
「そうなのよ。私のために無理したのよ。
私って人間族で言えば、王族の血筋でね。
オルモンドったら、私では身分が違いすぎるからと心を鬼にして

私を嫌っている素振りをしたのよ、でも、ちゃんと私には分かっていたわ。オルモンドは私のことを愛しているってね。
それで、私の方から積極的に抱きついてあげたの。それはもう。死ぬ気でがんばったわ」
ラーニャは嬉しそうな顔をした。
「それは、随分と苦労したんですね。仲が良くてお似合いの夫婦だと思ってましたが、そんな裏があったんですか？」
「お似合いの夫婦だなんて、嬉しいことを言うわね」
ラーニャがパンと俺の肩を叩いて嬉しがった。

「あらやだ。リオンちゃんの相談に乗ってたのに、私のことばかり話しちゃったわね。
とにかく、死ぬ気でがんばれば、絶対になんとかなるから、リオンちゃんもがんばってね」
「はい。ありがとうございます。とても参考になりました。ラーニャさんのような夫婦になれるように死ぬ気でがんばります」
「うふふ……。私達のような夫婦だなんて、リオンちゃんは褒めるのが上手だわ。
その調子で相手を褒めれば、きっとものになるわ。例えハイエルフでも、リオンちゃんならなんとかしそうね。
応援してるからがんばってね」
ラーニャが再び俺の肩をパンパンと叩いてから、立ち上がり、俺が食べ終えた食器を積み上げて厨房へ運んだ。
有効なアドバイスは何も得られなかったが、それでも随分と気持ちが晴れた。
俺は残ったビールを飲み干して部屋に戻った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

翌朝、マリアと約束した乗合馬車の発着所へ向かった。
発着所には5、6人の行列が出来ており、その最後尾にマリアが並んでいた。
黒色のノースリーブのワンピースで裾が膝上しかないミニスカート。黒色のつばが広い帽子に黒色のマント。
制服のような形式ばったデザインなので、たぶん、魔術師学院の制服なんだと思う。
昨日と同じく身長よりも少し長い杖を持っていた。

俺に気づいたマリアが笑顔で手を振った。スポットライトが当たったかのように、そこだけ明るくなったかのように思えた。
まるで、映画やドラマのワンシーンのように見えた。
高校2年か3年の女子学生にしか見えない。まるで、トップアイドルが青春ドラマの演技をしているかのようだ。

昨日のように、我を忘れてしまうような兆しは無いのだが、心臓がドキドキしてきた。
トップアイドルを相手にすれば、誰だってドキドキするはずだ。
これは断じて恋では無い。

俺は何くわぬ顔でマリアに手を振り返し、急ぎ足でマリアに近づいた。
「おはようございます。お待たせして申し訳ありません」
「おはよう。リオンくん。何だか堅苦しい話方ね。もっと気軽に話してくれないかな」
マリアが不満そうな顔で文句を言った。凄い演技力だと感心した。
まるで青春ドラマを生で見ているような錯覚に陥った。
「おはようマリア。ひょっとして待たせた？」
俺はマリアの恋人役の俳優になりきって演技をした。

「そう。その感じよ」
マリアが嬉しそうに微笑んだ。マリアの微笑みは殺人級の武器だ。とても心臓が持たない。
「すみません。今のは冗談です。ワルノリしました。マリアさんは雇い主ですから、とても無理です」
はっと我に返った俺は速攻で頭を下げて謝った。
「そうなの？　さっきの感じはとっても良かったわよ」
「すみません」
俺はさらに深く頭を下げた。
「分かったわ。とにかく、頭を上げて頂戴」
声が少し怒った調子になっている。俺は頭を上げてマリアを見た。怒った顔と言うよりも不満気な顔をしていた。
「今はいいわ。昨日会ったばかりだから仕方ないわね」
「すみません」
俺が再び頭を下げたタイミングで乗合馬車が発着所に近づいて来た。４頭立てのマイクロバスぐらいの馬車だ。
「あら、馬車が来たわ」
マリアが近づいて来る馬車を見た。いつの間にやら行列は１０人ぐらいに増えていた。
「私が雇い主だから、料金は私が払うわね」
「はい。ありがとうございます」
皮肉を言われた気がしたが、俺は素直にお礼を言った。自分の料金は自分で払いますとはとても言える雰囲気ではない。
「うふふ。しょうがないわね」
マリアの機嫌が直ったようだ。

俺はマリアに続いて馬車に乗り込みマリアの隣の席に座った。
「リオンくんは乗合馬車は初めてよね」
「はい。そうです」

「慣れない内は、舌を噛むから喋らない方が良いわよ。気分が悪くなったら、足元にバケツがあるわ。４頭立ての高速馬車だから魔術師学院まで２時間よ。途中で１回だけ休憩があるわ」
「分かりました」
「昼ごろに到着するから先に昼食にするわね。でも気分が悪くなったら無理して食べない方がいいわよ。到着したら昼食を食べるかどうか聞くから遠慮しないでね。
まぁ、リオンくんなら大丈夫だと思うけどね」
どうやら、相当揺れるようだ。覚悟した方が良いだろう。
「了解です」
「何か分からないことがあったら遠慮なく聞いて頂戴ね」
「分かりました」

馬車は４座席が６列で２４人乗りで、１７人の乗客が乗り込んだ。御者がバランスを取るために、乗客の何人かを移動させてから出発した。
乗合馬車はでこぼこの道を時速３０ｋｍぐらいの速度で走った。
座席は広く作られていてクッションが敷き詰められており、体が飛び跳ねても隣の席の乗客にぶつかることは無いのだが、しっかりとつかまっていないと座席から飛び出してしまうかもしれない。

最初の３０分はあっと言うまに過ぎて、途中の休憩場所に着く頃には随分と馬車に慣れたが、その後の１時間がやけに長く感じた。
学院都市に入ると道が舗装されているため、揺れが無くなり、すぐに魔術師学院の巨大な正門に着いた。
乗合馬車の発着所で乗客が降りると、馬車はすぐに居なくなった。
「リオンくん。お昼は食べられるかしら？」
「はい。大丈夫です」
馬車から降りて腰を伸ばしていたら、マリアが聞いたので俺は即答した。

マリアに連れられてしゃれたお店に入り、マリアと向かい合わせで席に座った。
「リオンくんは何にするの？」
「そうですね。お勧めの定食コースってありますか？」
「えぇ、あるわよ」
「それなら、お勧めにします」
「分かったわ。私も同じお勧めにしようかな」
初めて入る店で注文に困ったら、お勧めを注文するのが無難だ。店のお勧め料理なら外れは殆ど無い。乗合馬車の料金はマリアが払ったので、昼飯代は俺が払うつもりだ。
俺は手を上げて、店員を呼んだ。
「昼のお勧めコースを2人分頼むよ。アリアさん。飲み物はオレンジジュースで良いですか？」
「えぇ、いいわよ」
「オレンジジュースを2人分ね」
「かしこまりました」
店員がテーブルから十分に離れるのを待った。
「マリアさん。乗合馬車の料金を払ってもらったから、昼飯代は僕が払いますよ」
「あら。雇い主は私だから、私が払うわよ」
「これでも、男ですからね。見栄ぐらい張らせてください」
「まぁ、リオンくんも男の子なのね。うふふ。分かったわ」
マリアは可笑しそうに笑って了承した。男心を満足させる対応だ。男を立ててちゃんと見栄を張らせるのも女の器量だと思う。アリアは理想の女性だよなぁと俺は感心した。
運ばれてきた料理はシーフードパスタだった。量的にはちょっと物足りないのだが、スープ、サラダ、デザートとフルコースになっていて、いかにも高級料理と言った感じだった。

「学院に行ったら、リオンくんの魔力測定をしたいのだけど、かまわないかしら？」
「魔力測定ですか？」
「えぇ、そうよ。嫌なら無理にとは言わないわ」
測定結果は、魔術師ギルドのデータベースに登録されているので、今更隠す必要はない。
「良いですよ」
「ありがとう。ギルドのデータベースにリオンくんの測定結果が登録されているけど、最新のデータが欲しいのよ。面倒かもしれないけどお願いね。
魔力測定が終わったら、助手の登録をするわ。助手のカードは明日の朝に仕上がるはずだから、明日も学院に来てね。
教授に紹介するから暇なら教授のところに居ると良いわよ。教授のところには助手と弟子がいるし、遺跡に同行する仲間だから仲良くなった方がいいわ」
「教授って誰ですか？」
「あら、そう言えば説明してなかったわ。
教授は、マーリン・トワイライト導師のことで考古学部門の部長さんよ。「僕のことは教授と呼びたまえ」と言う変人さんで、私と同じハイエルフ族の男性……。
とっても楽しい人よ。会えばリオンくんも気に入るわ」
「そうですか」
マリアが楽しそうに教授の説明をしたので、俺はぶっきらぼうに答えた。
「独身用寮にはすぐに入れないかもしれないから、その場合は宿屋に泊まって頂戴。宿代は必要経費として後で精算するから、面倒かもしれないけど領収書と一緒に申告してください」
「はい。分かりました」
「何か質問はある？」
「いいえ」

「準備に1週間ぐらい掛かるから、その間はここで遊んでいればいいわ。魔術師学院の図書館は世界一の規模を誇っているから、一度は行って見たらいいわ」
「世界一とは凄いですね」
「まあね。確かに蔵書の量と規模は世界一だけど、質の方は期待しない方が無難かもね」
「そうなんですか」
「行けば分かるわ。そろそろ、学院に行きましょうか？」
「そうですね」
俺は返事をしてから手を上げて店員を呼んで精算した。別に大したことは無いのだが、平サラリーマンの感覚からするとかなりの高額で、この店には二度と来ないぞと内心で誓った。

9話

マリアの案内で魔術師学院の敷地の中に入った。
街の中にさらに小さな街が作られているかのようで、敷地に入ると雰囲気が変った。
マリアの説明では、学院内には誰でも自由に入れるそうだ。正門は日が暮れる頃に閉められるのだが、正門の横に出入り口があるので夜でも出入りが可能らしい。

敷地内の殆どの人が魔術師学院の制服を着ており、冒険者の格好をした俺は珍しいらしい。まるで、珍獣でも見るかのように好奇の目で見られた。マリアも注目を浴びてしまったようで、俺はマリアに申し訳ない気持ちになった。

目的地の研究棟は学院の奥に建てられており、学院を横断した。途中、マリアが学院の建物の説明をしてくれたので、かなりの距離を歩いてもさほど苦にならなかった。
マリアに連れられて研究棟に入り、地下に降りた奥の厳重に封印された扉の前に来た。
マリアは魔法の封印を解き、鍵で錠前を解除して扉を開け、俺を部屋の中へ誘導した。
部屋の中央に測定装置と思われる装置が置かれていた。

部屋自体は中世風なのだが中央に置かれた装置はシンプルな構造なのに遥かに進んだ未来の装置のように見えて、物凄く場違いな印象を受けた。
「これが測定装置よ。中央に椅子があるからそこに座って頂戴、邪魔な荷物はその辺に置けば良いわ」
俺はマリアの指示通りに背中に担いだリュックと腰のロングソー

ドを床に置いて、装置の中央にある椅子に登って座った。
マリアは装置に接続されている操作端末の椅子に座って装置を起動した。装置に明かりが次々と灯り、微かな振動音が聞こえだした。
俺がロードした基礎知識には魔法に関する膨大な知識が含まれている。俺が座った魔力測定装置が単純に魔力を測定するだけの装置ではないことが分かった。
「マリアさん。この装置は単純な魔力測定装置じゃないですよね。何を測定するんですか？」
「これは最新式の魔力測定装置よ。魔力と属性を同時に測定できるの。1分で終わるから、しゃべらないでじっとしてて頂戴」
俺は言われた通り、黙って動かないようにした。成る程、属性を測定する装置だと言うのなら納得だ。しかもたったの1分で測定できると言うのなら、マリアの言う通り最新式の装置なんだろう。
「終わったわ。椅子から降りても大丈夫よ」
1分よりも長く感じたが、俺は黙って椅子から降りた。
「装置を停止するから、ちょっと待ってね、私の研究室に行くから、置いた荷物を回収して」
マリアは俺に説明すると操作端末の操作を続けた。俺は言われた通り、リュックとロングソードを身につけた。
装置の明かりが消え、動作音も消えた。装置が停止したのだろう。
「それじゃ、行きましょう」
マリアは俺に声を掛けると部屋を出た。俺が外に出るとマリアは元通りに鍵をして魔法の封印を復活させた。
「結果はどうでした？」
「そうね、ギルドに登録されていたデータより数値が増えてたわよ。私の研究室に行ったら見せてあげるわ。行きましょう」
マリアが通路の先に向かって歩き出したので俺はアリアの後を追った。

マリアの案内でマリアの研究室に入った。
入ってすぐの部屋は学校の教室の半分ぐらいの広さがある。片方の壁に端末の机が６個分並んでいる。それぞれが個室のように仕切られていた。
部屋の中央に大きな作業机と椅子が左右に６脚。移動式の黒板のような立て板に設置された６０インチぐらいの液晶ディスプレイ。
部屋の奥にさらに部屋があるようで、奥に入るためのドアが均等に３個並んでいた。
後で分かったのだが、向かって右がマリアさんの個室、つまり、導師用の執務室。真ん中が台所兼倉庫。左は助手用の小部屋が６個分並んでいる

「荷物を適当に置いて、作業机の上にでも床でもどこでも良いわよ。先に測定結果を見せるから、椅子に座って頂戴」
俺はマリアに言われた通り、机の上に荷物を置いて椅子に座った。マリアは移動式のディスプレイを見やすい位置へ移動させ、協会の腕輪をセットしてディスプレイに情報を表示した。

「左がギルドに登録されていたデータ、右が今回測定した結果よ。見ての通り、約１０％ぐらい増えてるわね。
ギルドに登録されていたデータの測定が６ヶ月前で、あなたの年齢が１６歳だとしても増加率が高すぎるわ。
地下迷宮で相当無茶をしたんじゃないかしら」
マリアが呆れた顔で俺を見た。俺はビクッとした。
「いくら若いと言っても、無理しない方がいいわよ」
マリアはディスプレイに別のデータを表示した。
「これはあなたの各属性の魔法力よ。高い水準で全ての属性を網羅してるわ」
マリアは俺のデータを左に移動させて、右側に別のデータを表示した。

「これが私のデータよ。そして、これが私の魔力数値。あなたの数値の半分ぐらいかな」
マリアの魔力測定データもギルドのデータベースに登録されている。昨日、協会のネットワークで検索して見た覚えがある。
「知ってるとは思うけど、一応、個人データにはセキュリティが掛かっているから、普通は見れないのよ」
何気にマリアが爆弾発言をした。俺はすぐにアリスに確認した。
「マリアさんはどうやって僕のデータを手に入れたんですか？」
「本当は秘密なんだけど、誰にも言わないでね。
実は特殊なアプリケーションが存在していてね。そのアプリケーションを使うと個人情報が見れるのよ。一部の関係者では有名な話だから、アプリケーションの存在を知っている人は意外と多いかもしれないわね。でも、アプリケーションを持っている人は限られるわ」
アリスに確認すると俺のＩＤには最上位の権限が付いているので、どんな情報でも参照可能で変更も自由にできるらしい。
「なんだかハッカーツールみたいですね」
「まぁね」
マリアはディスプレイのデータを消して、協会の腕輪を外して自分の左腕に着けた。
「それじゃ、助手の登録をするから、魔術師ギルドのカードと特級魔術師資格のカードを貸して頂戴。冒険者ギルドのカードでも良いわよ」
俺はウェストバックからカードを出してマリアに渡した。
「１０分ぐらいで終わると思うから、ちょっと待っててね」
マリアは俺はカードを持って奥の部屋に入って行った。
予告通り１０分ぐらいで小箱を抱えたマリアが戻ってきた。
「学院のカードと制服は明日の朝になるわ。カードを返すわね」
マリアは箱を作業机の上に置いてカードを差し出した。俺はカー

ドを受け取ってウェストバックに入れた。
「それから、これを渡すわ。助手になってくれたお礼よ。助手を辞めたら返して貰うけどね」
マリアが箱を俺の方に押した。
「何ですか？」
「開ければ分かるわ」
俺は箱の蓋を開けた。黒色のハンドガン型の魔弾銃が入っていた。
「魔弾銃よ。一緒に入っているカードが所有権と使用許可証。あなたの名前を登録しておいたわ。申し訳ないけど助手を辞める時は必ず返して」
ショットガンを片手で持てるように短くしたようなデザイン。無骨で銃身が長く銃口がかなり太い。取り出して右手で構えると、コアに魔力のラインが繋がって俺と同調した。
「あら、使い方を知っているようね」
「えぇ、知っています」
「それなら問題ないわ。許可証があるから自由に使えるけど、あまり見せびらかさないでね」
「分かりました」
俺はマリアに返事をしてからウェストバックに魔弾銃とカードを入れた。
「それじゃ、あなたを教授に紹介するわ。一緒に来て」
俺はマリアの後に付いてマリアの研究室を出た。

「こんにちは、教授はいる？」
マリアはノックも無しに研究室に入ると声高に呼んだ。俺はマリアに続いて研究室の中に入った。
部屋の様子はマリアの研究室と殆ど同じで、作業用机には2人の男女が座っていた。
「おや、マリアくんじゃないか。久しぶりだね」

向かって右側の中央に座っていた男性が立ち上がってマリアに答えた。
身長は１９０ｃｍぐらいで細身。金髪の長髪に尖った耳が突き出ている。緑色の目。人間離れした妖精のような整った顔だち。放出している魔力が並ではないところを見ると、ハイエルフじゃないかと思う。２０歳ぐらいに見えるが、寿命の無いハイエルフなら見た目で判断するのは間違っているだろう。
濃紺の魔術師のローブを着ている。
「マリアさん。こんにちは」
男性の隣に座っていた女性も立ち上がってマリアに挨拶した。
身長が１７５ｃｍぐらいの長身の女性だ。赤い目で尖がった耳が赤毛の頭から突き出ている。男性と同じハイエルフ族のようだ。細身で腰が細いが凶悪な胸がはみ出しそうに見える。世界トップモデル並みのスタイルの持ち主だ。マリアとは色違いの制服を着ているが、こちらの方がスカートが短く、色は明るい緑。

「私の助手を紹介するわ。リオン・ウォート。さっき助手に登録したばかりよ。リオンは学院に来たのが今日が初めてだから、面倒を見て貰えると嬉しいわ」
マリアは俺を横に立たせて２人に紹介した。
「驚いたな、マリアの助手だって、……どうして助手なんだね。私が覚えている限りマリアには助手はいなかったはずだ。それに、人間族の少年のようだが、何処で見つけたんだい？　マリアが助手にするぐらいならその少年は特別なんだろう。確かに不思議な雰囲気があるけど、何処が特別なんだい？」
男性が近づいて俺を見ながらマリアに聞いた。かなり興奮しているようだ。
「教授、落ち着いてください。いつもの教授らしくないですよ」
男性の隣に座っていた女性が立ち上がって近づいてきた。
「リオンのことは秘密よ。それより話があるんだけど、時間の方は

大丈夫かしら？」
マリアが含み笑いをしながら、教授と呼ばれた男性に答えた。
「あぁ、特に急ぎの用事はないから大丈夫だよ」
教授は俺を見ながら答えた。
「リオンくん。もう分かったと思うけど、こちらが教授よ。マーリン・トワイライト導師、考古学部門の部長さん」
マリアが教授を紹介してくれた。
「僕がマーリン・トワイライトだ。教授と呼びたまえ」
教授は俺に手を差し出して名乗った。
「リオン・ウォートです。よろしくお願いします」
俺は教授の右手を握り返して自己紹介をした。
「そちらは教授の助手で、マーガレットさんよ」
「助手のマーガレット・アマデウスです。マーガレットと呼んでね」
マリアが紹介するとマーガレットは教授を押しのけて俺に手を差し出して微笑んだ。
「リオン・ウォートです。よろしくお願いします」
俺は教授と同様に右手を握り返して自己紹介をした。マリアほどではないが、とても魅力的な女性だ。
「リオンくんの輝きは凄いわ。うっとりしちゃう」
マーガレットが言葉通り、うっとりした表情で呟いた。物凄く色っぽい。
「長くなるから、テーブルに座って話しましょう」
マーガレットは魔力が目に見えるのだろう。俺がマーガレットに質問しようとしたら、マリアが割り込むように言ってから俺の腕を取った。
マリアは教授が座っていた椅子とは反対側の椅子に向かったので、腕を取られた俺もマリアの後に続いた。マリアが一番前の椅子に座ったので、俺はその隣の椅子に座った。
教授とマーガレットは座っていた椅子に戻り、教授は椅子に座ったが、マーガレットは「お茶を入れてくるわ」と言って奥の部屋に

入った。
マリアが何処からともなく書類の束を出して教授の方に置いた。
「まずは、これを確認して頂戴。これを見れば大体分かると思うわ」
教授はテーブルに乗り出して書類の束を取った。

「これは、スターレン渓谷の遺跡の調査計画だね」
書類をめくっていた教授が顔を上げてマリアに言った。
「えぇ、そうよ。内容は前に見せた時と変わってないわ。最後のページを確認して頂戴」
教授は書類をめくって最後のページを見た。
「ほう。国王のサインが貰えたんだね……。予想通り、王国の支援も無しだね」
教授は書類を机の上に置いた。マーガレットがお茶のカップが載ったお盆を持って戻ってきた。全員にカップを配ると教授の隣に座った。
「マーガレットくん。例のスターレン渓谷の遺跡の調査計画に国王のサインが貰えたそうだよ」
教授が書類の最後のページを見せながらマーガレットに説明した。
「予想通り、王国の援助も無しだけどね」
「あら、予定通りですね。マリアさん。おめでとう」
「ありがとう」
「分かった。リオンくんは特級魔術師なのね。それでマリアさんは助手にしたんだわ」
マーガレットが手を打って教授に嬉しそうな顔を向けて言った。
「何だって！」
教授が吃驚して大声を出した。
「教授は見えないから仕方ないけど、リオンくんの輝きは凄いわよ。マリアさんよりも眩しいわ。マリアさんよりも眩しい人なんて初めて見たわ」
「マーガレット、本当か？」

「教授、私が嘘を言っていると思うの？」
マーガレットが怒った顔で教授に言った。
「あっ、いや、すまん。勿論、疑ってないよ……。しかし、不思議な雰囲気だとは思ったが、そこまで実力があるとは思えないね。１６歳ぐらいの人間族の少年にしか見えない。ひょっとして人間に似てるけど違う種族じゃないのか？」
教授が俺を見ながら言った。
「僕は平凡な人間ですよ」
俺は思わず教授に答えていた。
「平凡な人間が特級魔術師のはずがないじゃないか。黒髪の上位種の話は聞いたことが無いし、一体、きみは何者なんだね？」
教授が真剣な顔つきで俺に聞いた。
「それよりも、教授はどうします？　少なくとも私はリオンとスターレン渓谷に行くつもりですけど、一緒に行く？」
マリアが教授の追求を断ち切るかのように教授に聞いた。
「あぁ、勿論、調査に協力するよ。最初から協力するつもりだったからね」
「ありがとう」
「何、大したことではないさ。直ぐに護衛の約束をした彼女達に連絡するよ。出発の予定日は彼女達次第だからね。予定が分かったら知らせるよ」
「分かったわ」
「それで、正直なところ、封印が解ける可能性はあるのかね？」
「勿論よ。かなり期待できると思うわ。ねぇ、マーガレット」
「えぇ、勿論です。リオンくんならどんな事でも出来そうですね」
「解除する魔方陣の術式は分かっているわ。リオンと私の魔法曲線の相性も良さそうだから、リオンと協力すれば、解除魔法を発動できるわ」
「マリアくんがそこまで言うのなら信じるよ」

「ところで、さっきから何の話なのかさっぱり分からないのですが、説明して貰えませんか？」
俺は話題が途切れたタイミングを見計らって切り出した。
マリアが吃驚した顔で俺を見た。
「マリアくん。リオンくんには説明も無しで助手にしたのかね」
教授が呆れた顔をしてマリアを見た。
「ごめんなさい。遺跡の説明はしてなかったわ」
マリアが教授に謝った。マーガレットがクスクスと笑っている。
「僕に謝っても仕方がないよ。リオンくんはスターレン渓谷の遺跡のことを知ってるかね」
「いいえ。知りません」
「スターレン渓谷の遺跡は神の遺産が眠っていると言われている遺跡の１つだよ」
「神の遺産ですか？」
「まさか、神の遺産のことを知らないのかね」
教授が呆れた顔で聞いた。神の遺産と言うのは世間一般では常識のようだ。俺はとっさにマリアに話した身の上話で誤魔化すことにした。
「はい。ずっと森の奥で暮らしていたので、世間のことをあまり知らないんです」
「ほぉ～、森の奥ねぇ……。ひょっとして神のことも、教会のことも知らないのかね？」
「はい。迷宮都市で神官の冒険者を見たことがありますが、話したことは無いです」
「まぁ、面白い。教会のことも知らないなんて、筋金入りの世間知らずだわ」
マーガレットが面白そうに笑った。
「リオンくんがどんな生活をしてきたのか、詳しく聞きたいところだが、それは後で聞くことにしよう、……。
そうだね。最初から説明した方が良いだろう。リオンくんは神に

ついて何か知ってるかね？」
「いいえ。何も知りません」
「ふむ。これから話す内容はエルフ族の常識だよ。教会や人間の国では違う話が信じられている。僕から言わせれば、人間族で一般に信じられている話は教会や王族が自分の都合の良いように捻じ曲げた話さ。
その点は留意してくれ、まぁ、後で図書館で調べれば良いよ。学院の図書館は世界一の規模を誇っているからね。
さて、今から2万年前に、神がこの世界にやってきたそうだ。私の祖母が神から直接聞いた話だから間違いないと思うよ。
神の名前はダンテ・ファンドール。ファンドール一族の最後の生き残りで、神の種族は上帝一族と名乗っていたそうだ。ファンドール一族以外に上帝一族が居るらしいが詳しい話は聞いていない。祖母は神も知らないのだろうと言っていたよ。
神がこの世界を見つけた時、古代文明、あるいは、前文明と呼んでいる文明が完全に滅んだ後だったらしい。
世界は虫や植物でさえも生きられないほど荒廃していたが、神が生物が生きられるように大改造を行なった。
世界を管理するために神聖協会と呼ぶシステムを作り、最初に世界樹とエルフ族をこの世界に移住させた。今から7千年前だ。
6千年前に獣人族、エルモ族、ヴァンモス族など人間種族以外の種族を移住させ、最後に人間種族を移住させた。
そして、今から千年ほど前に神がこの世界から居なくなった。どうやら戦いに負けたらしいのだが、詳しいことは何も分かってない。
神は自分の後継者のために、遺産を残したと言われている。全ての遺産を手にした者が神の後継者になれるらしい。
神の遺産があると言われた遺跡が今までに２０個ほど見つかっていて、１５個ほどは偽者だと分かっている。
色々な説があるので正確な個数は誰にも言えないし、神の遺産がどのような物なのか、そして、正確な個数も分かっていない。

スターレン渓谷の遺跡は神の遺跡があると言われている最有力候補の遺跡だよ。最深部に強力な魔法で封印された扉がある。
勿論、各国の王族や統一教会、かく言う我々の魔術師学院も神の遺跡を血眼になって探している。
何せ、神の後継者になれるんだからね。特に人間は誰もが神になりたがっていると言えるんじゃないかな。スターレン渓谷の遺跡には様々な者が封印を解こうと挑戦してきたが、今のところ誰にも破られていないし、記録によると１００年近くも放置されたままだ。
マリアくんは、君がこの封印を解くことができると信じているようだがね。仮に封印を解いたとすると、その後が大変だろうね。特に教会の動きには注意した方が良いだろう。
古代文明の遺品の殆どを教会が確保して隠蔽していると言う噂だよ。実際に教会は高い技術力を持ってるからねぇ、油断できない。
それに、裏で人間の王族を管理している。まぁ、僕に言わせれば、信仰の力を使って人間族を支配しているようにしか見えないがね。
あぁ、このことは内密に頼むよ。教会の信者に限らず、人間族には話さないでくれ、特に教会関係者に聞かれたら大変なことになる。君も気をつけたまえ」
教授はカップを取り上げてお茶を飲んだ。
「なんだか大変そうですね」
俺は思わず感想を言った。
「まぁ、他人事みたいな言い方ね。リオンくんが封印を解くのよ」
マーガレットが笑いながら俺に言った。
「僕ですか」
「大丈夫よ。後で封印の魔方陣のことを詳しく説明するわ。勿論、封印を解くための魔法陣もね。安心して任せて」
マリアが笑顔で俺に言った。マリアに笑顔を向けられると断ることができなくなる。そう言えば、初めから封印を解く約束で雇われたことを思い出した。
「分かりました。それで、スターレン渓谷はどんな場所なんですか

？」
「スターレン渓谷の遺跡は１０階層のダンジョンだよ。その最下層に封印された扉がある。古代文明の軍事施設だったらしくて、古代文明の遺品が随分と見つかったらしいが、かなり昔のことで、今では遺品の欠片も残っていないがね。
　王国の管理下に置かれていて、入口は騎士団の砦が建てられている。入るためには王国の許可が必要だ。それに１００年ぐらい放置されたままだから、ダンジョンには魔獣が溢れているはずだ」
「魔獣ですか？」
「何、心配は不要だよ。そのためにトップクラスの冒険者を雇うことになっている。すでに約束を取り付けてあるから、連絡すれば来てくれるはずだ」
「それなら、僕の役割は封印の解除だけと言うことですね」
「あら、折角、魔弾銃を渡したのよ。ダンジョンの掃除はリオンくんにも手伝って貰うわよ」
　マリアがにこやかな顔で俺に宣言した。
「ほぉー。あの魔弾銃をリオンくんに渡したのかね」
「えぇ、助手を辞める時は返して貰う約束でね」
「成程、マリアくんがそこまで信頼しているとは、余程、リオン君は特別なんだねぇ」
「まぁね」
　マリアが教授に向ってうふふと含み笑いをした。なんだか嫌な予感がする。背中がぞくりとしたような気がした。
「この調査は３年も前からマリアさんが計画してたのよ。学院からも国王からも許可が出たし、予想通り支援は一切無し。調査許可の条件のところに支援は無いかわりに口出しもしないと明記してあるものね。
　何か見つけても発見者の物よ。学院も王国も口出しできないはずだわ」
　マーガレットが俺に説明した。

「そうは言っても油断は禁物だよ。教会が割り込んでくるのは必須だからね。まぁ、全ては封印が解けてからの話だがね」
教授がみんなに警告した。マーガレットとマリアは教授に頷いている。
「さて、それではリオンくんのことを教えて貰いたいのだが、リオンくんは森の奥で暮らしていたと言っていたが、いつまで森にいたのかね」
俺は以前にでっち上げた身の上話をさらに膨らませて教授に説明した。
暫く教授達と話た後、明日の朝の９：００に研究棟の入口でマリアと待ち合わせる約束をして学院を出た。
学院都市で適当な宿屋を探して泊まった。

１０話

翌朝、約束の時間に研究棟の入口に行くと既にマリアが待っていた。
「おはよう。リオンくん」
俺に気付いたマリアが挨拶したので、俺は急いでマリアに近づいた。
「おはようございます。お待たせして申し訳ありません」
「大丈夫よ。私も今来たばかりだから、それより最初は事務局よ。行きましょう」
俺はマリアに連れられて事務局に向かった。

事務局で登録処理を行い。職員用身分証、入館証、助手用の制服などの装備品一式に学院の規則や事務処理の手順などが記載されている数冊の小冊子を貰い。神聖協会の腕輪に学院のＡＰをインストールした後、マリアに連れられてマリアの研究室に入った。

マリアは研究室内を順に説明してくれた。
研究室の入り口が共用部屋。共用部屋から奥に入る３つのドアがある。
向かって右の扉がマリアの執務室、中央の扉は台所と奥に３段ベッドが２個２列で４つと保管用の大きなキャビネットが４列分、左の扉の奥は助手と弟子用の個室。
「この小部屋が助手と弟子用の個室よ。６人分あるわ。私には弟子はいないし、助手はリオンくんしかいないから、どれを使っても良いけど、一応、序列があるのよ。リオンくんはこの個室を使って頂戴」
マリアは一番奥の個室を示して説明してくれた。個室の扉のロックを俺に合わせてから中に入って備品の説明をしてくれた。個室は

3畳ぐらいの狭い部屋だが、大きな机と端末装置に壁の一面に棚と反対側に衣装棚とキャビネットが置かれていた。
「荷物は此処に置けば良いわ。折角だから貰った制服に着替えた方が良いわよ。ここでは制服じゃないと目立つわ。私は外の共用部屋で待ってるわ」
マリアは俺に告げると個室を出て行った。俺は運んできた荷物をアイテム画面に格納し、夏用の制服をカスタマイズして温度湿度調整、保存と自動修復、強度強化のオプションを付与した。
装備画面を使って一瞬で着替えてから個室を出た。

「リオンくんは、個人用の亜空間魔法を使ってる？」
研究室の入口になっている共用部屋に入ると中央の作業机に座って待っていたマリアが聞いた。
個人用の亜空間魔法は魔力で作成した個人用倉庫のような物だ。俺はアイテム画面があるので亜空間魔法は必要ないが、アイテム画面の言い訳に使える。
「はい。使ってます」
「特級魔術師の資格を持ってるなら当然よね。学院なら導師の半数以上の者が使えるし、数人しか居ないけど助手でも使える人が居るわ。魔力で亜空間の大きさが限られてしまうけど、便利だもんね。助手だとちょっと目立つかもしれないけど、使わないと勿体無いわ」
マリアは椅子から立ち上がった。
「冒険者の格好も良かったけど、リオンくんの魔術師の姿も良く似合うわね……。
それじゃ、教授の研究室へ行きましょう」
マリアは俺を褒めるとすぐに研究室の出口に向かった。俺は慌てて後を追った。
マリアが何を言いたかったのか良く分からなかったが、たぶん、亜空間魔法を使っても問題ないと言いたかったのだろう。

「おはよう。教授はいる？」
マリアは挨拶をしながら教授の研究室に入った。
「おはようございます」
俺も挨拶をしながらマリアに続いた。
「マリアさん、リオンくん。おはよう。生憎と教授は居ないけど、すぐに戻ると思うわよ」
中央の作業机に座っていたマーガレットが立ち上がってマリアに返事をした。
「あら、何処に行ったの？」
「事務局よ」
「それなら、ここで待たせてもらうわ」
「はい。どうぞ……。ところで、リオンくんの魔術師の格好は良く似合うわ。神秘的でもの凄く輝いてる。ぐっと来ちゃうわ」
マーガレットがとんでもないことを言った。マリアが嬉しそうに笑った。
壁際に並んだ端末机に座っていた男性の魔術師が立ち上がってこちらに近づいて来た。
赤毛で細身の男性、身長は俺と同じぐらい。上品そうな整った顔立ちで年齢は２０歳ぐらい、目は優しそうな灰色。さぞかし女性にモテルだろうと思えるほどのイケメンだ。別に悔しくは無いが、何となく警戒心が起きた。何となくだが見た目に反して腹黒いぞと思った。
「マリアさん。おはようございます」
赤毛の男性が礼儀正しくマリアに挨拶した。
「えっと……、マルコムさん。おはよう」
マリアがマルコムに挨拶を返した。名前を思い出すために一瞬考えたように見えたが、思い違いかもしれない。
「そうだ、リオンくんを紹介するわね。昨日、私の助手にしたリオン・ウォートよ」
マリアは横に立っていた俺をマルコムに紹介した。

「えっ、マリアさんの助手ですか？」
マルコムが驚いた顔で言った。
「そうよ。学院には昨日来たばかりだから何も知らないのよ。面倒を見て貰えると嬉しいわ」
マリアがマルコムに笑顔を見せながら頼んだ。俺は一瞬、こんな奴に頼まなくて良いのにと感じてしまった。
「教授の弟子のマルコム・レッドロックです」
落ち着きを取り戻したマルコムは名乗ってから右手を俺に差し出した。若干、レッドロックを強調したように聞こえた。
「リオン・ウォートです。よろしくお願いします」
俺は頭を下げてからマルコムの右手を握った。
「リオンは知らないと思うけど、マルコムはレッドロック公爵家の三男なのよ。宮廷魔術師の孫になるわ」
マリアは「公爵家」を少し強調して俺に説明した。つまり、貴族様だから対応に気をつけろと言うことだろうか。
「そうでしたか、貴族の方とは知りませんでした。今まで森の奥から出たことが無かったので、世間のことは何も知らない田舎者です。失礼な言動があったらお許しください」
俺はマルコムに頭を下げてた。
「とんでもない。学院は実力主義ですからね。身分は関係ないです。普通に接してください」
マルコムが笑顔で俺に答えた。
「そうだ、マルコムさん。時間があるならリオンくんに図書館を案内して貰えないかしら、リオンくんには図書館で一般常識を勉強して貰いたいの、特に王国の歴史と教会についてね」
「あら、それは良いわね。マルコムくん、私からもお願いするわ」
マーガレットもマルコムに頼んだ。一般庶民の俺は貴族との付き合いは遠慮したいのだが、断れるような雰囲気でも無さそうだ。当人は学院では身分は関係ないと言っているが、言葉通りに受け取る程、俺は世間知らずじゃないつもりだ。

「はい。喜んで案内しますよ。何ならお昼の面倒も見ましょうか？」
「それは助かるわ。そうねぇ、午後3時ぐらいに此処に連れ帰って頂戴」
「了解です。任せてください」
マルコムはマリアに向かって優雅にお辞儀した。
「それじゃ、リオンくん。行きましょう」
マルコムは俺を促して研究室のドアに向かった。

「リオンくんは若いようですが何歳ですか？」
研究棟を出て図書館に向かって歩きながらマルコムが聞いた。
「16です」
「16ですか、僕は22になります。……しかし、16で助手、しかも、「黒衣の貴婦人（ブラックレディ）」の助手とは、凄いですね」
「黒衣の貴婦人って？」
「知らないのですか？　マリアさんのことですよ。
……あぁ、そう言えば、森の奥から出てきた田舎者と言ってましたね。「黒衣の貴婦人」はマリアさんの二つ名ですよ。いつも黒色の制服かドレスを着ているので「黒衣の貴婦人」と呼ばれるようになったそうです。
…・・・まぁ、それよりも、今まで弟子はおろか、助手も採用したことがありませんから、マリアさんが助手を採用したと言うことは大事件ですよ。
まだ、学院内に知られていないけど、すぐに大騒ぎになると思います」
「そんなに有名なんですか？」
「えぇ、マリアさんは学院の名誉顧問ですからね。名誉顧問は特殊な地位ですよ。学院長の罷免権がありますからね。ある意味、学院で一番高い地位だと僕は思ってます。しかも、マリアさんを罷免することは誰にも出来ない。例え国王や教会の最高司祭でも」
「それは凄いですね」

「勿論、地位に見合った実力の持ち主です。特級魔術師であり、高度な知識もあります。神の遺産に関しては世界でも第一人者だと僕は思っています」
「神の遺産の第一人者ですか？」
「マリアさん自身は論文を発表していませんが、協力者の名前としてマリアさんの名前が書かれている有名な論文が非常に多い。有名な導師の影には必ずマリアさんが居たのではないかと僕は考えています。勿論、今のはあくまでも僕の自論ですけどね」
「なるほど」
「それにあの容姿ですからね。学院には熱烈なファンが大勢いますよ。やっかむ輩がいますから気をつけてください」
「闇討ちとかですか？」
「まさか、そんな過激なことをする者は居ないと思いますよ……。多分」
「多分？」
「そうですねぇ、流石に可能性がゼロとは言い切れないですが、そこまでする者は居ないでしょう。しつこく質問される程度じゃないかなぁ。
それで、マリアさんの助手になったのは何か特別な理由があるんですか？
何か特別な理由が無ければ、マリアさんは助手を採用したりしないと思うのですが、どうして助手になったのか教えてもらえませんか？」
貴族の坊ちゃんなら横柄で上から目線の態度だろうと思っていたが、意外と礼儀正しいようだ。なんとなく話し方が教授に似ているような気がする。
しかし、助手に採用された理由をいきなり聞くと言うのはどうなんだろう。
「特別な理由なんて無いですよ。それに助手になったのは一時的です。正式に助手に採用された訳じゃないと思います」

「一時的と言うのは何故ですか？」
「私が話して良いかどうか分かりませんので、マリアさんに聞いてください」
「あぁ、そうですね。申し訳ありません、先程説明した通り、マリアさんの助手となると大事件なので、つい好奇心に負けて聞いてしまいました」
「そうですか」

俺とマルコムは暫くの間、黙ったまま歩いた。
「あぁ、見えましたね。あれが図書館です」
マルコムが示した先に、６階建ての巨大な建物が見えた。世界一の規模だと言うだけのことはある。良く見ると３つの建物がくっついて建っているように見える。たぶん、左右の建物が建て増しされたのだろう。建物すべてが図書館だとすると、蔵書の量は莫大な数に登るのだろう。
「あの建物の全部が図書館ですか？」
俺は念のために確認した。
「そうですよ。最初は中央に見える建物だけだったのですが、左右の建物と此処からでは見えませんが、裏側に同じ規模の建物が建て増しされたそうです」
俺は呆れて物が言えなくなった。見たことは無いが、地球の世界最大の図書館よりも大きいのではないだろうかと思った。

マルコムの案内で図書館に入ると、図書館の利用方法について説明してくれた。
「マリアさんが王国の歴史と教会について勉強するように言ってましたね。新館の東館に一般教養の本が置かれていますから、新館の東館に行きましょう」
俺はマルコムの案内で表の旧館を通り抜けて奥の方の新館に入り、東館へ移動した。表の旧館よりも新館の方が規模が大きいようだ。

「あそこのテーブルが閲覧用です。歴史と教会についてはどれぐらい知ってるのですか？」
「何も知らないです」
「そうですか、しかし、助手なら初級魔術師の資格を持っているはずですよね。読み書きは当然として、それなりの知識はお持ちのはずです」
「そうですね」
俺は何と答えれば良いのか分からなかったので曖昧に返事をした。
「魔法の知識はあるけど一般常識は皆無と言うのは不思議ですね……。まぁ、いいでしょう。適当に概要が分かる本を見繕ってみましょう。
そうですね、３０分ぐらいで、そこの閲覧用のテーブルに集合で良いですか？
リオンくんはこのフロアの書架を適当に眺めていてください」
「分かりました」
マルコムは頷くと、２階に上がる階段に向かった。俺はマルコムが指示した通り、１階の書架を端から順番に巡って片っ端からアリスのライブラリに取り込んで行った。

１階の書籍を取り込んでからマルコムが指示した閲覧用テーブルに戻ると、マルコムは厚くて大きな８冊の書籍をテーブルに並べて待っていた。
「お勧めの本を選んでおきました。歴史書が４冊で教会の入門書が４冊です」
「ありがとうございます。助かりますよ」
正直に言えば、ありがた迷惑だが、俺は嬉しそうな顔を浮かべてお礼を言った。
「それではお昼までここで本を読みましょう。それとも、何処か行きたいところがありますか？」
「いえ、特に無いです」

「では、私も自分の本を探してきます」
マルコムは席を立つと書架が並んでいるエリアに向かった。

昼頃になるとマルコムの指示で読んでいた本の複製を魔法で作ってウェストバックに入れた。本を借りるのは有料だが複製なら無料だそうだ。
「驚いたなぁ。そのウェストバックは無限バックですか？　リュックの形の無限バックなら僕も持っているけどウェストバックの無限バックは初めてみました」
「そうですか。何処でも持っていけるので便利ですよ」
「確かに、ウェストバックなら自然に見えるね。僕も欲しいけど手に入れるのは難しそうですね。しかし、チャンスがあれば僕も手に入れますよ。
それより、お昼は何が良いですか？　嫌いな物とかありますか？」
「何でも良いです」
「それでは、僕がいつも利用している研究棟の職員用のレストランにしましょう。学生用の食堂と比べると若干高価ですが、街のレストランよりは少し安いですよ」

マルコムが案内したレストランはカフェテリア形式になっており、適当に自分の好きな食べ物をトレイに載せて、清算する方式になっていた。
マルコムが言っていた通り、街の食堂よりも若干安めの価格設定になっている。
マルコムと2人で6人用のテーブルに座った。カフェテリアは空いているため、相席にならずに済んだ。
「学生用の食堂は価格は安いのですが、かなり混んでいます。僕は混んでいるのは苦手でね、いつもこちらの食堂を利用しています」
聞いても居ないのにマルコムが言い訳をした。
「僕も空いている方が良いですね。とりあえず、戴きましょう」

俺はフォークを持ち上げながらマルコムに提案した。
「そうですね」
マルコムは苦笑しながら同意するとフォークを手に持って食べ始めた。

「マリアさんと教授はハイエルフですよね。学院にはハイエルフの人は多いのですか？」
マルコムが食べ終えるのを待って、俺は質問した。
「いいえ、居ませんね。マーガレットさんを入れて3人しか居ません。元々ハイエルフは森の聖地から外に出ませんからね。3人はハイエルフの中では変わり者なんだと思いますよ。特に教授は学院の導師の中でも変わってます」
「そうなんですか」
「昔は違っていたらしいのですが、今は魔術の研究は学院、古代文明の研究と技術開発は教会の研究院と言う風に住み分けがされています。
教授は住み分け前から古代文明の研究と新技術の研究をしていたらしいです。宮廷魔術師をやっている爺さんに聞いた話だけど、約300年前にローハン・ハイライダーと言う名前の人物が統一教会に研究院を設立したそうです。
それで教授とローハンはお互いを敵視して争ったらしいのですが、教授が政治的な駆け引きに負けた結果、現在の住み分けが出来てしまったそうです。
学院には考古学部門が残っていますが、この部門には教授しか居ません。それとマリアさんですね。今でも教授とマリアさんの2人が教会に対抗しています。
マリアさんは教会から「遺跡の番人」と呼ばれてるらしいです。どうして「番人」と呼ばれているのか理由は知らないですけどね」
「そうでしたか、しかし、マルコムさんは教授の弟子ですよね、マルコムさん以外に弟子は居ないのですか？」

「助手のマーガレットさんと僕の2人だけです。僕もお爺さんのコネで教授の弟子にして貰ったんですけど、教授は人間種族は寿命が短いから弟子や助手に取らない方針だと言ってます」
「普通の導師の弟子は何人なの？」
「普通は助手が3人ぐらいで弟子が6、7人ですね。魔術師学院は魔術師を育成するための学生棟と魔法を研究するための研究棟に分かれていてね。研究棟に入るには研究棟の導師に弟子入りするか助手に採用して貰う必要があるんですよ」
「そうですか、でも、どうして教授に弟子入りしたんですか？」
「僕は古代文明の遺跡や神の遺産を研究したくてね。それで教授に弟子入りしたんです」
「どうして教会に入らなかったんですか？」
「我が家の方針ですね。それに僕は治癒魔法が使えませんから、爺さんから学院に行くように命令されました。その代わりに教授の弟子入りを約束してくれたんです」
「なるほど」
「今、助手になるための論文を書いているのですが、テーマは6番目の神の遺産について。今のところ神の遺産は5つと言うのが定説なんです。その理由は5つのダンジョンの最下層に同じような強力な魔法で封印された扉があるからです。
　僕はダンジョン以外に神の遺産が眠っていると思っているんですよ。それで6番目の場所について研究した結果を論文にまとめたところです」
「へぇー。それは凄いですね」
「まぁ、根拠が薄くて、誰も信じてくれないのですが、教授は可能性はゼロではないと僕の説を支持してくれてます」
「教授が支持するなら、可能性はあるんじゃないですか？」
「そう言ってくれるのはリオンくんだけですよ。大抵の者は僕を馬鹿にします」
　マルコムは悲しそうな顔をした。俺のような部外者の賛同では意

味が無いのだろう。マルコムが俺のことを聞いたので、俺は以前でっちあげた森の生活について説明した。

3時頃まで、マルコムとおしゃべりをしてから教授の研究室に戻った。

「ただいま」

マルコムが挨拶しながら研究室に入ったので、俺も後に続いて入った。

「2人とも、お帰り」

教授の隣に座っていたマーガレットが立ち上がって、明るい声で俺とマルコムを迎え入れてくれた。

「リオンくん。出発の日程が決まったわ。6日後の朝に出発よ」

教授の対面に座っていたマリアが嬉しそうに告げた。

「ジュリアスくんと連絡が取れてね。6日後の朝に研究棟の裏に集合できるそうだよ」

教授が俺に向かって説明した。

「ジュディに連絡したんですか？」

マルコムが立ち止まり吃驚した顔で教授に聞いた。俺はマルコムの横を通って、マリアの隣の席に座った。

「マルコムくん。お帰り、君にも話があるから、リオンくんの隣にでも座りたまえ」

教授がマルコムに指示すると、マルコムは俺の隣に座った。

「6日後に何処かへ行くのですか？」

マルコムが教授に聞いた。

「あぁ、そうだよ。スターレン渓谷の遺跡の調査だ。ジュリアスくんのチームに護衛と遺跡の掃除を依頼した。ジュリアスくんが依頼の間はマルコムくんをチームメンバーに入れろと言ってきたが、受けるよね。勿論、断るなら留守番だけどね」

「スターレン渓谷ですか？　留守番は嫌ですから、行きますけど、

しかし、急ですね」
「確かにね。昨日、マリアくんが調査の許可が貰えたと言って来てね、昨日、行くことに決めたんだよ。それで、助手の論文は出来てるかね？」
「助手の論文ですか？　一応、出来てますけど」
「それなら、すぐに提出したまえ、内容を確認して明日中に審査申請する。5日もあれば審査は通るはずだ」
「スターレンの調査と関係があるんですか？」
「勿論、関係はないよ。しかし、調査に行く前に助手にしておいた方が良いと僕の予感が告げているんだよ」
「教授の予感ですか？」
マルコムはいかにも信用できないと言う顔で教授を見た。
「そう、僕の予感だよ。今度の調査は大事件になるよ」
教授が嬉しそうな顔でマルコムに答えた。
「リオンくんは、明日の朝9時に私の研究室に来てちょうだい。ちょっと実験に付き合ってもらうわよ」
マリアが俺の方を向いて言った。マリアも嬉しそうな顔をしている。まるで、教授と2人でいたずらを仕組んだ子供のような雰囲気だ。
「分かりました」
俺はマリアに返事をした。

翌日の朝、9時10分前にマリアの研究室に入ると、マリアが中央の作業机の椅子に座って待っていた。
「リオンくん。おはよう」
「マリアさん。おはようございます」
「魔法実験室を確保してあるから行くわよ。荷物があるなら個室に置いてきて欲しいけど、大丈夫なようね。魔法の杖はそのウェストバックに入っているの？」

「はい」
「それなら問題ないわ。行きましょう」
マリアに連れられて入った魔法実験室はバスケットコート2面分を確保できそうなほど広くて天井も高い。まるで体育館そのものだ。
「学院の最大で最強の実験室よ。ここなら上位魔法も使えるわよ。さすがに最上位魔法は禁止されているけどね」
マリアは実験室の中央で立ち止まると、魔法を杖を振りかざして魔法を唱えた。直径１０ｍぐらいの魔法陣が描かれた巨大な扉が現れた。
「これはただの投射の魔法よ。私が見た魔法陣を写しただけ。予想できると思うけど、この扉がスターレン渓谷の最下層にある封印の扉よ」
俺は中心に描かれた魔法陣に意識を集中した。アリスが魔法陣を分析した情報を俺に伝え、扉の魔方陣に分析情報を表示した。
「これが封印の扉ですか……、
５層の複合重積魔法陣、上層部2層が防護バリアで中間層が保存と魔力発生用。下層の2層で扉をロックしていますね。最下層魔法陣が解除キーのようです……。
これは厄介そうですね」
「流石ね、特級魔術師の資格は伊達ではないようね、それで、どうかしら。解除方法も分かるでしょう？」
マリアが真面目な顔で俺に聞いた。アリスが解除方法を教えてくれた。
「防護バリアを無効化して、解除キーのソウル波形を持つ人物が扉の下にある印に手を当てればこの扉は開くはずです」
「正解よ。それで、防護バリアを無効化する魔術式は分かる？」
アリスが魔術式を知らせてきた。
「分かるなら、魔法陣を展開して、勿論、発動してはだめよ」
今まで実際に魔法を使ったことが無いのだが、魔法に関するスキ

ルと特性の熟練値が１０００もあるお陰で、自分なら出来ると言う確信がある。ゲームでは熟練値１０００はマスターの称号が与えられる値なのだ。マスターの称号は伊達では無いはず。
俺は装備画面で魔法の杖を装備してアリスが知らせてきた魔法陣を展開した。
防護バリアを打ち消す魔法陣は３層複合重積魔法陣。イメージ通りの魔法陣が扉の魔法陣の対面に展開された。
マリアが展開した魔法陣を回りながら確認した。
「さすがね。完璧だわ。後は正確な量の魔力が込められれば、扉の防護バリアが打ち消されるわ。
リオンくん。魔法陣を消しても良いわよ」
俺は魔法の杖を一振りして魔法陣を消した。
「でも、最下層の魔方陣に刻印されたパターンを持つ人物が必要ですよ。当てはあるんですか？」
「あら、勿論よ。この前、魔力測定をしたでしょう。その時、あなたのソウル波形も計測したわ。あなたが扉に手を当てればロックが解除されて扉が開くわよ」
「でも、防護バリアの解除はどうするんですか？　あぁそうか、マリアさんが解除するんですね。でも、それなら、僕が魔方陣を展開する必要はないですよね」
「残念だけど、私は制約があるからバリアを無効にできないのよ。でも、あなたが展開した魔法陣を私が維持することはできるわ。
私が維持できたら、リオンくんが扉の印に手を当てられるわ。
やってみましょう。さっきの魔法陣を展開して頂戴」
俺は先程の魔法陣をもう一度、展開した。すると、マリアが魔法陣に魔力を供給して維持する魔法陣を俺の魔法陣の４層目に展開した。
「魔力ラインを切って頂戴」
俺は魔法陣を維持するのを止めた。マリアが展開した魔法陣が俺が展開した魔法陣を維持した。１、２分ほど維持してからマリアが

魔法陣を消した。
「実験は大成功。後は現地で試すだけね」
マリアが嬉しそうに俺に言うと「うふふ……」と笑った。俺は旨く乗せられてしまったのような嫌な予感がした。
「マリアさん。これは特級魔術師なら誰でも出来るんですよね？」
「あら、勿論、出来ないわよ。この世界でさっきの魔法陣を展開できるのはリオンくんしか居ないわ」
「えっ。どう言うことですか？」
「そうねぇ、私は嘘は言ってないけど、ある意味、リオンくんを騙していたのよ。ごめんなさい。いかにも特級魔術師なら出来るはずと思わせたわ。でも、そうしないとリオンくんは警戒して、出来ませんって言いそうなんだもの」
俺は呆れて何も言えなくなった。マリアは俺の全てのことを知っているじゃないだろうかと疑問に思った。そして全てを諦めたかのように「はぁっ」と溜息をついた。
まるでお釈迦様の手の上の孫悟空になったみたいだ。
「溜息をつくと、幸せが逃げるわよ」
マリアが笑いながら俺に言った。俺はもう一度、盛大に溜息をついた。

「ちょっと休憩にしましょう。お詫びの印に、どうしてこんなことをしたのか説明するわ」
マリアはテーブルと椅子をどこからともなく取り出し、テーブルの上にティセットを並べると、二人分のお茶を用意した。俺はマリアが用意してくれた椅子に座った。
「ここは強力な魔力で封印されているから安心して話せるわ」
マリアはカップを持ち上げてお茶の香りを嗅いでからお茶を啜った。
「最初に約束して欲しいのだけど、これから話すことは誰にも言わないで、私とリオンくんだけの秘密よ。教授にも話してないの」

マリアが俺を見詰めたので、俺は「分かりました」と答えた。
「この前、教授が神の遺産についてざっと説明したけど、覚えているわよね」
「はい」
「実は、１０００年前に神から知識と力を与えられて遺産を見守るように命じられたの。そして、制約も課せられたわ。
この制約で私は保護バリアを解除できないの。神の制約で私は封印を解除することを禁止されているし、解除するためのヒントを与えることも禁止されているわ。
さっきは旨く誘導できたけど、あれが限界。あれ以上のことを教えることが出来ないのよ。リオンくんは自力で様々な謎を解かないといけないわ。この学院の図書館で勉強した方が良いわよ。私は遠まわしに誘導することしか出来ないわ」
「そうですか」
「神から後継者が現れることは予言されていた。そして、後継者の面倒を見るように頼まれているわ。だから、私のことを信用して欲しい。私はあなたの味方よ。例え裏切っているかのように思える時があるかもしれないけど、それは、神の制約のため。私のことは最後まで信じて頂戴」
マリアがじっと見詰めるので、俺は「分かりました」と答えた。

「今から５００年前にローハンと名乗る人物が現れたの。ハイライダー種族で、最初はロード・オブ・ハイライダーと名乗ってたけど、今はローハン・ハイライダーと名乗ってるわ。
ローハンの目的は神の遺産を手に入れことよ。教会に研究院を設立して王族の血統を裏で管理して、古代文明の遺跡を独占したわ。そして、封印を解くための研究を続けている。
まだ、ローハンは封印を解くことができないけど、あと５００年ぐらいでローハンは封印を解いてしまうでしょう。だけど、リオンくんが居るから手遅れね」

マリアは「うふふ」と楽しそうに笑った。
「詳しいことは省略するけど、３００年前から私と教授はローハンに対抗してきたの。私は教会からは「神の遺跡の番人」あるいは単に「番人」と呼ばれてるわ」
マリアはカップのお茶を飲んだ。俺は最初のメッセージのことを思い出した。
「すると、僕は神の後継者と言うことですか？」
「えぇ、そうよ」
「でも、どうして？」
「神から人間の上位種族よりも身体能力も魔法の能力も遥かに高い人間が現れると言われたわ。そして、「特級魔術師の資格を持つ者が突然現れれば、そいつが後継者だ」と言ったのよ。
私は特級魔術師の資格を持つ者に注目してきたわ。そして、４ヶ月ぐらい前に前回の試験で特級魔術師に合格した者が居たことに気づいた。
魔術師資格の試験は半年に１回。神聖協会が実施してるわ。前回の試験が終わった直後に合格者を確認したけど、特級魔術師に合格した者は皆無だった。
だけど、２ヵ月後、今から４ヶ月前になるわ。
まるで、リオンくんが突然この世界にやって来たかのように特級魔術師の合格者にリオンくんの名前が登録された。
神から後継者は次元位相が遥かに高い世界の者で、無理やりこの世界に拉致すると聞いていたから驚かなかったわ。
４ヶ月前からずっと、リオンくんを捜してた。そして、３日前にやっと見つけたと言う訳よ。
あなたはまるで４ヶ月前に突然、この世界にやって来たように思えたし、魔力測定の数値が人間の上位種族であったとしても有り得ない数値だった。それで、あなたが後継者だと分かったわ。
そして、あなたは期待通りに、扉の封印を解除する魔法陣を展開したわ」

「人間の上位種族とは何ですか？」
「普通の人間よりも遥かに能力の高い人間をそう呼ぶのよ。神は次元位相の高低差の影響だと言ってたわ、何でも次元位相が高い世界から呼び寄せた人間は位相の壁を越えることで信じられない力を手に入れるそうよ。但し、相性が悪いと無形のとんでもない怪物に変身してしまうの。
肉体を構成している細胞がこの世界に生存するために根本のレベルで変化するためらしいわ。魂のパワーが桁違いなんだそうだけど、詳しいことは分からないわ。
神は力を得た人間を王と上位貴族に定めて、人間を支配させたのよ。それに、上位種族の人間は寿命も長いわ。初代の王は２０００年以上は生きたそうよ。
上位種の血統は遺伝するわ。王族と上位貴族の血を引く者は身体能力と魔法の能力の両方、あるはどちらかが普通の人間に比べて桁違いに力のある人間が生まれるのよ。徐々に力が薄れてきているけどね。
普通の人間なら上級魔術師の試験に合格することでさえ難しいわ。だから、教授はあなたを上位種と呼んだのよ」
「なるほど」
「それともう１つ、重要なことを話すわ。私は生物や魔獣を殺すことを禁じられてるの、リオンくんの敵はリオンくんが倒さないといけないわ」
「そうですか」
流石に、此処まで制約があると言われると、胡散臭い気がする。ふと、メッセージと同じで、単純に信じたらいけないのではないだろうかと疑問に思った。
「何か質問はある？」
「そうですね。特に無いです」
「それなら、学院の図書館で王国の歴史と教会について勉強しておいて頂戴。それと遺跡のこともね。旅の食料は教授が準備するけど、

何か必要な物があれば、街に出て買っておいてね。６日間もあるから適当に息抜きをしてもいいわ。６日後の朝９時に研究棟の裏で集合だから、それまで、研究室に顔を出しても、出さなくても自由にして良いわよ」

「分かりました」

１１話

８月１日月曜日。
１週間続けて泊まったおかげで顔見知りになった宿屋の女将さんに別れの挨拶して外に出た。

日差しが強くて眩しい。気温も高いようだ。
時刻は朝の８時１０分前、太陽はとっくに昇っており、今日も暑い１日になるのは確実だろう。
今は夏の真っ盛りで暑さのピークなのに、俺は革鎧に丈夫そうなブーツ、腰にロングソードを下げて背中にリュックを担いだ格好だ。
学院都市では学院の制服は当たり前で、学院の制服なら目立つことはないと思うのだが、俺は昨日まで、学院の制服を着て学院に通っていた。
多分、助手の制服が目立ったのだろう。何となく、通り過ぎる人の注目を浴びていたような気がする。しかし、今日は冒険者の、しかもバリバリの初心k者の格好をしているためか、昨日までと比べると、随分と注目されているような気がするのだが、まぁ、いわゆる自意識過剰と言う奴だろう。

革鎧とブーツには温度湿度を調整する魔法が付与されているので見た目に反して涼しいのだが、一般人は俺の姿を見れば気の毒に思うらしく宿屋の女将さんが「暑いのに大変そうだね。まぁ、がんばりなよ」と声を掛けてくれた。
今日はスターレン渓谷の調査に出発する予定の日。９時に出発する予定なので、俺は３０分前に集合地点に行くつもりで宿屋を出た。
あれからマリアは何処かに出かけたらしく１度も見ていない。
俺は毎朝８時３０分にマリアの研究室に行き、マリアが居ないことを確認してから教授の研究室に顔を出してから図書館に通った。

図書館は一般用、研究員用、導師用のフロアに分かれていた。俺は助手の資格があるので一般用、研究員用のフロアに入ることが出来た。
導師用のフロア、地下にある特別許可が必要な禁書の保管庫、そして、旧館の地下1階と2階に見つけた秘密の書庫には無断で浸入してアリスのライブラリに取り込んだ。
秘密の書庫は全部で6部屋もあったのだが、どうやら存在自体を誰も知らないようだった。

マリアと会わなくなって3日後に、マリアに出会ってからの自分の精神状態を冷静に見直してみた。
アリスは否定しているがまるでマリアに魅了の魔法に掛けられたかように俺はマリアの言いなりになっていたと思う。
アリスの言う通り、実際にマリアは魅了の魔法を使わなかったのだろう。しかし、同じ効果を俺に与えたことは間違いないと思っている。
マリアに出会った瞬間、俺の心を覆っていた殻が木端微塵にはじけたみたいだった。そして、その心を覆っていた殻がメッセージに書かれていた神の細工だったのではないかと考えている。
以前の俺には恋人が居なかった。女性を好きになることも興味を持つこともなかった。中学3年と高校3年の2回。女性から好きだと言われたことがあったが、2回とも相手に興味が無かったので断った。
大学に入ってからは殆ど女性とは話さなかった。理系の大学で女性はごく一部しか居なかったので、話す必要がなかった。
ゲームオタクが原因だと自分では納得していたのだが、神のメッセージが本当のことだとすると、神の細工が原因だったと言うことになる。
そして、何となく心が若返ったような気がしている。肉体も精神も16歳の若者に若返ってしまったようだ。

そして、今日まで1週間近くもマリアに会っていない。正直に言うと今はマリアに会いたいと言う気持ちが俺の中で膨れ上がっている。

誰かに会いたいと思うこと自体、生まれて初めてかもしれない。最初の頃はイカレてたと自分でも認めるが、今は普段の自分を取り戻している。と思うのだが、正直なところちょっと自信が無い。

今のところ、マリアとは敵対する理由が無いので、一応、味方だと考えているが用心は怠らないようにするべきだと思っている。しかし、恋は盲目と言う通り、俺は簡単に騙されてしまうのだろう。

昨日の朝、教授の研究室に行った時にマルコムの助手の祝賀パーティに誘われたが、田舎者の世間知らずを理由に断った。

学院都市で1番の最高級ホテルで盛大に行われたらしい。マーガレットに聞いた話だが、宮廷魔術師の祖父がお祝いに来ることになっているそうだ。

マルコムは上位貴族の血を引いた魔法の力に特化した上位種の人間であり、教授が護衛を依頼したジュリアス・アンドレも同じく上位種の血統でマルコムの従兄弟になるらしい。

ジュリアスは戦闘力に特化しており、魔力は普通の人間程度の実力しかないとマーガレットが教えてくれた。

研究棟の裏口に行くと4頭の馬が付けられた馬車が止まっていた。乗合馬車を改造したのだろう。前の半分に3列の座席が作られており、乗り込むための扉と窓が作られている。後ろの半分は荷台に改造されている。

荷台の後ろに鞍を着けた4頭の馬が繋がれており、馬の近くでマルコムを含む4人が集まっておしゃべりをしている。

少し離れたところで教授とマーガレットが並んで立っており、教授の後ろの方に30歳ぐらいの男女2名のエルフが控えていた。教授の使用人で教授の身の回りの世話と食事などの雑用を担当するこ

とになっている。
御者が御者台に上がっているところを見ると、出発の準備は完了しているようだ。
「おはようございます」
俺は教授達に近づきながら挨拶をした。
「やぁ、リオンくん。おはよう」
教授が明るい声で挨拶を返してくれた。機嫌が良さそうだ。
「リオンくん。おはよう」
教授の隣にいたマーガレットが挨拶を返してくれた。
「リオンくん。ジュディ達に紹介するからこっちに来てくれ」
マルコムが呼んだので、俺は教授とマーガレットに「ちょっとあっちに行ってきます」と断ってからマルコム達の方へ移動した。
「マルコムさん、おはようございます」
俺はマルコム達４人に頭を下げて挨拶した。
「おはよう、リオン。
皆。彼がマリアさんの助手のリオンくんだ。よろしく頼む」
「リオン・ウォートです。よろしくお願いします」
マルコムが紹介してくれたので、俺は頭を下げて挨拶した。
「これは、ご丁寧な挨拶。痛み入る。
私はリーダのジュディアス・アンドレ。マルコの従弟だ。よろしく頼む」
部分鎧を着た金髪の女性が挨拶した。２０歳ぐらいで身長は１７０ｃｍぐらい。目は冷たい感じの灰色。腰に刀を差している。確かにマルコムに少し似ているようだ。
刀を使う冒険者は珍しいが居ない訳ではない。迷宮都市でも刀を差した冒険者を稀に見掛けた。
「銀狼族のハヤテだ。よろしく」
ウォルフ族の男性が名乗り出た。身長は１８０ぐらい、年齢は分からないが若い方だと思う。顔はハスキー犬のような感じで、銀色に灰色の縞が入っている。目の色は白っぽい灰色だ。

短めの2本の剣を交差させて背中に担いでいる。双剣の使い手らしい。
「神官のアンネ・シュトラウスです。よろしくお願いします」
最後に統一教会の尼僧の制服を着た女性が挨拶をした。身長は170cmぐらい、ジュディアスより2、3cmぐらい高くて細身で、金髪碧眼の西欧系白人の美女。魔術師の杖を持っている。

「おはよう。皆さん。私が最後のようね」
ちょうど挨拶が終わった時、教授達の方からマリアが声が聞こえた。振り向くと、黒色のミニスカートのゴスロリドレスとつばが広い黒い帽子を着たマリアが教授の近くに居た。初めて会った時に着ていた恰好と同じだ。
マリアを見たらドキドキするかもしれないと、密かに恐れていたのだが、脈拍が速くなったり、動揺したりしなかったので安心した。
例えて言えば、ゴールデンウィーク後に学校で美人の同級生に会った感じだろうか、気にはなるが特別に何かを感じることはなかった。
「マリアくん。おはよう」
「マリアさん。おはようございます」
教授とマーガレットがマリアに挨拶をした。
「マリアさん。おはようございます」
「おはようございます」
俺とマルコムもマリアに挨拶をした。

「皆。馬車に乗りたまえ、出発するよ」
教授が呼びかけるとジュディアス達は馬車に繋がれた手綱を解いて馬に乗った。
「僕はジュディと一緒で護衛だよ。リオンくんは馬車に乗ると良いよ」
マルコムは俺に告げると、残っていた馬の手綱を解いて馬に乗っ

た。
　馬車の前列に教授とマーガレットが乗り込み、３列目に２人のエルフが乗り込んだ。マリアは馬車の扉を開けて俺が近づくのを待っていた。
「リオンくんは２列目、私の隣よ」
「分かりました。マリアさん。お先にどうぞ」
　俺は右手で扉を捕まえて左手で先に乗るように示した。
「あら、ありがとう。気が利くわね」
　マリアは嬉しそうに笑うと先に馬車に乗り込んだ。俺もマリアに続いて乗り込み、扉を閉めてからマリアの隣の座席に座ってリュックを足元降ろした。
　マルコムとジュディアスの２人が先導して馬車は出発し、ハヤテとアンネの２人は馬車の後ろに付いた。

　馬車は研究棟の裏口から北に進み、学院の北口を出ると東に向かった。学院都市内の道路は石畳で舗装されているので、馬車は殆ど揺れずに快調に進んだ。
　馬車には屋根があるし、窓は全開なので車内の風通しは良いのだが、夏の真っ盛りのため、流石に室内は少し暑い。しかし、隣に座っているマリアは平気そうな顔をしているし、前に座っている教授達も楽しそうにしている。
　俺と同じように魔法で温度調整をしているのだろう。後ろに座った２人のエルフは両方の窓際に寄ってぐったりとしている。
　なんとなく恥ずかしい気がして、俺は隣のマリアを見ないようにして外の景色を眺めた。
「リオンくん、キョロキョロしてるけど、北口に来たのは初めてなの？」
　マリアの方に顔を向けると、マリアが笑顔で俺を見ていた。ずっと俺を観察してたのかもしれないと疑問に思った。
「はい。初めてです。正門よりもこちらの方が落ち着いた感じです

ね」
「そうね。北側は住宅街だから南側と比べたら、随分と静かよ。とっくに通り過ぎたけど独身寮は北口の近くにあるわ。教授の豪邸はあっちの方よ」
マリアは左側の方を指差した。
「そう言えば、マリアくんは何処に行ってたのかね？」
教授が後ろを振り返ってマリアに質問した。
「教会本部の様子を探ってたわ」
「なるほど、それで何か変わったことはあったかね？」
「特に無いわね。私達の調査許可が出たことは報告されてるはずだけど、特に注目はされていなかったわ」
「そうか、それなら問題無しだね」
教授は頷くと顔を正面に向けた。

学院都市を出て舗装された道から出ると、途端に馬車が揺れ出したが。
乗合馬車と比べると遥かにましだ。乗合馬車の半分ぐらいの速度しか出ていないためだろう。本を読むのは難しいかもしれないが、しゃべると舌を噛むほどでは無い。
「リオンくん。私が居ない間は寂しくなかった？」
揺れに慣れるのを待ってからマリアが俺に聞いた。
「勿論、寂しかったです。マリアさんが居ないからつまらなかったですよ」
「あら、お上手ね。それで、今まで何をしてたの？」
「マリアさんに言われた通り、毎日、図書館で勉強していましたよ」
「あら、リオンくんに図書館で勉強しろなんて言ったかしら？」
「歴史と教会の勉強をしろと言いましたよ」
「そうだったかしら……。そう言われると、確かに言ったかもしれないわね。それじゃ、どれだけ勉強したか試してみようかな。ベル

ゼルグ王国の初代王のことを説明して頂戴」
「ベルゼルグ王国の初代王ですか？」
「そうよ。どんなことでも知ってることを全部話して頂戴」
アリスがベルゼルグ王国の初代王であるボトフ・ベルゼルグの情報を伝えてきた。
「初代王の名前はボトフ・ベルゼルグ。父は有名な将軍でボトフは父親から軍人として厳しく育てられた。神は彼のリーダシップに優れた点を買ってこの王国の初代王にしたと言われています……」
馬を休憩させるために馬車が止まるまで、俺は1時間ぐらい延々と初代王に関する話をマリアに説明した。

馬車が街道を少し外れて止まった。
「残念。リオンくんの歴史の講義は一旦中止ね。でも凄いわ。説明も上手だし、歴史の講師を受け持っても十分にやってけるわ。それじゃ、私達も降りましょう」
嬉しそうな顔で俺の話をずっと聞いていたマリアは俺に言うと反対側の扉から降りた。俺も自分側の扉から降りた。

御者と教授の使用人は馬を休ませるために馬車から外し、長方形の大きな水桶を地面に置いて、教授が魔法で水を満たした。マルコム達も馬から下りて馬の世話をした。
暑いので頻繁に休ませて水を十分に与える必要がある。幸いなことに俺達の半分が魔術師なので水は幾らでも魔法で出すことが出来るし、アンネは治癒魔法で馬の疲れを取ることが出来る。
特に治癒魔法を使えるアンネの存在は大きい。俺達は15分ぐらいの休憩を馬に与えて再び出発した。
幸いなことに、マリアから歴史の講義の続きを要求されずに済んだ。教授達とおしゃべりをしたり、景色を眺めたりして過ごした。
3回目の休憩で昼食が配られた、馬に干草を与え1時間ぐらい休憩してから出発した。午後はおしゃべりはやめて、もっぱら昼寝の

時間になった。

太陽が空の頂点を通り過ぎて日が傾き、暑い日ざしがやっと弱くなりだした頃、俺達は３０匹ぐらいの平原狼に襲われた。
マップ画面の北東に３０個ほどの赤い点が表示されてアリスが警告してきた。平原狼は群れるので数は多いのだが、初心者でも討伐することができる弱い野獣だ。
俺は警告しなくても問題ないと判断して黙っていた。
赤い点が１５０ｍぐらいに近づいた時、先導していたウォルフ族のハヤテが馬車に近づいて御者に「馬車を止めろ」と命令してから「平原狼が約３０匹、襲ってくるぞ！」と大声で警告した。

馬車を降りると、マルコム達は平原狼を迎え撃つ体勢を整えており、教授が魔法のバリアを張り終えていた。
俺も手伝うつもりでマルコム達のところへ行こうとしたところで、マリアが俺の腕を叩いた。
「リオンくん。魔弾銃の試し撃ちのチャンスよ。魔法バリアの外に出てジュディアス達を手伝ってきて」
「魔弾銃ですか？」
「そうよ。まだ撃ったことが無いでしょう。使い方に慣れておいた方が良いわ」
魔弾銃を使うつもりは全く無かったが、確かにマリアの言う通りだ。
「分かりました」
俺はマリアに返事をして魔法バリアの外に出て、杖を構えて身構えているマルコムに近づいた。
「マリアさんに試し撃ちをしておけと言われた」
俺は魔弾銃を右手に呼び出してマルコムに見せた。
「それは……、ひょっとして魔弾銃！」

マルコムが目を見開いて魔弾銃を見詰めた。余程、驚いたのだろう。こんなに驚いたマルコムを見たのは初めてだ。
「マリアさんが貸してくれた」
「それが魔弾銃か？」
俺がマルコムに言い訳をすると、ジュディアスが近づいてマルコムと同様に魔弾銃を見詰めた。
「マリアさんが持ってることは知ってたが、魔弾銃をリオンに貸すとは驚いたな」
マルコムが呟いた。
「平原狼が近づいています。注意してください。魔弾銃の射程距離は５０ｍです。平原狼の弱点は土属性です。土属性の魔弾を撃つ用意をしてください」
アリスが警告してきた。俺は両手で魔弾銃を構えて先頭の平原狼に狙いを定めた。
マルコムとジュディアスは慌てて後ろに移動した。
「距離５０ｍです」
アリスの警告と同時に俺は魔弾銃を発射した。

拳銃とは違って魔弾銃には引き金がない。魔弾の撃ち方は気合いだ。
魔弾銃を簡単に説明すれば、魔弾の魔法に特化した杖だと言える。原理的には杖を構え、呪文を唱えて魔弾を撃つのと同じだが、魔弾の魔法よりも遥かに少ない魔力で遥かに威力の高い魔弾を撃つことができる。
そして、魔弾銃の引き金の引き方は、空手の正拳突きの気合いの入れ方と同じだと考えれば良い。腰を落として「はっ！」と気合いと共に拳を正面に突き出すのと同じ要領だ。
魔弾銃に魔力線を引き、気合いの変わりに魔力で「はっ！」と魔力を一瞬で込めれば良いのだ。

俺はアリスの警告と同時に魔力を魔弾銃に込めた。
無音で発射された土属性の魔弾は高速で飛び出して一瞬で平原狼に当たり、爆発したかのように赤い霧を噴出して４つか５つのバラバラの肉片を３、４ｍぐらい上空に跳ね飛ばした。
「凄い！」
移動して杖を構えていたマルコムが驚いた声を上げた。マルコムのように声を出さずに済んだが、俺も驚いた。拳銃よりも遥かに威力がある。
まるで、ミサイル弾かバズーカ砲で撃ち込んだみたいだ。
ジュディアスも驚いた顔で俺に注目していることに気付いたので、俺は当然と言う顔を作って次の平原狼に狙いを定めて魔弾銃を撃った。
２匹目も１匹目と同様に４，５個の肉片になって飛び散った。
俺は次々と狙いを定めて魔弾を打ち続けた。
魔弾銃を撃つのは初めての経験だが、魔弾銃のスキルの熟練値も他のスキルと同様に１０００のマスタークラスのため、魔弾の撃ち方、つまり魔力による気合いの入れ方を理解していた。
３０ｍぐらいに近づいてくるまでに５匹の平原狼を仕留めた。隣で杖を構えていたマルコムは火炎弾の魔法を撃ち込み５匹の平原狼をまとめて始末した。
神官のアンネも魔弾の魔法を撃って平原狼を始末した。ジュディアスとハヤテも構えた弓の矢を撃ち始めた。
平原狼の走るスピードが速いため１０匹ぐらいは辿り着きそうだ。
魔弾銃を連射するのは日本人の男子なら却って簡単かもしれない。有名な拳の達人の掛け声を真似ればよいのだ。例の「あったったったったっ……」の要領だ。
俺は秒間３，４発ぐらいの連射に切り替えて、数秒で残りの平原狼を片付けた。

ジュディアスとハヤテは構えていた弓を背中に戻した。
「いやー。リオンくん。大した腕だね。特に最後のは凄かった。あんな撃ち方が出来るなんて聞いたことが無いよ」
教授が褒めながら近づいてきた。
「まぁ、なんとか及第点ってところかな。初めてにしては上手だったわよ」
マリアが近づいて来て褒めているのかけなしているのか判断に悩む評価を下した。
「さて、それでは出発しよう。皆、馬車に乗りたまえ」
教授が号令すると、ジュディアス達は馬に、俺達は馬車に乗り込んで何事もなかったかのように出発した。

空が夕焼けで染まった頃、俺達は街道を逸れて馬車を止め、全員で野営の準備を始めた。
教授が用意したテントはマジックアイテムで、簡単に組み立てることができた。
１０個の個室とトイレと風呂が完備されたテントの小屋が２つと屋根だけのテント。屋根だけのテントの下にテーブルと椅子が並べられて、皆がくつろげるようにしてある。
中央に屋根だけのテント、左右にテントの小屋を設置し、右側を男性用テント、左側を女性用テントにした。
教授が連れてきたエルフ族の夫婦が夕食を調理し、全員で食事をした。キャンプ地はマリアが魔法のバリアを張り巡らしたので見張りの必要もない。
「リオンくん。平原狼を倒した魔弾銃を見せて貰えないか？」
食後のお茶を飲んでいるとマルコムが話しかけてきた。マリアを見ると頷いたので、俺はウェストバックから魔弾銃を取り出してマルコムに渡した。
「その魔弾銃はリオンくんに同調されているから、リオンくんでな

いと撃てないよ。リオンくんは手元にいつでも呼び出せるから、盗難の心配もいらないはずだ。
リオンくんが死ねば魔弾銃は同調前の状態に戻るがね。それでも、魔弾銃は使い手を選ぶそうだよ。リオンくんを殺しても魔弾銃が使い手として認めてくれないと使えないよ。
それに魔法の魔弾と同じで魔法の抵抗力の高い魔獣には効果が無いよ。ドラゴンや鬼人、魔界の魔人には魔法が効かないからね。
魔法攻撃を防ぐ魔法のバリアで対抗できるけど、間に合うようにバリアを貼るのは難しだろうね。それよりも、魔法攻撃を防ぐ魔法の鎧を着た方が確実に防げるだろう」
ワインを飲んでくつろいでいた教授がマルコムに説明した。
「王族が神から貰った魔弾銃を持っているそうね。マルコは見たことないの？」
マルコムから魔弾銃を取り上げて構えていたジュディアスがマルコムに聞いた。
「王家の宝物だからね。陛下は護身用に常に身につけているそうだけど、僕でも実物は見たことないよ」
「ずっと前に、マリアくんに見せて貰ったことがあるが、実際に使われたのを見たのは僕も初めてだよ」
「私は見たのも初めてだわ」
マーガレットが言うと、ジュディアスに手を差し出して魔弾銃を受け取った。
「結構、重いのね。構えるだけで腕が震えるわ」
マーガレットは片手で構えてから感想を言った。
「リオンくんが構えていたように、腰を落として両手で構えれば良いのよ」
マリアはマーガレットから魔弾銃を受け取って、両手で構えて見せた。そして、俺に魔弾銃を返してくれた。俺は魔弾銃をウェストバックに入れた。
「そうだ、魔弾銃のことは誰にも言わないように頼むよ」

「あら、リオンくんが使えばすぐにばれるわ。無理に秘密にしなくても良いわよ」
マリアが教授の命令に反対した。確かにいざと言うときに使わないのでは武器の意味が無いが、自分から宣伝することでもないだろう。
「確かに、マリアくんの言う通りだが、わざわざ宣伝することでもないよ。皆、言いふらさないように頼むよ」
教授が俺の気持ちを読んだかのように皆に頼んだ。
「分かりました」
マルコムが教授に答えた。ジュディアス達も分かったと言う印に頷いて見せた。
「モントールまで街道を通るから大した魔獣は出ないからね、次に魔獣が襲ってきてもリオンくんは馬車の中で大人しくしてなさい。ジュディアスくん達に任せておけば大丈夫だよ。少なくとも魔弾銃を使う必要はないからね」
「分かりました」
スターレン渓谷にはモントールを経由して行く予定になっている。モントールは地球の地中海によく似た地形の海に面した都市で海路と陸路の両方の交易で栄えている商業都市だ。
モントールまで4泊5日、スターレン渓谷はモントールから馬車で1泊2日の距離にある。
「モントール近辺には盗賊が多い、特にあの「赤衣の盗賊団」が出没すると噂になってる」
ウォルフ族のハヤテが警告した。
「赤衣の盗賊団って何？」
マーガレットがハヤテに聞いた。
「赤目の魔女と竜殺しが率いる盗賊団だ」
マーガレットにハヤテが答えた。俺は嫌な予感がした。2人のことを聞きたかったが、聞いたら確実に遭遇することになると確信めいた予感がした。

「赤目の魔女と竜殺しって何なの？」
マーガレットがあっけなく聞いた。俺はマーガレットの口を塞ぎたかったが後の祭りだ。
「赤目で赤毛の女性魔術師と竜殺しの称号を持った戦士だ。２人とも人間の上位種だと言われている。赤目の魔女の名前はザザ・レッドロック。実力は特級魔術師並みだ。竜殺しの名前はアルフレッド・オーガスタ。竜殺しの称号は本物らしい。２人とも王国が指定した賞金首だ。討伐に向った１００名の騎士団が２人に殲滅させられたと言う噂がある」
ジュディアスがマルコムを見ながら説明した。
これで盗賊団と遭遇することが確実になった思った。魔獣を殺すことには慣れたが、まだ人を殺したことは無い。人を殺すことを覚悟した方が良いだろう。
「名前で分かる通り、ザザ・レッドロックは腹違いの姉だよ。家族の縁は切られている。襲ってきたら遠慮なく殺して良いよ。爺さんから家族に正式に命令が出てるよ。見つけたら必ず殺せ、ロッドロック家の恥だとね」
マルコムが辛そうな顔でジュディアスに答えた。

１２話

学院都市を出発して４日目、予感した通り赤衣の盗賊団に襲われた。
朝の１０時頃、マップ画面に凄い数の黄色の点が表示され、アリスが盗賊団の待ち伏せの可能性があると警告してきた。
魔獣は赤い点で表示されるが、人間や亜人は黄色の点で表示される。街で人間や亜人を表示したら黄色の点ばかりになるので普段は赤い点しか表示していない。
前方の気配を探ると、確かに何かが潜んでいる気配がした。
馬車が向かっている先に小さな森が広がっており、街道は小さな森の中に延びている。
黄色の点は９０個ぐらい、９０人の盗賊団の規模が大きいのか小さいのか分からないがこちらの護衛は４人。教授の使用人を除けば全部で８人しかいない。
しかし、半分以上が魔術師なので多人数を相手に戦えるはず。俺は人数は関係ないと無理やり自分を納得させた。
「前方の森に９０人ぐらいの盗賊団が隠れています」
俺は前に座っている教授に警告した。
教授は振り返って「本当かね？」と聞いてからマリアを見た。マリアが真面目な顔で頷いた。
「盗賊団だ。馬車を止めろ！」
教授が叫ぶと馬車がすぐに止まり、先導していたジュディアスとハヤテが馬車に引き返した。
前方の森から真紅の服を着て馬に乗った盗賊団が飛び出して来た。馬の後から真紅の服を着た盗賊が徒歩で続ている。
教授の指示で俺達は馬車から降りて、マリアが魔法のバリアを張

り巡らし、マーガレットが馬が暴走しないように馬車を曳いている４頭の馬に魔法を掛けた。
マルコム達４人は馬を馬車に繋ぎ、固まって馬車から離れてバリアの外に出た。
「リオンくん。人数が多いわ。マルコム達に合流して魔弾銃で盗賊団を始末して頂戴」
マリアが普段通りの笑顔で俺に命令した。俺はマリアに頷いてマルコム達に合流した。教授も魔術師の杖を手に持って俺と一緒に合流した。

３、４０頭の馬に乗った盗賊達が矢の陣形で迫って来る。その後ろには徒歩の盗賊達が横に広がりながら続いている。
「話し合いの余地は無さそうだね」
教授が落ち着いた顔で言った。
「私達を一掃してから荷を調べるのだろう。盗賊団の常套手段だ」
ジュディアスが覚悟を決めた顔で言った。
「今の内に支援魔法を掛けておくよ。リオンくんの魔弾銃ならあれぐらいの人数はどうと言うことはないよ。
ジュディアスとハヤテは飛び出さないで、僕達を守りなさい。マルコムくんとアンネくんは魔法で攻撃だ。リオンくんは魔弾銃を撃ちまくってくれ。
相手は盗賊だ。遠慮は要らん。容赦なく殺しなさい」
教授は俺の目を見ながら言った。俺が頷くと、教授は俺達に支援魔法を掛けるために、魔法の杖を掲げて呪文を唱えた。
マルコムとアンネは恐怖で青い顔をしているが、ジュディアスとハヤテは決意を固めた戦士の顔をしている。
俺は魔弾銃を手元に呼び出して迫ってくる盗賊の先頭の馬に狙いを定めた。これから人間を殺すのだと思うと銃身が震える。たぶん、俺はマルコムのように青ざめた顔をしているのだろう。
しかし、躊躇するつもりは無い。３日前から覚悟は決めていた。

先頭の盗賊が５０ｍぐらいに近づいた時、俺は馬上の盗賊を狙って魔弾銃を撃った。
スキルの熟練値の影響だと思うが、魔弾を撃とうとした時、銃身の振るえがピタリと止まった。自分でも意外に思うほど心が落ち着いて冷静になった。
例の「あったったったっ……」の要領で魔弾を連射して、次々と馬上の盗賊団を撃ち落としていった。教授が加速の魔法を掛けてくれたので、連射の早さも倍ぐらいになっている。
一団になって襲ってくる蛮族に機関銃で掃射しているようなものだ。４０人近い盗賊が１０秒も掛からずに全滅した。
乗り手を失った馬がそのまま突っ込んで来たので、教授とマルコムが広範囲魔法を使って馬を散らした。

後ろから続いていた徒歩の盗賊達が５０ｍぐらい離れた位置でぴたりと止まった。
横一線の陣形なのだろうか、盗賊団とは思えないほど規律が行き届いているようだ。中央に馬に乗った盗賊が7人。その内2人の男女が馬から下りて、ゆっくりと俺達の方に歩いてきた。
まるで音が無くなってしまったかのように辺りが静まり返った。
近づいてくる2人が有名な赤目の魔女と竜殺しだろう。2人とも真紅の鎧に真紅のマントを風になびかせながら近づいてくる。
まるで、映画の決闘シーンを見ているかのようだ。

俺は竜殺しの方に狙いを定めて魔弾銃を構えた。堂々と近づいてくる2人には無駄だろうと思うし、なんとなく撃つのはルール違反のような気がするのだが、俺は敢えて魔弾銃を撃つ決心をした。
相手は盗賊団で、俺達はほんの少人数で襲われた側なのだ。なんの警告もなしに襲ってきたのは相手の方だ。

卑怯者呼ばわりされようが構うものか。
俺は竜殺しに対して気合いを入れて魔弾を打ち込み、続けて赤目の魔女に魔弾を打ち込んだ。
しかし、予想通り、魔弾は壁に当ったかのようにはじけ、２人は何事も無かったかのように悠然と歩き続けた。
ちらりと様子を見ると、教授達も何事も無く黙ったままだ。なんだか俺だけが悪あがきをしたようで、ちょっと恥ずかしいと思った。

２人は１０ｍぐらいの位置で立ち止まった。
お揃いの真紅の鎧に真紅のマントを風になびかせながら立つ姿は、悪人の癖にやたらと格好が良い。おまけに赤目の魔女はスタイル抜群の美女で、竜殺しも美男の偉丈夫だ。
「誰かと思ったらレッドロックの坊ちゃんじゃないか。それとアンドレ家のじゃじゃ馬娘に学院の有名教授かい。これはとんだ獲物が手に入ったわね」
距離があるので赤目の魔女が大声ではっきりと発音して言った。わざとらしくて、まるで演劇でも見ているみたいだ。
「魔弾銃を持ってる坊やは知らないねぇ、坊やの名前は何だい？」
赤目の魔女が俺を観察しながら聞いた。ぞくぞくするほど色っぽい。
「我々を殺しても、馬車は手に入らんぞ、いくらお前でもあのバリアは破れない。諦めて退散しろ」
教授が俺達を代表して大声で言い返した。
「確かに、あのバリアは私でも破れないようね。でも、魔弾銃が手に入れば十分さね。それだけで暫くは遊んで暮らせそうよ。あははは……」
赤目の魔女が高笑いをした。
「おい。そろそろいいか？」

竜殺しが笑い続ける赤目の魔女を見て聞いた。
「もうしびれをきらしたのかい？　分かったよ、あんた。やってもいいよ」
笑いやめた赤目の魔女が竜殺しに媚を売りながら答えた。
「おい、そこの犬っころ、さっさと掛かって来い」
竜殺しは嬉しそうな顔をしてハヤテをけしかけた。

「うぉー！」
ハヤテが双剣を構え、雄叫びを上げながら竜殺しに向かって走った。そして、すぐ後ろを刀を抜いたジュディアスが続いた。
教授とマルコムとアンネが杖を掲げて呪文を唱えると、赤目の魔女の杖を掲げた。俺はアリスが提案した戦術に従って、横に移動しながら魔弾銃を2人に交互に撃ち始めた。

アリスは赤目の魔女の魔法を避けるために教授達と距離を開けること、密集していては範囲攻撃魔法の餌食になる。そして、魔弾銃を撃って魔法攻撃のバリアを張らせれば物理攻撃を防げないので、拳銃の弾が効果を発揮する可能性が高いと言ってきた。

ハヤテは竜殺しに近づくと左右の剣を真横に交互に振って胴体に斬り付けたが、竜殺しはダメージを全く受けず、ハヤテを蹴り飛ばした。
蹴られたハヤテは2，3mほど後方に飛ばされた。
後ろに続いていたジュディアスが振りかぶった刀を袈裟斬りで仕掛けたが、竜殺しは両手剣で受け止め、ジュディアスを勢いをつけて前に押し飛ばした。
ハヤテが再び竜殺しに近づき、振り上げていた両手の剣を時間差で振り下ろしたが、竜殺しは両手剣を横に振って、ハヤテの左腕を斬り飛ばし、再び蹴り上げた。
ハヤテと入れ違いに突っ込んだジュディアスが振りかぶった刀を

振り下ろすと、竜殺しはくるりと回転して振り下ろされた刀を避けると、回転した勢いのままジュディアスの胴体に両手剣を叩きつけて横に飛ばした。後ろに蹴り飛ばされたハヤテも横に飛ばされたジュディアスも倒れたまま起き上がる気配が無い。

一方、赤目の魔女は範囲攻撃の火炎魔法であるボルケーノを教授達3人に発動したが、教授が火炎の防衛バリアを張った。マルコムとアンネの火炎弾と魔弾は赤目の魔女の防具に阻まれた。

赤目の魔女はすぐに次の魔法を発動し、3発の魔弾を3人に飛ばした。マルコムとアンネは赤目の魔女の魔弾に撃たれて後ろに飛んだ。教授にも魔弾が飛んだが魔弾は壁に当ったかのようにはじけた。

俺は装備画面を呼び出して魔弾銃を拳銃に交換し、赤目の魔女に狙いを定めて続けざまに引き金を引いた。

危険を察知したらしい竜殺しが俺と赤目の魔女の間に割り込んできた。2人と戦っていた時とは段違いのスピードだ、ひょっとしたら加速したのかもしれない。

竜殺しに3発、そして、竜殺しの耳に穴を掠めてすり抜けていった弾が赤目の魔女の頭を撃ち抜いた。

アリスの戦術が上手くいった。しかし、竜殺しに当った3発の弾は、はじかれてしまった。

「ザザー！」

赤目の魔女が倒れるのを見た竜殺しが大声で叫んだ。

「貴様、殺してやる！」

竜殺しが吠えて俺に向って突進してきた。両手剣を高々と掲げ、俺を目指して猛スピードで突っ込んでくる。ハヤテとジュディアスは倒れたままだが、竜殺しにとっては、俺以外は眼中に無いのだろう。

俺は拳銃と「黒桜」を交換し、両手で「黒桜」を構えた。

物凄い迫力だ。危険を察知した俺は本能的に「超加速」を発動して４倍に加速した。
竜殺しの動きが遅くなり、ゆっくりと両手剣を振り下ろしてきた。
俺は竜殺しの脇をするりとすり抜けて、後ろから袈裟切りで斬りつけた。必殺のカウンター技が見事に決まったらしく。竜殺しの体が斜めに２つに分かれて倒れた。
「超加速」を解除した俺は血糊を振り払うかのように「黒桜」を左右に大きく振ってから背中の鞘にしまった。

暫く、辺りは静まり返っていたのだが。
「お前ら、姉御のかたきを討て！」
「親分のかたき討ちだ！皆殺しにしろ！」
突然、横一線の陣形で待機していた盗賊達が大声で叫びながら俺を目指して突進してきた。どの盗賊も血走った目で発狂したかのような物凄い表情だ。
全員が俺を目指しているように思えて、俺は恐怖で震えた。そして、再び「超加速」で４倍に加速した。俺は武器を魔弾銃に持ち替えて迫ってくる盗賊達を機関銃で掃射するように必死になって撃ち殺した。

魔弾銃を撃ち終えた俺は暫くの間、横一列に倒れた盗賊を眺めていた。バリアが解除され、マリアとマーガレットが走るのが見えた。教授がマルコムを仰向けにして怪我の様子を見ている。マーガレットはマルコムの隣に倒れていたアンネを抱き起こした。
マリアは斬り飛ばされたハヤテの腕を拾うと走ってハヤテに駆けつけた。
そう言えば、マルコム、アンネ、ジュディアス、ハヤテの４人が倒されたんだっけと俺は薄ぼんやりと考えた。そして、ふらふらとジュディアスに向かって歩いた。

ジュディアスを仰向けに抱き起こして見ると腹が横に大きく切り裂かれて内臓が見えていた。胴体の半分が切られている感じだ。息をしていないし首筋で確認すると脈拍も停止している。
だめだ、死んでると思ったらアリスが指示を伝えてきた。
俺は半信半疑で、アリスの指示通り、背中に膝を当てて活を入れるとジュディアスは「ごぼっ」と弱々しく血を吐き出した。
アイテム画面から最上級の回復の魔法薬を手に実体化してジュディアスの口に流し込むと、ごくりと魔法薬を飲み込んだ。
途端に、青白い顔に血色が戻り、切り裂かれた腹が見る間に修復された。そして、パチリとジュディアスが目を開けた。
俺が飲ませた魔法薬は千切れた手足でさえも直してしまう魔法薬だが、死者を生き返らせることは出来ない。アリスが言う通り、完全に死亡していなかったのだろう。
魔法薬が効くかどうかの判定は何だろうかと疑問に思うと、アリスが「心臓が動いていれば魔法薬の効果があります」と教えてくれた。
ジュディアスは瞬きをすると、自力で上体を起こして辺りを見回した。
「ジュディアスさん。大丈夫ですか？」
「あぁ、大丈夫だ」
ジュディアスは立ち上がると自分の体を点検した。
「腹の半分は斬られてたはずだ。死んだと諦めたが、リオンが助けてくれたのか？」
「はい。回復の魔法薬を持ってましたので飲ませました」
「そうか、よほど高級な魔法薬を使ったらしいな。後で弁償するよ」
「いえ。いりませんよ。仲間を助けるのは当たり前ですから」
「そうか、それは嬉しい提案だが、そうだな、後で私が持っている魔法薬を渡すから受け取ってくれ。仲間内でも借りはちゃんと返さないと、仲間割れの原因になる」

「そうですか、分かりました」
俺はジュディアスの言う通りだと思ったので、肯定の返事をした。
マリアとハヤテが近づいて来た。
「リオンくん。大丈夫？　顔色が悪いわよ」
マリアが心配そうな顔で聞いた。
「大丈夫です。怪我はしてませんよ」
「ひょっとして人間を殺したのは初めてか？」
マリアの横に居たハヤテが聞いた。
「良く分かりましたね。そうですよ」
「そうか、気休めにしかならんが、相手は盗賊だ。殺して当然の奴らだと思え」
ハヤテは言うと俺の肩をポンポンと優しく叩いた。
「ありがとうございます」
俺は嬉しくなってハヤテに礼を言った。何故が涙が溢れそうになったが、なんとか堪えた。
教授達が集まってきた。
「みんな大丈夫のようだな。しかし、これだけあると剥ぎ取りは大変だ」
教授が疲れた声で言った。
「剥ぎ取り？」
俺は思わず聞き返した。
「死体から金目の物を剥ぎ取って、賞金首の盗賊は首を切り落とす。それと討伐の証拠に協会の認識票も集めるのさ。冒険者なら当然の義務だ」
ハヤテが教えてくれた。
「リオンくんは馬を集めたらいいわ」
「そうだね。それが良いよ」
マリアが提案すると教授がすぐに同意した。
「それでは、リオンくん以外の全員は剥ぎ取りだ。すぐに始めよう。リオンくんは盗賊の馬を集めて馬車に繋いでくれ、荷台にロープが

積んであるはずだ」
教授が指示すると全員が散らばって行った。俺は言われた通り、馬を集めることにした。

盗賊が乗っていた馬は乗り手を無くしても遠くに逃げないで、幾つかのグループの群れを作っていた。幸運なことに１２頭の馬は馬車に繋がれた俺達の馬に近くに集まっていた。
俺は馬に乗って盗賊の馬を馬車に誘導し、荷台に積んであったロープとアイテム画面から取り出したロープを使って、集めた馬を５つのグループに分けて数珠繋ぎにした。
結局、３８頭の馬を集めた。残りの馬は教授とマルコム魔法で死んだ馬だけで、逃げてしまった馬は居ないようだった。

馬を片付けてから俺も剥ぎ取りに参加した。恥ずかしいことに２回ほど吐いてしまったが、４ヶ月前の魔獣の死体に酔った時と比べると、随分とましだ。
人を殺した罪悪感を感じなかったが、血だらけの首の無い死体から鎧を剥ぎ取り体を弄ったため、気分が悪くなっただけだ。吐いた後は随分とましになった。
戦利品を馬車の荷台に積み込むと昼食用のサンドイッチが配られた。流石に昼食を食べる気にはならなかったので、貰ったサンドイッチはウェストバックに入れて、魔法の水筒の水だけで済ませた。
俺達は盗賊の遺体を放置したまま出発した。

盗賊に襲われた遅れを取り戻すために、午後は移動の速度を上げた。馬が大量に手に入ったので、途中で馬を交換した。
日が暮れて完全に太陽が沈むまで移動してから野営のキャンプを設置した。夕食後に戦利品について話し合った。

俺は断ったのだが、結局、赤目の魔女と竜殺しからの戦利品と賞金は俺が貰うことになり、その他の戦利品については、俺の意見が採用されて、各自が欲しい物を取った残りは全て売却して全員で平等に分けることになった。

２人の賞金首と赤衣の盗賊団を殲滅した功績は俺の物であって仲間で分けるべきではないと、ジュディアスとハヤテから懇々と諭されてしまった。

明日、モントールに着いたら馬と戦利品をマルコム、ハヤテ、アンネが売却し、俺とジュディアスの２人でギルドに報告に行くことになっている。

「教授、教えて欲しいことがあるんですけど、良いですか？」

盗賊団との戦いについて気になることがあったので、俺はワインを飲みながら寛いでいる教授に聞いた。

「何かね」

「マリアさんが張ったバリアの中に全員で篭れば安全だったと思うのですが、外に出て戦ったのはどうしてですか？　赤目の魔女と竜殺しに勝てる根拠は無かったはずです」

「あのバリアは初めて見ましたけど、そんなに強力なんですか？赤目の魔女にバリアを破られてしまうものだと思ってました。マルコムさんはあのバリアを知ってたんですか？」

アンネが隣に座っていたマルコムに聞いた。

「僕も見たのは初めてだけど、多分、アブソリュートピラミッドじゃないかな。流石に赤目の魔女でも、破るのは難しいと思う。アブソリュートピラミッドを使える人が居るとは思わなかったけど、さすが黒衣の魔女ですね」

マルコムがマリアを見た。

「あら、おだてても何も出ないわよ」

マリアがうふふと笑った。

「確かに、マリアくんのバリアはアブソリュートピラミッドと呼ば

れる最強の防護バリアだ。赤目の魔女では破れないだろうが、アブソリュートピラミッドを張ったまま移動はできないし、マリアくんの魔力が尽きれば、消えてしまうよ。閉じこもったとしても、結局は戦うことになる。

僕はリオンくんがあの2人に勝てるのではないかと期待して一緒にバリアから出たんだよ。マリアがリオンくんを信じろと言ったからね。

無傷では無かったが、結局、赤衣の盗賊団をリオンくんが殲滅したからね。マリアくんの言う通りだったよ」

「私は赤目の魔女の魔弾にやられたから見てないけど、リオンさんはどうやって2人を倒したのですか？」

アンネが教授に聞いた。

「私も竜殺しにやられて見てない。是非、教えて欲しい」

ジュディアスも教授に聞いた。

「マルコムとアンネさん。ジュディアスさんとハヤテさんも倒れたから、近くで見てたのは教授だけです。私はバリアの中だったから良く見えなかった」

教授の隣でワインを飲んでいたマーガレットが教授に聞いた。

「確か、「パン、パン」と乾いた大きな音が4つ。リオンくんの方から聞こえたと思ったら赤目の魔女が倒れたよ。その後、竜殺しがリオンくんを倒そうと剣を振りかぶって凄いスピードで向かった。竜殺しがリオンくんに剣を振り下ろしたと思ったら、いつの間にかリオンくんは竜殺しの背後に居て、刀で切りつけてた。竜殺しの体が2つに分かれて倒れたらリオンくんは刀を左右に振ってから背中に刀をしまったね。

いやー。あれは格好良かったね。僕が女性なら一発で惚れてたよ。

暫くすると残りの盗賊団が大声を張りながらリオンくんに迫って行ったけど、リオンくんは魔弾銃でこうやって横に動かしながら物凄い勢いで魔弾を撃って、あっと言うまに残った盗賊を倒してしまった。

あれが実際に起きたこととは僕も思えなくてね。なんだか夢を見てたんじゃないかと今でも思っているよ」

……。

「なんだか英雄の伝説を聞いてるみたいで、とても信じられないです」

アンネがポツリと感想を言った。

「確かに、私でも信じられないところだ。勿論、教授の話を疑っている訳ではないよ」

「リオン。一体、どんな技を使って2人を倒したんだ？」

アンネに続いてジュディアスが教授に感想を言ってから俺に顔を向けて聞いた。

「それは秘密です。とっておきの隠し技ですから、教えられませんよ」

俺は顔を横に振ってジュディアスに答えた。

「確かに、隠し技を聞く訳にはいかないな」

ハヤテが俺に同意してくれたが、皆は不満そうな顔をしていた。

「しかし、ギルドに報告する必要がある。ギルドに報告する内容を打ち合わせしておこう」

「そうですね。分かりました」

その後、俺達はギルドに報告する内容を相談してから翌日に備えて寝ることにした。

13話

翌日の昼、丘の頂上で馬車を止めて昼食を取ることになった。遠くの方に青い海が広がり、街道の先にモントールの街並みが小さく見える。古代ギリシャ時代の特番に出てきそうな絶景が広がっている。

「なんだか楽しそうね。良かったわ」

隣で一緒に昼食のサンドイッチを食べていたマリアが嬉しそうな顔で話しかけてきた。

素晴らしい景色を堪能しながら美味しいサンドイッチを食べていたので、自然と顔がほころびていたのだろう。俺は美味しい物を食べることが好きで、美味しい食べ物を食べると嬉しそうな顔をするらしい。

「ここから見える景色は絶景ですよ。おまけに食べ物も美味しい。言うことなしです」

「褒めて貰えて嬉しいわ。ありがとう。どう？　この世界もなかなかのものでしょう？」

「えぇ、そうですね」

俺はマリアに返事をしてからドキッとしたが、すぐに、マリアが俺が別世界の人間であることを知っていることを思い出した。

俺の様子を見ていたマリアがクスクスと笑った。まるで心の中を読まれているような気がした。

少し離れたところにマルコムとアンネが並んで座っているのが見えた。マルコムがぼうとした感じでモントールの街を眺めているようだ。

「マルコム。赤目の魔女はあなたのお姉さんでしょう。仲が良かったの？」

２人に注意を向けたら、アンネがマルコムに話しかけた声が聞こ

えた。俺は2人の会話に耳を傾けた。
「昨日会ったのが初めてだ」
「そうなの、でも、あなたの名前を知ってたわ」
「ジュディのことも、教授のことも知ってたからね。特に意味は無いよ」
「ひょっとしてリオンを恨んでる？」
「いや、その逆だね。レッドロック家としては感謝しているよ。リオンくんが倒さなかったらレッドロック家が討伐することになるだろう。爺さんからリオンくんに謝礼が送られるかもしれないね」
「そうなんだ。赤目の魔女ってどんな人なんだろうね。見た目は美人だったし、竜殺しとはまるで夫婦みたいだった」
「その通りだよ。あの2人は相思相愛のカップルだよ。2人の仲を裂こうとしたのがレッドロック家と教会。それが原因で2人は盗賊になったような物だ」
「どう言うことなの？」
「ごめん。レッドロック家の恥だからね。これ以上のことは言えないよ」
「あぁ、私の方こそ、ごめんなさい。つい好奇心で変なことを聞いちゃったわ。許してね」
「あぁ、大丈夫だよ。気にしてないよ」
「そう。良かった」
2人は話すのを止めると揃ってモントールの街の方に視線を向けた。

2人の会話に注意を向けている俺を観察していたマリアがくすりと笑った。
「盗み聞きだなんて、悪趣味ね。まぁ、私も人のことを言えないけどね」
マリアが片目を閉じてウィンクした。どうやらマリアも2人の会話を聞いていたようだ。

モントールの郊外にある馬車屋で盗賊団の馬を売り払ってからモントールに入った。教授が指定した宿屋に馬車を乗り入れ、部屋を確保してから俺とジュディアスは冒険者ギルドに向かった。
マリアが同行すると申し出たが、ジュディアスが必要ないと言って断った。
モントールの冒険者ギルドは3階建ての建物で、迷宮都市のギルドと比べれば規模が小さいが、学院都市の冒険者ギルドよりは遥かに規模が大きい。
俺はジュディアスに先導されて2階に行き、依頼達成受付の窓口に向かった。窓口の係員は30歳ぐらいの人間の男性だった。
「依頼達成票とカードを出してください」
俺達が窓口に並ぶと、係員が事務的な口調で言った。
「盗賊団と賞金首の討伐の報告に来た。討伐したのはこちらのリオン、私は証言と立会いだ」
「盗賊団と賞金首の名前は？」
「赤衣の盗賊団だ。賞金首は赤目の魔女と竜殺し」
ジュディアスが言い切ると、係員が驚いた顔をした。
「討伐したのはあなたではなくて、こちらの少年ですか？」
「そうだ」
「証拠はお持ちですか？」
「勿論だ。2人の首と認識票、それと盗賊団の87人分の認識票だ」
「では、確認しますので渡してください」
ジュディアスが俺に頷いたので、俺はリュックから2人の首を入れた袋を2つと87人分の認識票を入れた袋を窓口のカウンターに置いた。
係員は袋の口を開けて覗き込むと顔をしかめた。
「別室で確認してきますので、ここでお待ちください」

係員は言うと席を離れて奥へ行った。

暫く待たされてから係員が慌しい様子で戻ってきた。

「ギルドマスターが話しを聞くそうです。こちらに来てください」

係員に誘導されてギルドマスターの執務室に入ると、奥の執務机に４０代ぐらいの男性が座っていた。

入り口には応接用のテーブルとソファーが置かれていて、ギルドマスタは立ち上がると、執務机の奥から出てきた。

身長は１８０ｃｍぐらいで逞しい体。元は戦士だっとことが誰もわかる物腰で、髪は短めの茶色、ちょっと白髪が入っており、目は灰色だ。

「わざわざ来てもらってすまない。そちらに座ってくれ」

俺達は並んで入り口側のソファーに座った。ギルドマスターは俺達が座るの待ってから向かい側のソファーに座った。

「正式な認定は時間が掛かるが、赤目の魔女と竜殺しの首と８７人分の認識票は赤衣の盗賊団の物の可能性は高いと思う。どうやって倒したのか教えてくれ」

俺がジュディアスを見ると、ジュディアスは俺に頷いた。仕方が無いので昨日相談した内容をギルドマスターに説明した。

「赤目の魔女を弓矢で仕留めて、竜殺しは麻痺の魔法で動きを止めて弱体化の魔法で武器が効くようにしてから倒したと言うことか？」

「はい。そうです」

「９０人近くも居た盗賊は防衛バリアで防衛しながら魔法と弓矢で片付けたと言うことだな」

「えぇ、その通りです」

「信じない訳ではないが、しかし、たった８人で９０人の盗賊団を殲滅したと言うのはなかなか信じられることではないよ。しかもあの２人だ。

例え、魔術師が５人に治癒魔法が使える神官が１名もいたとして

もだ。
盗賊団を殲滅するのは可能だろう。だが、あの2人を倒せるとは思えないよ」
「特級魔術師が1名に上級魔術師が2名だ。魔術師の実力が違う。特級魔術師と言えば、白髭の賢者、宮廷魔術師と同じだ」
ジュディアスがギルドマスターに答えた。
「成る程、確かに白髭の賢者なら2人を討伐することは可能なのかもしれない。それに、動かぬ証拠がある以上、信じない訳にはいかないか……。
分かった。ただし、こちらで確認してからだ。現場が1日の距離なら何人か出して確認する。盗賊団の死体はそのまま放置したのだろう？」
「あぁ、剥ぎ取った後に放置した」
「それなら、賞金が正式に出るのは早くても1週間後だ。受取は誰にする？」
「ここにいるリオン・ウォートにしてくれ」
「分かった。それじゃ、冒険者カードを渡してくれ」
俺はウェストバックから冒険者カードを出してギルドマスターに渡した。ギルドマスターは「ちょっと待ってくれ」と言うと執務机に行き、執務机を置いてあった端末を操作してから戻ってきた。
ソファーに座ると俺に冒険者カードを返した。
「リオン・ウォート、ランクC……。1週間後に大騒ぎになるな」
ランクSの賞金首2名を倒したのだから、言われなくとも大騒ぎになるのは明らかだ。
「まぁ、私達はスターレン渓谷の遺跡に居るから関係ないだろう」
ジュディアスは他人事のように言ったが、無関係で居られるはずがないと思う。
「2人の止めを刺したのは僕ですが、教授達が居なければ倒せなかったのも事実です。僕の名前を伏せることはできませんか？」
出来れば騒がれたくないので、だめだろうなと思いながらも俺は

ギルドマスターに提案した。
「無理だな、各ギルドに正式に情報を通知しなきゃぁならん。名前を伏せることは出来ない。なぁに、最初は大変かもしれんが、半年もすれば落ち着く」
俺は肩を落として溜息をついた。ギルドマスターは他人事だと思っていい加減なんことを言っているのは明らかだ。誰かに聞かれたら人違いだと言って逃げるしかないだろう。
「正式に認められたら賞金を口座に振り込む。暫くはスターレン渓谷だな？」
「あぁ、そうだ。呼び出されても依頼中だからギルドに顔を出せないぞ」
「そうだな。依頼中なら仕方がないか。分かった」
「それでは、宿屋に戻りたいが、まだ、何か話しがあるか？」
「正式に認定されてからだが、ランクアップの申請を出してくれれば、ランクＡまでなら認められるだろう」
「私はランクＢより上げるつもりはないよ。リオンはどうする？」
「僕も今のままでお願いします」
「そうか、ランクアップは強制できんからな、好きにすれば良いだろう。私からの話は以上だ」
「分かった。それでは、リオン。宿屋に戻ろう」
ジュディアスは言うと立ち上がったので、俺も立ち上がり、ジュディアスと一緒に冒険者ギルドを出て、宿屋に帰った。

教授が指定した宿屋は日本なら１泊数十万ぐらいの超高級ホテルに相当する高級宿屋だった。
ペントハウスのような最上階を教授が独占し、教授、マーガレット、教授の使用人が最上階。５ＬＤＫぐらいの部屋に俺、マルコム、ハヤテの３人で入り、同じく５ＬＤＫの部屋にマリア、ジュディアス、アンネの３人が入った。

格式の高い宿屋で、成金の商人では幾ら金を積んでも教授が入った部屋には泊まれないらしい。

教授から指示は無かったが自然と最上階の談話室の大部屋に全員が集合した。隣でお茶を飲んでくつろいでいたマルコムに「教授って、何者？」と聞いたら、テーブルの対面に座っていたマーガレットが「エルフ族の第三王子よ」と教えてくれた、俺は呆気に取られてマーガレットを見つめてしまった。

「やだぁ、リオンくんったら、そんなに見つめられたら、おねぇさん、困っちゃう」と言われてしまった。

数回のノックの音がすると、扉が開いて宿屋の給仕が入ってきた。そして、頭を深々と下げてお辞儀をした。

「お待たせしました。お食事の用意が整いましたので、食堂の方に移動をお願いします」

給仕に案内されて入った食堂のテーブルは夕食の準備が整えられており、俺達の倍ぐらいの給仕が控えていた。

上座に教授が座り、マーガレット、マリア、俺の順番に座り、反対側にはマルコム、ジュディアス、アンネ、ハヤテの順に座った。

控えていた給仕が全員に食前のワインを注いだ。

「さて、諸君。これからの予定を簡単に説明するから、傾聴して頂きたい」

教授がグラスをスプーンで鳴らしてから話し出した。テーブルに座った全員が教授に注目した。

「マーガレットくんは明日の朝、宿屋の者に手配して食料品を仕入れてくれ。遺跡を監視している騎士団に対する命令書を貰う必要があるので、私とマリアで領主の伯爵の所に挨拶に行ってくる。

調査期間中の食料の補給は砦の騎士団に支援して貰うつもりだ。

ジュリアスくん達は盗賊団の戦利品を売り払ってくれ、本当は3日ぐらいのんびりしたい所だが、明後日の朝に出発する予定だ。何

か質問はあるかね」
教授は暫く質問を待ったが、誰も発言しなかった。
「それでは、調査の成功を祈って乾杯しよう。宿の主人が最高級のワインだと自慢していたぐらいだから、期待しても良いだろう」
教授はワインを持ち上げて匂いを確かめた。
「うむ。少なくとも悪くは無さそうだ、では、諸君、ワインを持ちたまえ」
全員、教授に言われてワインと持ち上げた。
「調査の成功を祈って、そして、世紀の大発見があらんことを祈って、乾杯！」
教授の掛け声で、一斉にワインを飲んだ。俺も皆の動きに合わせてワインを口に含んだ。アルコールに下戸な俺でも豊穣で奥深い味わいの旨いワインであることは分かるのだが、どれぐらい高級なのかさっぱり分からない。
対面に座ったマルコムとジュディアスがしきりと感心した様子でワインを味わっているところを見ると、かなり上物なんだろうなとは思うが。ハヤテはアンネは俺と同じらしく普通に飲んでいた。
暫くの間、ワインを堪能した教授が給仕に合図すると前菜と思われるサラダが運ばれてきた。続いてスープ、メインデッシュとフレンチのフルコースのような豪華な夕食だった。
夕食を終えると割り当てられた部屋に入って早めに寝た。

翌日の朝、ハヤテとマルコムの3人に割り当てられた部屋のダイニングキッチンで朝食を食べ終えるとマルコムに港を見学に行かないかと誘われた。
「モントールの港には大型の船が集まるんだよ。一度に船を着けられないから、沖の方に巨大な船が見渡す限り並んで、それは素晴らしい眺めだよ」
技術レベルが中世なら、スクーナーかキャラック。あるいは、ガ

レオン船を生で見れるかもしれない。昔から帆船が好きで、木製の帆船模型に手を出したこともある。生でガレオン船が見れるかもしれない。
「いいですね。是非、連れて行ってください」
「ハヤテはどうする？」
「ジュディアスと盗賊団の戦利品を売りに行く予定だ」
「そうでしたね。忘れてました。残念だけど港は諦めましょう。僕も手伝いますよ」
「いや、俺とジュディアスの2人だけで十分。人数が多いと逆にやり難いからな。その代わり、アンネを誘ってやれ」
「分かりました。では、リオンくん。行きましょうか？」
マルコムが立ち上がったので、俺も立ち上がってマルコムと一緒に部屋を出て、アンネを誘いに向った。

俺とマルコムが並んで歩き、アンネはその後ろを歩いた。道は広いので3人並んで歩いても問題ないのだが、アンネは遠慮してマルコムと並んで歩こうとしなかった。
港に近づいている証拠に徐々に潮の匂いがきつくなってきた。臭覚が敏感になった所為が鼻につんとくるに匂いがきつい。
倉庫が立ち並ぶ道を進んでいくと、目の前に港が見えた。沖の方に見渡す限り、船が停泊している。帆が畳まれてマストしか見えない船が多いが、数艘は帆を張って動いていた。三角帆のスクーナーもあれば、四角い帆と三角帆の両方を張ったキャラックかガレオン船もあった。
現在の巨大な船を見慣れているためか、意外に船が小さいなぁと思った。大きな船でも長さが３０ｍぐらいしかなさそうだ。
俺達は船が良く見える位置で立ち止まって、並んで船を眺めた。
この世界には浮揚や飛行の魔法が存在している。魔法の力を利用

すれば推進力を得ることも空を飛ぶことさえも地球よりは簡単に実現できるはずだ。
「船の推進力は風力かぁ」
「なんだって？」
俺の呟きが聞こえたらしく、マルコムが聞き返してきた。
「つまり、船は帆で風を受けて進むんだろう？」
「当たり前だろう。教会には魔力で動く船があると教授に聞いたことがあるけど、専用の魔術師が必要になるからね。まだ、実用的じゃないそうだ」
成程、確かに魔石から魔力を取り出して活用するには高度な技術力が必要だ。この世界の魔法理論はかなり遅れているのだろう。
「船は風上に向かって進むことができるの？」
「なんだ、リオンは何も知らないんだな。風を帆で受け止めてその力で船は進むんだ。風が吹いてくる方向に向かって進めるはずがないだろう。なんでも三角形の帆なら横向きかちょっと風上に向かって進むらしいけど、僕は船乗りじゃないからね。良く知らないよ」
「翼の原理じゃないの？　風向きに対して４５度の角度で進めるんだろう？」
「翼の原理のことは知らないけど、確かに４５度がどうとか教授に聞いたことがあるよ。教授に聞いたときは、船乗りが経験上知っていることでどうして風上に向かって進むことができるのか分からないと言ってたよ」
「そうか」
どうやら風上に向かって進む原理も解明されていないらしい。
「翼って、鳥の翼のことかい？　船とどんな関係があるんだい？」
「えっと、何かと勘違いしてたみたいだ。忘れてくれ」
「そうなのか、でも、教会では船を空に浮かべて飛ばせる研究がされているそうだよ。教授が空を飛ぶ船のことを男のロマンだと言って騒いでたよ。まぁ、船に鳥の翼を着ける訳じゃないだろうけどね。なんでも浮揚の魔術を応用した技術で空に浮かべることが可能らし

い。
前文明の遺跡から空を飛ぶ船が幾つか見つかっているそうだけど、教会に独占されたと言って教授が残念がっていたよ。
アンネは何か知らないかい？」
「残念だけど、私は何も知らないわ。噂ではアラーモ王国に秘密の研究所があるそうだけど、神官長や司祭に聞いても、そんな場所はないって否定されるだけらしいわ」
「やはりね。教授も教会内でも極秘にされていると言ってたから、アンネが知らないのも当然なんだろうね」
「何も知らなくて、ごめんなさい」
「いや、アンネは悪くないよ。知らないのが普通だからね。教授やマリアさんの方が異常なんだよ。何百年も教会の内情を監視しているらしい」
俺達は暫くの間、黙って船を眺めていたが、やがて「そろそろ帰ろうか」とマルコムの意見で、宿屋に帰ることにした。

「キャー！」
倉庫が立ち並ぶ通りをマルコムと並んで歩いていると、微かに女性の悲鳴が聞こえた。隣のマルコムを見ると、どうやら気付いていないらしい。アリスが方角は右側３時の方向、距離は約５０ｍと伝えてきた。確かに、普通なら例え注意していたとしても、聞き取るのは難しいだろう。
関わりたくないので俺は無視することにした。
「これからどうするんだ？　宿屋に戻るの？」
「そうだね。どこかで昼食を食べて、買い物に行きたいね。酒とつまみを仕入れておきたい」
「いいですね。アンネさんはどうですか？」
「えぇ、勿論、私は構いませんわ」
後ろを向いてアンネに聞くと、アンネも同意してくれた。

俺達は昼食を食べ、午後に買い物をしてから宿屋に戻った。

14話

陽が沈む前に宿屋に戻った俺達はアンネと別れて割り当てられた部屋に戻った。簡単にシャワーを浴びて身だしなみを整えてからマルコムと一緒に最上階の談話室に向った。

談話室に入るとジュディアスとハヤテ、そしてマーガレットがテーブルに座って寛いでいた。マルコムはジュディアスとハヤテが座っているテーブルに向かったが、俺はマーガレットが座っているテーブルに近づいた。

「リオンくん。おかえり」

「ただいま、マーガレットさん」

「何処に行って来たの？」

「最初は港に行って船を見学してから、午後は買物でしたよ。お菓子とお酒を仕入れてきました」

「あら、いいわね。私も買物したかったなぁ」

マーガレットは疲れた顔をして答えた。

「マルコムとアンネの2人がお菓子を大量に仕入れましたからマーガレットさんの分もありますよ。マーガレットさんの方はどうでしたか？」

「私は荷物の積み込みよ。1日中、大量にあるワインと高級食材を魔法のコンテナに積み込みしてたわ。今回の旅の分よりも教授の自宅用の荷物の方が遥かに多かったわ」

「それは、ご苦労様でした」

「学院都市に帰ったら褒美を買って貰う約束でなきゃ、やってられないわ」

「褒美ですか？」

「そうよ。今回の仕事は学院とは関係ないもの。特別手当がなきゃ来なかったし、今日の荷物も大部分が教授の私物だもの、褒美ぐら

い当たり前よ」
「成程、確かにそうですね」
俺は意外としっかりしてますねと言いそうになったが、なんとか口に出さずに済んだ。この様子では相当高価な褒美を買って貰うつもりなんだろう。

「ところで、マルコムが教授が船を空に飛ばす研究をしていると聞きましたが、どんな研究をしてるんですか？」
「私は興味が無いから良く知らないけど、遺跡で見つかったガラクタでマルコと一緒に遊んでいるわ。
教授は下手の横好きよ。私が言うのも何だけど信用しない方がいいわよ。機械に関するセンスが致命的に無いのよ。教授と比べるとマルコムの方がまだまともなのかもしれないけど、私から見れば2人とも機械音痴だわ。
興味があるなら教授に聞けば教えてくれるけど、覚悟して聞いた方が良いわよ。古代文明のうんちくを語り始めると下手すると半日ぐらいずっと話を聞くことになるわ」
「でも、古代文明の遺品は教会が独占しているって言ってませんでしたか？」
「確かに教会は遺跡の遺品を集めてるし、研究成果を極秘にしてるけど、教授だって倉庫2つ分ぐらいのガラクタを集めているわよ。教授に言わせれば、価値の無いガラクタだから教会は手を出してこないと言っているけど、そんなことないと思うわ。教授は価値がわかっていないだけだと思うわよ。教授が言うほど教会は酷く無いわ。
教会は古代文明の遺品を無理やり奪い取るようなことはしないわ。まぁ、王族や貴族に手をまわして手に入れることはあるみたいだけどね。
教授は教会に対してライバル意識が激しいから話半分に聞いた方が良いわよ」
「そうですか、マルコムも教授と同じことを言ってたから、てっき

り教会はあくどい組織なんだと思ってました」
「マルコムは教授の弟子だもの。教授と同じ意見に決まってるわ。最初はあんな風じゃなかったけど、近頃、話し方も性格も教授とそっくりになってきたわ」
「確かに、マルコムの話し方は教授と似てますね」
「そうでしょう。私は嫌いじゃないから良いけど、マルコムには似合わないと思うわ」
マーガレットはふうっと溜息をついて、カップを取り上げてお茶を啜った。随分と疲れているようだ。
暫くの間、黙ってお茶を啜っていると談話室に宿屋の給仕が入って来た。入口で部屋の様子を眺めてからマーガレットに素早く近づいて紙切れをマーガレットに渡すとそのまま外に出て行った。
マーガレットは紙切れを見ると、再びため息をついた。そして、顔を上げて俺を見た。
「教授とマリアさんは伯爵の晩餐に招かれたみたい。2人とも帰りは遅くなるそうよ」
俺は伯爵がどんな人物なのか聞きたいと思ったがマーガレットがいかにも疲れた様子なので質問することを控えた。
「そうですか」
「2人以外は揃ってるから、夕食の準備ができたら食事にしましょう」
「そうですね。マーガレットさんは早めに休んだ方が良いですよ。教授のことは使用人に任せれば大丈夫です」
「そうね。何時に帰ってくるか分からないし、そうするわ」
給仕が夕食の準備が整ったと言いに来るまで、俺とマーガレットは黙ってお茶を啜った。
マーガレットは皆に教授とマリアが伯爵の晩餐に招かれたことを伝えて全員で食堂に移動した。俺達は昨日に続いて豪勢な夕食を楽しんだが、マーガレットは疲れているため会話は殆どないし、教授とマリアがいないせいか何となく寂しい気がした。

そして、翌日の早朝に俺達はモントールから北東に向かって出発した。朝の８時にはモントールの街並みは後ろの背景と化していた。前方の遠くの方に横に広がった山脈が見える。スターレン渓谷はあの山脈の中にあるのだろう。スターレン渓谷まで１泊２日の予定だ。

前の座席に座った教授の話では、伯爵から騎士団の補給部隊と一緒に砦に行くことを提案されたが、補給部隊の大型馬車の速度に合わせたら砦まで３日から４日になってしまうので断ったそうだ。

俺達の馬車は順調に進み、予定通りの野営地点でテントを張った。

天気が良いので食堂用のテントは張らずにテーブルは野外に並べたため、見上げれば満天の星空を眺めることができる。

超高級宿屋の夕食とは比較することが間違っているぐらい質素な夕食だが、使われた素材は同程度の高級品で味付けも俺好みのためか俺にとっては却って昨日の夕食よりも旨いと感じた。

暑いので少し離れたところに盛大に燃やしたたき火がキャンプファイヤーのようで昔のボーイスカウトの夏のキャンプのことを思い出してしまった。

教授とマリアがいるだけで昨日と比べて賑やかな感じがする。教授の隣に座っているマーガレットも楽しそうに見える。

「そうだ。遺跡の砦について伯爵から仕入れた情報を説明するから、皆。聞いてくれ」

食後のワインを飲んでいた教授が皆に呼びかけた。俺とマリア、アンネの３人は食後にお茶を貰ったのだが、他のメンバーは昨日の超高級宿屋で仕入れた高級なワインを飲んでいた。

教授は皆が注目するのを確認してから話し始めた。

「遺跡の砦のことだが、昔は５００人程度が常駐する小さな砦だった。遺跡のダンジョンが新人の訓練に丁度良いと言うことで、今は騎士団の新人訓練用の砦になっているそうだ。

２０年ぐらい前に王国の許可が出てから砦の規模が拡張されて毎年１０００人の新人が砦で訓練を受けている。今では約２０００人の騎士が常駐しているらしい。
ダンジョンの最下層は立ち入り禁止区域になっているが、直前の１２階層までは騎士団の訓練に使われている。
お陰でダンジョンを掃除する必要がなくなったので、都合が良いのだが、何でも、最下層には数匹のオーガが居るらしい。
１２階層までは魔法の昇降機で行けるそうだ。１２階層から最下層は階段を下りることになる。そして、最下層に降りると５０ｍ四方の広場があって数匹のオーガがうろついていて、その奥に封印の扉がある。
伯爵から必要ならオーガ討伐の手伝いを出してくれると言われたよ。
ジュディアスくん。オーガの討伐は出来そうかね？」
教授がジュディアスを見ると。
「オーガなら地下迷宮の１５０階層相当ですね。マルコが居れば私達だけで十分です」
「そうか、討伐の手伝いは断っても良いかな？」
「えぇ、大丈夫です」
「それと、砦の司令は伯爵の娘のルイス嬢だそうだ」
「ルイスですか？」
驚いた顔でマルコムが教授に聞いた。
「そうだよ。君達とルイス嬢は仲が良かったそうだね。伯爵から君達が子供の頃の話をいくつか教えてくれたよ。
なんでも3人で探検に出かけたそうだね。捜索隊を出して大騒ぎだったと伯爵が懐かしそうに話してくれた」
「まぁ、子供の頃のことですから」
マルコムが照れた様子で教授に答えた。
「とにかく、久しぶりに会うのだから親交を深めると良いよ」
教授は上機嫌な顔でしきりと頷くとワインをグイっと飲んだ。ジ

ユディアスとマルコムはお互いに顔を見合すと2人とも嬉しそうに笑った。

翌日。俺達の馬車は大きな川を左手に見ながら山間の奥深くへと進んで行った。

午後3時ごろに騎士団の砦が遠くに見えた。騎士団の砦は山の絶壁の下に、まるで壁に張り付いているかのように建てられていた。

砦は丸太を組んで作られた巨大な柵に囲まれていた。防衛の観点から考えると砦としては少しお粗末な備えのように思うが国境の守りとして建てられた砦ではないのでこれで十分なんだろう。

馬車が丸太を組んだ大きな門の前に近づくと門の横の扉が開いて、5、6人の騎士が出てきた。馬車が騎士の手前で止まると2人の騎士が近付いてきた。教授が伯爵の命令書を見せると騎士団は砦の中に戻り、丸太の門が開いた。

馬車はゆっくりと砦の中に進んだ。

砦の中は中央に5階建ての建物、左右に3階建ての建物が2棟ずつもあって随分と広い。そして、広場で数百人の騎士達が戦闘訓練をしていた。

馬車は訓練の邪魔をしないように広場の隅を迂回して中央の司令部らしい建物の前で止まった。

教授とマーガレットが馬車から降りたので、俺もマリアと一緒に馬車から降りた。ジュディアス達も馬から降りて馬を馬車に繋いだ。結局、馬車の前に全員が集まった。

砦の中央の建物から2人の騎士が出てきて俺達の所へ近づいて来た。

「ルイス！」

マルコムが先頭の女性騎士に呼びかけると女性騎士は驚いた顔をした。金髪碧眼の西洋系の美人さんだ。身長は１７０ｃｍぐらいだ

ろうか、ジュディアスよりも少し低いようだ。騎士の鎧を着ているが他の騎士と違って鎧の色が赤で統一されている。
ルイスの後ろに副官と思われる男性の騎士が付いてきている。茶色の髪に灰色の目、身長は１８５ｃｍぐらいで立派な体をしている。

「これは驚いた。マルコムじゃないか、それにジュディも。２人揃ってどうしたんだ？」
「僕は教授の助手だよ。ジュディは護衛に雇われたんだ」
「遺跡の調査グループが来る連絡は受けたが、２人が来ることは知らなかった。
そう言えば、マルコムは助手に昇格したそうだな。お祝いには行かなくて失礼した。
なにせここの司令だからな、あまり長い期間を留守にする訳には行かなかくてな、兎に角、おめでとうを言わせて貰うよ」
「ありがとう。
それで、こちらが教授だ」
マルコムが教授を紹介すると、教授が前に出た。
「これは失礼しました。私が砦の司令のルイス・アーネストです」
ルイスは教授に右手を差し出した。
「私はマーリン・トワイライト。教授と呼んでください」
教授は握手しながら自己紹介をした。
「こちらが学院の顧問のマリア・エーデルワイス。マリアの助手のリオン・ウォートくん。こちらは私の助手のマーガレット・アマデウス。ジュディアスくんの所に居るのは護衛を依頼した冒険者です」
「これはご丁寧にありがとうございます。連絡があったので急いで研究員用の施設を掃除させたのですが、まだ終わっていません。もう少しで終わると思いますので、お待ち頂くか掃除が終わった部屋に入って頂くことになると思います」
「お手数をお掛けしたようで申し訳ない。それでは掃除が終わった部屋で待たせて貰います」

「それでは、副官のジム・マッコイに案内させましょう。
ジム。後を頼むぞ」
「了解しました」
「それでは、これで、失礼します」
と司令はお辞儀をすると、戻って行った。
俺達は副官のマッコイに案内されて、研究員用の宿泊施設の中に入った。

研究員用の宿泊施設は3階建ての建物で研究所長用と思われる部屋、上級研究員用と思われる大きめな個室が6部屋、2人部屋が12部屋、大食堂と厨房、大会議室、応接室、男女用の風呂が完備されていた。
俺は個室の1つを確保した。ハヤテとアンネは各々2人部屋を確保し他は個室だ。教授は当然のように所長用と思われる部屋に入った。

7時になると、大食堂で全員揃って夕食を取った。マルコムとジュディアスは司令に招待されたので不在だ。
「最下層の掃除は司令も手伝って暮れるそうだから、リオンくんは、僕たちと一緒に、最下層の掃除が終わるのを待てばよいよ。
昼頃には掃除が終わると言っていたから、昼食を食べてから最下層に出かけるよ」
「分かりました」

翌日、予定通りに昼までに最下層の討伐が終わり、昼食後にダンジョンの入口い集合すると、司令自からダンジョンの案内をしてくれた。
エレベータで12階層に下り、そこからダンジョンの端まで歩い

て、階段を下りると１３階層、すなわち最下層だ。
最下層の入口は５０ｍ四方ほ大部屋で何もいなかった。ここにオーガが２０匹ぐらい居たそうだが、ジュディアスと騎士団が午前中に討伐してしまった。
奥に進むと壁の中央に巨大に扉が見えてきた。以前、マリアが見せてくれた封印の扉と同じものがそこにあった。
扉の奥に何があるのかは知らないが、この封印の扉を開けることが俺の仕事だ。
「それじゃ、リオンくん。実験室でやったように封印を解くわよ」
俺はマリアに頷くことで返事をした。
「みなさーん。どんな危険があるかわかりませんので、最低でも２０ｍは離れてください。２０ｍよりも近づいたら、命の保証はできませんよ」
マリアが大声で宣言すると。皆は大慌てで扉から離れた。特に離れなくても危険はないと思うが、俺は何も言わないことにした。
俺はウェストバックから杖を取り出し扉の中央に近づいた。
扉の中央には１０ｍぐらいの巨大な魔法陣が描かれており、保護バリアが有効になっている。触っても静電気に触れた程度の危険しかないが、全力で体当たりをすればそれなりの怪我をするだろう。まぁ、鉄の壁に体当たりするようなものだ。

学院の実験室でやったとおりに保護バリアに対応するための魔法陣を展開して発動した。扉を覆っていた青白い魔法のバリアが静かに消滅した。
すぐにマリアが俺が展開した魔法陣を維持するための魔法陣を展開して発動したので、俺は魔力を込めるのを止めて杖を下した。そして、扉の中央に近づいて右手を印の上に当てた。
手を当てたルーン文字が光、まるでデジタル回路のように光のラインが扉の全体に走った。そして扉が静かにゆっくりと開いた。

扉の奥は巨大な倉庫のようになていおり、中央に巨大な乗り物が置いてあった。胴体の全長は１４ｍぐらい、高さは４ｍぐらいで、三角の水平翼と船尾に垂直翼。ジェットの噴出口は見当たらないところを見ると、ジェットエンジンのような推進装置は使われていないのだろう。

飛行艇と言うよるも、どちらかというと宇宙船のような感じだ。まるで、地上と周回軌道の間を行き来するシャトルのような感じだ。宇宙船版の揚陸船と言えばよいだろうか、そんな感じの船で、全体が青白く光っている。扉の保護バリアと同じようなバリアに包まれているようだ。

「これは、一体何だ？　見当もつかん」

と教授が呻いた。

「何かの建物ですか？」

とマーガレットが聞いた。確かに2階建ての建物ぐらいの大きさがある

「空を飛ぶ飛空挺かもしれない、何かの論文で見たような気がする」

教授の隣でマルコムが呟いた。

「こんな巨大な代物が空を飛ぶのかね、それは有り得ないだろう」

と教授も上の空で呟いた。

「扉と同じ保護バリアに包まれてる。近づくと危険だ」

と教授が皆に警告した。

『前方の未確認飛行船より通信が入りました。接続しますか？』とアリスが聞いた。俺は、通信を無視するかどうか考えたが、結局、接続することにした。

『応答を確認しました。マスター認証キーを求められています。マスターのＩＤ、パスワードで承認しますか？』

俺のＩＤで承認が通るとは思えないが、ダメ元でアリスに認証キーを応答させた。

『マスターとして認証しました。

私はアルゴス。次元航行船です。船体番号ＡＸ００７ＤＣ７８９９４３。命令待機状態に移行しました。命令をお願いします』
驚いたことに、マスターとして認証されてしまった。マリアが言っていた通り、神が残した遺産の一つなのかもしれない。
「マリアさん。これが何なのか、ご存じですか？」
「えぇ、知ってるわよ。マスターの承認は終わった？　もし終わったら、操縦方法とかの情報を貰っておくと良いわよ。これは神があなたの足として残した乗り物よ。あなたの自由にすれば良いわ」
教授とマルコム、ジュディアス達もアルゴスの周りを回ってアルゴスを観察している。どちらにしても、しばらくはアルゴスから離れないだろう。
俺はアリスに命令してアルゴスから入手可能な情報をすべてアリスに転送させた。

俺とマリアはテーブルと椅子を取り出して椅子に座り、お茶を用意した。俺はアリスに転送されたアルゴスの情報を調べながらお茶を飲んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6647t/

神様からもらった遺産は異世界でした

2011年8月16日21時22分発行